

384

234



始



384-234



西比利亞巡遊記

高倉 忍



卷頭に

本稿は、予が曩に大正八年六月、我が衆議院より特派せられたる、西比利亞派遣軍隊、議員慰問使の一行に加はり、東部西比利亞三洲に亘る、駐屯軍隊を歴訪慰問し、兼て各地方の情勢を視察し、當時、我が中外商業新報紙上に『派遣軍隊慰問記』と題し、八十回に亘つて連載した通信記事であつて、今回、大方の需に應じて、標題の如く改題し、校訂、上梓した次第である。

巡遊、三十日、其間、殆んど汽車中に起臥し、只僅に、浦潮、哈爾濱に於て、四日間ホテルに宿泊した外、其大半は、動搖殊に激しい列車内に、濛々たる砂塵を浴び、拂へども去り難き群蠅に惱みつゝ、仄暗い燭光を便りに、漸くにして執筆したものであつて、素より明窓淨几の下、推敲を重ねたものでないことは勿論、孰れは新聞記者の新聞記事、觸目する處、道聽途説を、拙速に通信したるもの、則ち軍隊慰問記を主とし、之れに添ふるに、印象記、見聞録を以てしたるものである。随つて其取材、文章、到底、識者の前に示すの勇氣なきも、短時日間、而も匆忙たる旅行中、僅の餘裕すら剩さぬ、日程の寸暇を儉んで筆を驅つた本稿を、其收穫として一書を成すことを得たのは、一莖の草に添ふ影だにも劣る、貧しき予の過去の生涯にとつては、懐しき追憶の料であると共に、亦、好個の記念たるを失はぬ。

惟ふに我が帝國を圍繞する、世界の三つの大いなる謎の國―亞米利加、支那、露

西亜―は、過去、現在に於ては素より、其將來に於ても、必ずや、其交渉常に絶えるの時はなからう。殊に謎の中の謎の國―露西亞に對しては、舊ザール帝國崩壊し、ソビエツト露國の組織未だ全く成らずと雖、而も我が國との交渉日に深きを加え、特に西比利亞に就ては、更に密接、至大の干渉を及ぼし、現に我が出兵以來、既に三歳、巨億の國帑と數千の犠牲とを拂うて、只管、秩序の維持に任じてゐる。其懸案たる、所謂緩衝地帯の設定、未だ其實現を見ざるに、端なくも、厚く氷に鎖されたる、ニコライエフスクに於ける、バルチザンの殘虐、無道の秘密は解けて暴露せられ、今や我が國民の血は沸いて、其暴戾に悲憤し、慷慨の叫び、天を蔽ひ地を撼かし、我が廟議、亦堅く決する處あるものやうである。

斯くて、我が對西比利亞策の講究は、又茲に新なる題目として、再び輿論の興起を促す機運に際會すべき形勢に導かれてゐる。兎まれ、西比利亞問題は舊くして又新なる問題である。而して今は、我が帝國にとつては、現在は勿論、延いて其將來に繋がる、宿縁の糸であつて、又、同時に、安危の分るゝ重大問題である。而も、西比利亞の情勢、尙、渾沌として其裁する處を知らざる、實に今日の如く、果して何れの日か其歸趨を見るであらうか？水到つて渠成るか、將又、霜を履んで堅氷到るか、蓋し、其解決は、至難の業である。

巡遊後、爾來已に一星霜、書中記する處、既に過去に屬し、隨つて、現狀に疎く

相異した點もあるが、西比利亞の形勢、實に轉變極りなき現今に於て、又洵に已むを得ぬ次第であつて、歴史的記録として、參考の資料ともならば望外の幸である。本稿素、昨年歸京後、直に、編輯校訂に着手して之を終えたるも、印刷の都合上、一年後の今日、漸く上梓するに至つたのである。而して各種調査資料の如きも紙數の關係上之を割愛することゝした。讀者幸に諒せられんことを望む。

本書の出版に際し、特に予をして、議員慰問使一行中、唯一の新聞記者として此行に加え、西比利亞視察の機會を便宜とを與へられたる、田中陸相及當時の衆議院議長大岡育造氏を始め、議員團一行各位並に十日會同僚諸君、衆議院及、陸海軍接伴委員諸氏、駐屯軍隊各將士、警衛の任に當られたる各士卒諸君に對し、茲に更めて、深厚なる敬意と感謝の意を表す。

大正九年六月中旬

曾遊の地と人とを偲びつゝ、
東京芝の寓居に於て

忍 識 す

西比利亞巡遊記目次

派遣議員團東京驛出發……………

慰問使一行の組織成る—日露貿易の要港敦賀町の驛待—御用船臺中丸に便乗して—浪騒ぐ日本海の眞只中より—東清鐵道埠頭棧橋に投錨す

露國東方の關門ウラジオストツク……………

金角灣を抱ける浦潮斯德—蠢々たる埠頭苦力の群れ—セントラルホテルの樓上にて—鈴蘭の花を手にした可憐な少女—大谷軍司令官に慰問の辭を呈す—川原海軍警備隊司令官を訪ふ—留の累落に憫む在留實業家—二重國籍を有する十萬の鮮人—危険極まる過激派と鮮人—海外同胞子弟の教育問題—兵站部の苦心と鐵道の管理—ゾロトイ・ローグの招宴—由比參謀長の熱辯慷慨—胸に又描くよ新日本—六千哩の全線に軍需品を配給す—慰問袋には女文字を署名して—傷けるチエツタの士卒を慰撫す—大理石を敷詰た様な三十哩の結氷—名譽ある我が三笠艦上の午餐會—往年の敵國を救援せん爲に—無比の護國の士は偶然に得られず—可惜西比利亞の露と化して—獨逸俘虜收容所を視察す—我等の祖國は滅亡の外ない—日本に依てのみ正義仁道を識る—「ファスト」なども上演して—日本語で「原敬閣下は」御壯健ですか—大谷將軍主催の歡迎晚餐會—ホ將軍を訪ひ更に自衛團に臨む—危地に向つて強行出發す

ウラジオストツクよりハルピンまで……………

目次

小山のやうに大きい車體—電燈の代りに燭燭を點じて—東清沿線最初の慰問を試む—激語を囁ねた「生死憂樂」の檄文—麗光輝く山野に綠樹青草涯なし—曠野を蔽ふ蒼空に白雲湧いて—露支の國境ホグラニ—チナヤ—薄紫の餘映遂に一抹の殘光を漾はし—車窓から眺めた沿線の諸情景—散步好きな露人と驛の賣店—車前に賣る花束と鶏の丸煮—主客顛倒した露支人の態度

北滿の大市場ハルビン

故英雄薩公の最後を現地に弔ふ—駐屯各部隊を巡回慰問す—沖、横川兩志士の墓碕を展す—ス氏と我民會を訪ひ松花江埠頭を視る—近侍者の物語を聴て更に哀し—一八九六年に於ける露國の野望—軍事的野心を棄て、經濟的施設—故國を偲ぶモストツヤ日本人街—隔世の感ある我銀行の殷盛—在留邦人の誇りと其實勢力—市の懸案事業と附近の利源—露國に斷念せられ日本に拾はる—對外政策として淺薄ではないか—米飯を食ひつゝ、大興安嶺を越ゆ

砂漠の中のマンヂユリ

冷たい蒙古風に面を曝して—戰友の心盡しの手向草—鐵道俱樂部に交はる巴巴—六角堂に親善の車を圍んで—露國側代表者の感謝の辭—車中將の説く日支親善論

國境稅關事情

混沌亂雜極る滿州里驛—居留民の動靜と市の土地建物—東清後員加爾鐵道の接合地—對滿蒙貿易と運輸交通機關—滿州里地方の商取引關係—對蒙古貿易品と其狀況—通關手續上の注意事項—稅率と我官憲の交渉始末—便利な短期旅行券の發行—西の方チタ市に向つて—古英雄成吉思汗の戴冠式場—後員加爾と黑龍鐵道の分歧驛

西比利亞の京都チタ

第三師團司令部を訪問す—我が士卒の保健と思想問題—大庭中將の面上感激と昂奮の情溢る—後員加爾州廳の握手—篤實の好紳士タスキン州長—アタマン・セミヨノフとの會見—鏡の前の白菊と嬌麗な女優の姿—米軍に對して予は愉快を感じず—井上ホテルの招待午餐會—漏れ来る美しい旋律の流れ—三十而立の未成長の英雄—彼に對する最初の印象—ウラジミル王とウオツカ—露國の典型的武人の文藝觀—露西亞的理想の生んだスラア神話—名詩人の短曲を讀むやうな—不幸な時に眞實の親善は表はれる—「日出る國」より最大の援助を—「パンザイ」と「ウラー」を唱えて—オノガ河畔の古英雄を偲びしむ—「又再び」の別辭を殘して—神風吹く神聖地伊勢の壯丁—音に聞くコサツクの妙技—鞍上人なく鞍下馬なし

自由の曠野を求めて

舊露國陸軍の精華—ドン・ドニエール河畔—血と魂の傳統を享けた先天的武人—世界戰史上不朽の武名—ローマンチツクな古武士的面影—愛慕の情を一塊の土に—悲壯なる祖國復興の叫び

若き英雄の成長

アタマン廣場の頌德旗授與式—大なる暗示の深ふ深い沈黙—莊嚴敬虔なる宗教的儀式—朗々たる讚美歌の合唱起る—十字を切つて黙禱に耽る—「神我等と俱にあり」—永遠の時の與へた一瞬時

セミヨノフの人物

紛々たる毀譽褒貶の聲—是れ悉く漫然評妄の言—寧ろ擧兵に伴ふ附帶事項—例の六十一號命令間

題—彼の性格と其思想の發露—細民に對する深き同情と救恤—決して輕からざる其負擔—統領たる資質を備た好個の武人

主なき領事館出張所と民會……………一三二

西比利亞の野に咲く日本撫子—士氣振作の微妙緊急施設—旅券と濫造品と警察命令—東方文明國の市民的教養あれ

大庭師團長招待晚餐會……………一三六

四年前の回顧と感慨—赤心正宗の盃を舉げて—味噌汁を啜りつゝ、西比利亞の野を

星なき夜の街の灯……………一四一

闇に塗られた夜の公園—人待顔の白粉の花!!—總ては暗遷默移の裡に—旅の夢は更に醒めやすい
アンチヒーローとベスチャンカー—さらば「西比利亞の京都」—ペトロフスキーザオイトまで—後貝加爾西部の商業中心地

車中岸蜂座の大茶話會……………一四九

敵襲に備へる程の機敏さ—衆議院の露語の兩天才—軍扇高く上げて花の教盛を—典雅なる謠曲
「安宅の」二齣—名人の聲樂美は皮肉に揶揄ふやうに

死地に入つた勇士の物語……………一五四

軍事偵察由上少佐—光榮ある重大任務を擔ひて—寡言なる雄辯を以て—冷酷なる鐵門は堅く鎖さ

れた—回顧に輝く其眼を睜つて!!唯一の「小さい希望の窓」—曆日なき獄舎に時と日を算へて—敵手に發かれざる尙一つの秘密—物語を飾る挿話の女主人公—殷々たる砲聲は獄舎を揺り動し—牢獄の門は開かれたり—當年の活躍地を車窓に眺めつゝ、

西比利亞の明眸バイカル……………一六四

落日に輝く靜な湖面—彼女の有する其全身—予は旅行の記念と後年の思出に—湖上の落日と朝暾に別れて又會ふ—氷の皮下は絶えず燃焼—沸騰す—終世忘れ得ぬ壯大絶美—湖畔に撃られた汽船と浮船渠—異人の顔を眺める少女を捉えて—湖水に口濯ぎ草花を潤して—水晶の如きアングラの流れ

閑雅の都イルクーツク……………一七三

劍を抜いて威嚇する巡查—第一線の出征部隊を慰問す—孤城を死守した六百の勇少年—西比利亞の巴里イルクーツク—洗練された其市と市民—世にも稀なる皮肉の象徴—革命黨員アレキサンダ—第三世—自然の景趣を収めた美しい花園

アングラの水は流れて己まぬ……………一八三

イルクーツク市民の誇—其母バイカルの懷に抱かれて—靜な物語の結文のやうに—モテールンの一—夜—太陽の光輝と露の沾び—寶庫の門は世界に向つて開け—未だ見ぬベニス夕を偲ぶ—日本實業家の商談は打算に過ぎる—深夜線路内立往生の悲劇

黒龍線に向つて……………一九四

再び又チタ市に立寄り―ブリーダー人の民族自決運動―廣い野天に開く議決機關―アムールの危険線區に入る―西北利亞原頭平和祝賀式―議員の老兵も交つて分列式―突如森林中に銃聲起る―特別危険地帯のルフロオー―一千の礦夫を役する金鑽主の哀訴―貨車中の病小隊長を慰問す―只當日章旗を目標に避難す―附近の金鑽と林野に就いて―密林と處女地と「黒い土」―オムレフスキ―とブランデスの嘆美―黄金の鍵は何人の手に歸するか―黒龍沿線第一の機關庫

嗚呼田中大隊全滅の地……………

二二一

悲壯なりし其最後!!―戦死素より覺悟の前なれど―山田旅團長陣頭に立て復讐す―青草離々たる其墓碕―只老樹の一本墓側を護り孤影悲し―アレキセーフスク市民の感謝―八千の過激派に襲はれんとす

沃野千里の黒龍州……………

二二〇

未來の國を暗示する「曠野の道」―丸太小舎と跣足者と頼被りの女―日本語で「仁丹下さい、巻煙草を!!」―機關手に御祝儀を與へぬと―驛長までが過激派化して―長い冬の間「熊の窟」の伴侶

黄金の底ブラゴエシチエンスク……………

二二七

地圖を披いて守備状況を説く―進んで撃たんか將退いて守らんか―謝禮は一度云へば宜い―急襲岐阜提灯に涼味を添えて―地方農民は過激派化しつゝある―過激派の背後には猶太人―平塚副領事の過激派観―對過激派策を如何にするか―民會訪問と居留民の遭難談

山田旅團長の招宴……………

二二八

自治團長對日本軍感を説く―露國陪賓側の謝辭と交驛―露人には博辯宏辭の士は多い―先づ鞏固なる國家を建設せよ―軍權を代表して誠實なる國民に―黒龍州の中心市場ア市―金と林に恵まれ圍まれて―黒龍江の舟航實に八千露里―將來更に發展の運命を有す―ア市國立銀行の現状

支那領黒河を訪問す……………

二二五

二回の祝融後却つて大發展―民會と領事館を訪ひ故國料理を味ふ―徒芳園に於ける巴少將の驥迎―支那軍隊と軍樂隊に送られて―装甲車と警戒の歩哨に護られて―横井、正木、白田、前川の諸氏交々慰問す―黒龍鐵道用の大炭山―過激派に包圍せられたアルハラ―風聲鶴唳に驚く露人の妄想―アムール大鐵橋に立ちて

東部西北利亞の首都ハバロフスク……………

二二〇

日本座敷に手足を伸ばして―時代の變遷に討死した憐な死屍―兵士の病床を見舞つて親しく慰問す―栗田第十四師團長と會見す―極東過激派の策源地―反過激派の首領等奮起す―統治機關の現状―俘虜の建築した司令部と博物館―陳列品の豊富と巧妙な場内―勝敗を顛倒した日本海々戦―ハバロフスク公園の雄觀―北滿を睥睨せるムラビョーフ―功名富貴若し永へにあらば

栗田師團長主催の晩餐會……………

二七三

序樂と問奏に故山の風物を懷ふ―刺戟的な音樂を好む露西亞人―何處へ!!何時まで驅けるか?―世界に横ばる現代のスフキンクス―栗田中將と東氏の應酬

アタマン・カルミヨフの印象……………

二八〇

彼は草稿を手にして口を開いた―日本の援助は國民意志の發露である―大日本と將來の大露西亞

の爲めに—彼の瘦軀は満身是れ膽!!—副官を射ち殺して平然たり—彼の周圍に漂ふ一種の空氣—
苦樂に隨て我眼は涙に充つ—過激派は露國獨特の思想ではない

ザトン海軍根據地を訪ふ……………二八八

大洋の如き黒龍河心を溯江す—橋頭高く日章旗の飄るを見る—千九百年編成の黒龍艦隊—海軍工
場の職工は悉く過激派—洋々たる大江眼下に流る—海軍派遣隊の勞苦を懐ふ—丘陵上から瞰下し
た西比利亞の首都—三つの平行した丘上に建た市街—水陸運輸の利便と愉快な舟旅—クロボトキ
ンは克く國情を識れり—蜂須賀中佐分玉軍醫正等と惜別す

烏蘇里の危険地帯に踏入る……………二九九

中心市場にして危険なるイマン—狼退治にも全く困つてゐる—未來を囑望せらるゝスバスカヤ—
車窓指呼して實戰談を聴く—勇戦力闘して仆れた壯烈の最後

愈々歸途に就く……………三〇五

再び曾遊の地ニコリスクへ—購買組合法に依れば土地建物も—最後の笑はれざる滑稽劇—長春驛
食堂内の居留民驢迎會—入浴して大の字に寢轉びたい

重任を完ふして解團す……………三〇〇

將卒諸君の警衛を深謝す—三十日間七千哩百餘回の慰問—其勞や多とすべく其效亦大也

西比利亞巡遊記目次終

西比利亞巡遊記

高倉忍

派遣議員團東京驛出發

慰問使一行の組織成る

西比利亞派遣の帝國軍隊の慰問、並に同地方の狀勢視察の任務を帯びて衆議院から特派
せられた議員慰問使一行は、六月十日午後七時東京驛發列車に搭じ、朝野名士の見送りを受
けて敦賀に向つて出發した。一行は東武氏を團長に米田稷、藤野正年(政友)、正木照藏、

白田久内(憲政)、前川虎造(國民)、横井藤四郎(正交)、古川清(新政)の各派選出の八代議
士の外、衆議院より隨行を命ぜられた中村書記官、江川屬、其外更に陸軍省から特に一行
の爲めに東道の任に當れる、軍務局の岸本砲兵中佐、新聞記者として此行に加つた、予を
合して同勢十二人の團體である。車中守屋前代議士あり、早速喫煙室に小委員會が開かれ

久方振に氏一流の快辯に接した。扇子をバチつかせて辯じたる處、議場に於ける當年の俤を偲ばせ一同思はず笑殺せられずには居られなかつた、滔々として流れて盡きぬ守屋氏の辯舌は、汽車の駛るよりも更に早い。沼津驛を過ぐる頃、一同笑の裡に寢臺中の人となり、第一夜を車中に送り、翌十一日午前七時三十一分敦賀驛に着し、町民多數の出迎へを受け直に大黒屋旅館に投じた時には米原驛から同乗した古川代議士、同旅館で落合つた白田、横井の兩代議士の面も揃ふて、茲に漸く一行團體の組織が成つた。

日露貿易の要港敦賀町の驩待

朝餐一浴後、日露貿易の要港たる敦賀町主催の招待に應じ、棧橋から汽艇に乗じて敦賀港内を一巡し、水深く浪靜かな常宮灣に上陸して、神功皇后三韓征伐後凱旋上陸地に建立せられたといふ常宮神社に詣で、更に松原公園に武田耕雲齋一味の首切墓を見、萬象閣の驩迎宴に臨んだ時は既に正午を過ぐる三十分であつた。庄司町長を始め、會衆百餘名、町長の懇篤な驩迎送の辭があつて、一同乾盃、一行の前途の安全を祝され、東團長亦之れに

對し、敦賀町の厚意を謝し其の將來の發展を祈る旨の答辭の陳べ、茲に初めて第一回の團長振を發揮した。一行搭乗する御用船臺中丸は午後三時の解纜である。宴後再び汽艇に乗じて棧橋に上陸、直に船中の人となり此處に見送られた庄司町長等と食堂に盃を擧げて敦賀町及町民諸君の爲に乾盃した。間もなく同地駐在の露國領事の訪問があつて送別の挨拶を受けた、既に十年來、駐在して居るといふ領事が、覺束ない日本語を談じ更に通譯を介して送別の辭を述べ、日露親善、兩國貿易の發展の要を説く處、其本國の運命を思ひ合はさしめて何んとなく、一種の哀感を覺えざるを得なかつた。

御用船臺中丸に便乗して

午後三時二十分、出帆を報する鐘と共に我臺中丸は一行の外新に西比利亞に出征の軍人諸君と、幾多の軍需品とを搭載して徐々解纜し始めた。一行は再び甲板上に立つて見送り人諸君と互に手を擧げて別辭を交換する間に、敦賀港を後に浦潮に向つて豫定の進路に就いた。出帆後再び食堂に於て岸本中佐の紹介で同船の陸軍將校諸君と接見會を催し、更に

又盃を舉げて互に前途の健康を祝し、終つて同中佐から西比利亞に於ける聯合國派遣軍の情況に就いて詳細なる説明を聴取し、初めて一行出張の目的の緒を得た感があつた。午後二時頃から降り出した小雨は時の過ぐると共に漸く烈しく、夕方から風さえ交へて、舷窓を撲つ雨の音も何となく物淋しい、灣内を出るに随ひ船の動搖亦加はつたので、性來船路に弱い予は晚餐の食堂もソコ／＼に、急いで寢臺に横はつた。同室の古川代議士はと見れば先刻來、食堂に麥酒の盃を重ねて、往年、滿洲の野に活躍した、追懷談に氣焰を上げて居つたが、何時の間にか船室に横つて雷のやうな鼾聲を發して、雨も風も船の動搖も知らぬ態である。

浪騒ぐ日本海の眞只中より

上下左右に動搖して已まぬ寢臺に、終夜眠りを爲し得なかつた予は古川君の鼾聲を羨ましくも、亦怨めしかつた。明くれば十二日、船は今や日本海の眞只中を航行してゐる。予は食堂にも出でず終日船室に籠居の己むなき有様であつたが、聞けば正木代議士も予と同

病であつたとかで、議會の海運船舶通を以て任する君は、一行同僚諸君から大分弄謙おかしなたやうである。此處で弄謙はれる位はまだしも、今後の議會、差當り第四十二議會の壇上で正木氏が今しも海運政策攻撃の演説に、舌鋒漸く熱せんとする一刹那「臺中丸で何うした」斯ういふ爆彈は議場の一隅から突如投せられないとも限らない。正木君たるもの、須らく其以前に於て先づ妥協苟合の秘策を盡すべきである。など、予は寢ながらに考へて獨りで笑つた。十三日午前七時過ぎ陸地見ゆとの聲に勵まされ、予も漸く勢ひを得て船室を出で甲板の上に立つて見ると行方遙かに點在した島々を眺め、薄く描かれた未だ見ぬ異郷の陸地の影を認めたまときは幾時間の後に上陸する浦潮を想見し、更に松平政務部長の發した無線電信の、上陸後の招待通知を受けて、其時の逼れるを想ふて元氣頓に加はつた。

東清鐵道埠頭棧橋に投錨す

午前九時頃船漸く進んで豫て聞き及んだ、名にし負ふ金角灣の懷に入つてチユルキン半島を右にし、エゲルシエリドを左側に眺めつゝ、前面ロスキヤ島を目標に進み、迂回して

浦鹽港内指定の東清鐵道埠頭棧橋に錨を投じた。

千時十三日午前十時、敦賀港を距る四百八十六里、航程四十時間を費したのである。船棧橋に繋がると陸軍側から原田參謀中佐、海軍側からは岸本副官代表し、菊池總領事、頭本代議士等の出迎ひを受け、臺中丸船長以下職員諸君の厚意を謝して直に上陸、軍司令部から差廻された自動車を驅つてスウェトランスカヤ街なるセントラル・ホテルに投じ、先づ食堂に參集して盃を擧げて互に其安着を祝した。

露國東方の關門ウラジオストツク

金角灣を抱ける浦潮斯德港

浦潮斯德はムラヴィヨフアムールスキ半島の南端、金角灣の北並に西岸の地に位し、西はアムール灣に臨み、港内水深く風波の患ひなく、而も規模廣大にして洵に天然の良港である、干満潮の差僅に二呎、五千噸級の商船六十隻を一時に碇泊せしむるに足るといふ

Адмиральская

に徴しても如何に廣大な港であるかは想像せられるであらう。金角灣は自ら二分せられ、アドミラルスカヤ埠頭以東即ち右の方深く灣入する處を軍港とし、其以西は商港である。市設埠頭、商港埠頭、浦潮義勇艦隊埠頭、東清鐵道埠頭の四埠頭を有し、水深六十乃至七十呎、最も浅い處でも二十五呎を下らぬといふこゝである。御用船臺中丸の碇泊した東清鐵道埠頭は軍の運輸部から其都度交渉するのであるが、近來は却々厚意を以て之に應じ種々の便宜を與へて呉れる相である。

蠢々たる埠頭苦力の群れ

埠頭には多數の支那苦力が口矢釜敷く喚きながら、荷物を運搬してゐる者もあれば、少ヨク地上に寝轉んでゐるのもあつて、初めて見た予等には汚穢見るに堪えぬ有様である。運輸部の米倉中佐の語る處に據ると、彼等の傭入れには三井物産の手を借りて居るが、労働時間の短縮などを申出で、使用は却々困難なるのみならず雨が降れば一切出て來ぬといふことである。天にも地にも、只一枚の着物が濡れるからとは彼等の口實であるが、其大

切な一張羅が襤褸も襤褸、何とも例へ様のない程汚衣着物だとは面白い。勞銀の如きも今は漸次昂騰して、一日一圓五六十錢を支拂はなければならぬとのことである。然らば露人の勞働者はと聞くに、一度彼等の就業中、過激派の煽動者があつて仕事半に罷業して以來、一切備はぬこととしてゐるか、勞働者の備入れには、土地柄却々苦心を要すると云ふことだ。

セントラルホテルの樓上にて

我議員團一行の宿舍に指定せられた、セントラル・ホテルは海岸大通りのスエトランスカヤ街―東京の銀座通り尾張町の十字街といったやうな位置にあつて丘陵の上に建設せられた浦鹽の市街中では稍平坦な般賑な通りである。海岸から直ぐに丘陵の上に建設した此市の街路は、悉く坂道のみで道路は圓い自然石を敷詰めてある。其の上を例の蓬々とした櫛といふものを入れたことのないやうな、髪と鬚髯とを蓄へた露人の馭者が、汚い二頭立の小さい馬車を縦横に驅つてゐる。其赤い服装に赤い帯を無造作に締めてゐる異様な姿も呑氣な露人には適はしい滑稽味を感せしめる。人通りの多いこと、全く驚く程で、東京な

どで電車が長時間停電をした時でもなければ、到底、見ることの出来ない圖である。通行人はと云へば見るからに汚い支那人や朝鮮人、さては露人の勞働者風なのが多く、道行く人の顔に世界の各人種と其風俗とが認められ、其處に混亂夫れ自らを説明して餘りある。

鈴蘭の花を手にした可憐な少女

中に楚々たる風姿の、歐洲都會地の婦人らしいのや、可憐な露西亞の少女達が、白い鈴蘭の花を手にしたなどを見受けるのは、好個の對照として殊に人目を惹く。現時の浦潮に我軍人を始め各國の軍人の來往の熾なものも勿論である。砂塵の濛々たる、馬糞の臭氣紛々たる、是れ悉く浦潮名物だと云はるればそれ迄である。此點に就ては惡道路改修の輿論の激しい東京市も、斯る類例の存することに依つて、大に人意を強うすることが出来やう。類例を以て口實とするには、此地の如きは恰好な場所である。然し石を敷詰めた道路には泥濘を見ることがないのは類例として遺憾ながら聊か缺ぐる處がある。

大谷軍司令官に慰問の辭を呈す

我議員團一行は、十三日到着後午餐を終るや船の疲れをも忘れて直に自動車を驅つて司令部から付添へられた原田參謀中佐と岸本中佐とを東道に、先づ軍司令部を訪問した。司令部では由比參謀長、稻垣、高柳の兩參謀少將以下幕僚を隨へたる大谷司令官は、一行を階上應接間に導き正式に接見せられた。此時東團長は一行を代表して左の慰問の辭を述べた。

衆議院は曩に我西比利亞派遣軍に對し前後二回、院議を以て慰問の決議文を呈せしが、今回更に吾々一行八名の議員を各派より選抜の上親しく慰問せしむべく派遣し、一行は今朝漸く當地に到着し、茲に親しく閣下に面接し慰問の辭を述べたるの機會を得たるは欣幸の次第なり。顧みれば我派遣軍が昨年八月此地に上陸以來、氣候風土を異にし、加ふるに言語風俗を同じうせざる異域に在りて、幾多の困苦と戦ひ缺乏に堪へ以て國家の重大なる使命を遂行しつゝあるは、國民の齊しく感謝し且同情措く能はざる處也。而して我將士が軍人として世界に其比なく模範を垂れ、忠君愛國の至誠を發揮して遺憾なきは、以て國民の意を強うせしむるに足るものあり、此點に關しては十分に安堵しつゝあるが、只國民の心竊に憂ふる處は、忠勇なる我將士の健康である、今や各位の任務倍々重大を

加へつゝある際、特に心身保健に心を致されんことを深く切望して已まぬ。言ふ迄もなく衆議院は國民の代表機關である、吾等亦其代表者として直に七千萬國民を代表し慰問を試むるものなれば、特に其諒解を望む。時恰も互寒を凌ぎ今又炎暑を迎へて之と戦はんとする際幸に、邦家の爲め更に一層自重自愛せられんことを望む。

東團長は斯く述べたる後、慰問の微意を表する爲め、酒、煙草を持參したれば、受納せられんことを望む旨を附言して、目錄を手交した。團長の慰問の辭を始終起立して謹聽して居た大谷司令官は、更に謹嚴なる態度を以て、衆議院の懇篤なる慰問を感謝し、更に君國の爲に全力を竭すべく、此旨を麾下將卒に徹底せしむべしとて慰問品の寄贈に對して深厚なる謝辭を述べた右終つて大谷司令官以下幕僚諸氏と一行との間に、種々懇談を重ねた後、更に又、別室に於て説明の任に當れる高柳參謀少將は、帝國出兵の目的より説き起して派遣軍の現状、並に其の配備及外國軍隊との關係、過激派の宣傳並に其の行動、オムスク政府の承認問題、日米軍隊の交渉乃至西比利亞に於ける我が經濟的發展策、排日及朝鮮暴動事件の波及状況等に關し約一時間に亘つて詳細な説明を試みた。

川原海軍警備隊司令官を訪ふ

一行は右講演聴取後、同司令部内の政務部に、松平政務部長を訪問したるも折柄不在の爲め刺を通じて慰問の辭に替へ、辭して再び自動車を驅り警備の爲め港内碇泊中の軍艦三笠に、司令官川原少將を訪問し司令官室に於て同司令官、三笠艦長以下各幕僚と會見した。此處に於ても亦、東團長から前記軍司令部に於けると同様の慰問の辭を述べ、慰問寄贈品目録を贈呈した。川原司令官戰隊一同を代表して答辭を述べ、次いで同司令官から海軍の警備状況の説明あり更に同司令官と一行との間に、對西比利亞策に就き、軍事外交の諸問題に亘つて快談數刻に及んだ。川原少將の意見には却々傾聴に値するものがあつたが四圍の狀況に察し、今は暫く其記述を留めて置かう。

留の累落に悩む在留實業家

斯くて我一行は翌日の招待に應ずべきを約して別れを告げ、轉じてキタイスカヤ街なる帝國領事館に臻り、菊池總領事、山口副領事以下各職員と會見し、東團長から挨拶の辭を述べると共に、在留人の状態、最近の兩國貿易關係乃至居留民の現状、留相場の變動に伴ふ我對露貿易に關する影響等に就いて質問應答があつた。

留の變動極まりなき現状を以て推移せんか、孰れの國を問はず對露貿易は殆んど絶望である。是等の影響は今や、直接我浦潮在留貿易商の上に及んで、大商店の如きは目下殆んど休業同様であるとのことである。而して此解決は一にオムスク政府承認問題の成否如何に懸つて居るやうである。然るに該問題は我帝國の提議に依つて今や巴里會議の重要問題として審議せられ承認問題に就ては列國亦自ら意見の一致點を有して居ることであるから其實現も遠きことではあるまい故に現在の不安は必ずしも將來にまで亘ることはないであらうとは我官憲並に在留民一般の觀測であるやうである。予の在浦三日間に於ける留相場は千二百留より千四五留の間を上下して居つたやうであるが、素より其相場の上下に就ては専門の相場師があると同時に思惑が漸次増加し、市民一般に蔓延の傾向があるといふことであつた。然し此の問題に就ては、假令オムスク政府の承認の實現を見るとも却々容易に解決せらるゝ問題ではあるまい、況んや貿易取引關係の密接な關係を有する我國に於て

は更に更に、慎重なる考慮を要する重大問題たることは勿論である。

二重國籍を有する十萬の鮮人

菊池總領事の談に依れば浦潮に於ける居留民は朝鮮人を第一に支那人之に亞ぎ邦人の居留する者約六千人内外である。戦前は僅に四千人内外であつたが出兵後毎月約三百人平均の増加率を示して現在に至つて居る。朝鮮人はニコリスク附近迄を加算すると、十萬以上に達する多數を占めてゐるが、是等は殆んど、悉く二重國籍を有してゐる。支那人の大部分は苦力であつて、其の數、浦潮のみで約三萬人と稱せられてゐる。日本商店は百二三十軒あるが其主なるものは、二三十軒に満たない。貿易業、雜貨類の販賣、寫真師、理髮業、洗濯業等は其主なる職業である。

朝鮮人の數の意外に多いのは、約五十年前、故國の飢饉に際して移住したものが、其の大部分ではあるが、更に政治上の不平を抱いて、此の地に一種の宣傳を試みんとて渡來した者もかなり多數在つて、先般の朝鮮暴動事件の如きも、此の地を以て其策源地と目されてゐる。今も尙、當地朝鮮人街では邦人に對して危害を加へる者があるから過激派と共に決して注意を怠つてはならぬとのことであつた。

危険極まる過激派と鮮人

尙、聞く處に依れば、當地在住の鮮人等は、去る三月十七日、大舉して市中に自働車を駆け廻り、鮮、支、露、英語の激文を、ばら播いて歩き、排日及朝鮮獨立の、一種の示威運動を試みたさうであるが、彼等は過激派との間に、一脈相通する處があるものと見られてゐる。而して更に本家本元の過激派は如何にといふに、社會黨と相呼應して、熾に烽火を擧げんとして大に畫策してゐる様子である。何分にも、沿海州自治廳自らが先づ、社會主義者の集合で、其上職業組合などは、過激派の根元だとせられてゐるのであるから、何時蜂起するかも知れぬ、又、去る四月には三萬に近い職工の大同盟罷業があつたさうである。現に、晝夜を問はず大通りの外は、彼等の危害に脅かされんとも限らぬから、特に之を避ける爲め、夜間などは市街の真中を歩行して決して暗い通りには足を入れぬとは在留

邦人の實際談であつた。

海外同胞子弟の教育問題

一行はそれより、更に日本居留民會を訪問して、居留民の自治的事業の概況を、細井會頭から聴取した。民會は會員から、會費を徴收して維持してゐるが、現在の事業は、内地の町村役場の如き事務を執つてゐる。即ち、旅券、郵便物の配送、小學校の經營等が其主なるものである。八年度の豫算は、留の下落の爲に近日、追加の要求をせねばならぬとのことで、茲にも留下落の影響が及んでゐる。就中、教育費は多大の經費を要するので、國庫補助を請願中なるも、海外私立學校として、内地の公立學校同様の恩典を受け得ないのは遺憾であるとは同會頭の漏す慨嘆であつた。勿論、此問題は、各殖民地で常に起ることであるのみならず、我殖民政策上重大關係を有することであるから、當局者は是非速かに之が解決を企てるべきである。

兵站部の苦心と鐵道の管理

一行が當日の最終の慰問を試むべく新軍司令部を訪問したのは既に午後五時半であつた。野戰交通部に部長武内徹中將と會見し、更に同所内に於て兵站部長志岐守治中將を訪ひ、夫々東團長から懇篤なる慰問の辭を呈したが武内、志岐兩中將の答辭も亦感激の辭を以て充されてゐた。武内交通部長からは西比利亞鐵道管理問題の經過並に現狀に關する概況の陳述があつたが、其説明は當時既に予等の幾度か論議し報道した處と何等他奇なきものであつた。何れにしても出征軍の原動力たる兵站部の隠れたる努力苦心は想像以上である。此事は志岐部長の説明に依つて更に明かにせられたので我一行終始傾聽すると共に深い同情を拂はざるを得なかつた。新軍司令命の慰問を終つて一度びホテルに歸館し、更に同夜當地第一流の料理店ゾロトイ・ローグに於ける松平政務部長招待の晚餐會に臨んだ。

ゾロトイ・ローグの招宴

我議員團一行並に岸本中佐、中村書記官等同行員一同を主賓とし、由比參謀長、高柳稻垣の兩參謀少將等を陪賓とし、政務部員總出の斡旋に成る宴は純露國式に依り階上二ヶ所

の食堂に於て張られ、第一第二の食卓が設けられてあつた。第一の食卓では立食の饗應あり之はオロドナヤ、ザクース第二をガリヤノチャー・ザクースと稱して前者は冷いものを後者は暖かいものを食卓に上すので此名稱があるのだとは露國通の高柳少將の説明であつた。階下の食堂では土地の紳士淑女、さては種々雑多のお客連が擾亂をも忘れたやうに愉快な食卓を圍んでゐる。オーケストラの音、洋々として場内に流れ渡り、歡樂の情を咬る時、希臘古風の——我國の『四ツ竹』を聞くやうな原始的な音楽が、伴奏の如く軽く其間に挟まつて、獨り、懐かしく古雅に響く。第二の食卓に着いて、デザートコースに入つたとき、松平部長は起つて一行の遠來の勞を謝する旨の挨拶をなし、之に對し東團長の謝辭があつた後、由比參謀長は會衆に促され、起つて大に氣焰を上げた。

由比參謀長の熱辯慨辭

由比參謀長は土佐人であると記憶するが、多少酔の廻つた舌に一層の熱情を加へて軍人風の無骨な然し土佐人特有の快辯を揮つて説く處、確に其風格を偲ばしむるものがある。

其所論は西比利亞に對する邦人殊に實業家の冷淡にして、無爲なるを遺憾となし、之が激勵を我一行に依つて國民に傳へられんとを望むとの主旨であつた。而して説き去り説き來り我帝國の出兵の目的は既に明である。帝國に領土的野心なきは何人と雖も毫も疑を挟む者なきを信する。我等軍人の職務は過激派てふ西比利亞の野に蔓延せる荆棘の艾除にあつて、今や其目的は着々進捗してゐる。此際此障碍の除却せられたる西比利亞の沃土に帝國の經濟的種子を蒔き、其收穫の爲めに活躍すべきは實業家、企業、投資家の任務ではないか、斯くてこそ國民的發展は期せられるのである。然るに現状は如何、英米企業家の大投資の聲に恐れ、露國法令の複雑困難なるを口にして、徒に千載一遇の絶好機會に乗する能はざるは遺憾至極である。

と喝破したときは舌端正に、火を發するの慨があつた。

胸に又、描くよ新日本！

我一行は、計らずも此熱誠なる演説を上陸の第一夜に於て、早くも由比參謀長の口を通

じて、聞かされたることにより、一種の暗示を感得し食卓は爲めに緊張した。宴後、一同は更に、代議士にして當地に日本弘報局を主宰してゐる、頭本元貞氏の招宴に應じて、旗亭常盤に赴いた。在留邦人は、此旗亭を呼ぶに浦潮の紅葉館を以てし、土地第一流の日本料理店である。木戸を潜つて入つた其家は、倉庫のやうであるが、中に、見慣れぬ二重窓やベチカの設けこそあれ、それは純然たる日本座敷であつて、軍の、將軍連の寄せ書の額面に、先づ或種の氣分を感ずる。ソロドイ・ローグの餘焰を更に三味の音に和して、飲み且論じて散會したのは、西比利亞の夜はまだ宵の午後十一時頃であつた。席に侍る我が西伯利出征の先驅者、日本撫子の謠ふ歌に曰く、

偲ばるゝ成吉斯汗の面影を、月の沙漠を眺めつゝ、胸に又、描くよ新日本。

六千哩の全線に軍需品を配給す

翌十四日午前九時三十分、一行はセントラルホテルを出で前日同様軍司令部より差廻されたる自動車を騙り先づ軍倉庫を訪問し、橋本倉庫長に對して、東團長から慰問の辭を述

べた。之れに對し、同倉庫長の語つたところによれば、軍倉庫の任務は兵器彈藥を除く外一切の軍需品即ち糧秣、器具、事務用品、住居用具、炊事、衛生用材料、恤兵品及獸醫材料等の供給を司るにあつて、之を二百五六十人の軍人傭人等で處理してゐる。斯くて又、浦潮、イルクーツク、長春間、五六千哩に亘る全線に支庫を置き、夫々配給に任じてゐるが、本年四月からは、半平時状態の給與を與へ、服及靴等の如きは、從來僅に通りであつたものを、二通り宛支給することを得るに至つた。従つて、従前の如く、洗濯修理に差支を生ずるやうなことがなくなつた爲め、衛生上からも陣中生活の全般から觀るも、内面的に一層士氣を鼓舞振作しつゝありとのことであつた。

慰問袋には女文字を署名して

尙國民と密接の關係を有する慰問品の寄贈に關して同倉庫長は、兵卒の陣中心理から觀て、慰問袋の如きも團體の統一的贈品は其材料體裁等同一なる爲め感興を唆ることが薄いやうで、折角の厚意も充分に徹底せぬ憾みがある。之に反して、老幼を問はず女文字を署

名したのや、少年少女の無邪氣な書畫等は非常に歓迎せられる。慰問品の配付は悉く抽籤を用ひてゐるが、内容に依つては殆ど引張り風になされて、獨占を許さぬといふやうな大騒ぎがあつて爲めに士氣を鼓舞することは意想外に甚大なものがあると語つた。眞に陣中の將士を慰問せんとする人々は此點に就て深く注意を要すべきである。兵食の如きも代用食として麵麩九十匁(約八錢五厘)を支給してゐるが、最初は之れを厭ふ風があつたが今日では却て之れを嗜好する有様であるといふ。食糧問題の喧しい我國では識者の考慮に加ふべき有力なる資料であらう。牛肉は一貫目四圓五十錢内外といふ廉價なので、肉類は比較的多量に支給せられてゐる。要するに給與の状態は充分に遺憾なく行はれてゐるやうであるから此點に關しては國民は安堵して可なりである。

傷けるチエツクの士卒を慰撫す

軍倉庫の附近には日本赤十字社の救護班がある。此處に收容せられてゐる患者は約二百名であるが、其大部分はチエツク軍の士卒であつて日本兵二十名に對しチエツク兵は百六

十七名の多數を算してゐる。救護班病院長志賀樹太郎君並にチエツク軍書記長に慰問の辭を述べた後、志賀醫長、及、チエツク軍書記長等の案内で四棟に分れた病室を見舞つた。殊にチエツク軍士卒に對しては、我帝國の出兵に際し其重要な目的の中の一に加へられたるものは即ちチエツク・スロバツクの救援にありとて、彼等が祖國の爲めに奮戦し傷病を得たるに對し深く同情する旨を述べ、書記長は更に之れを患者に傳達せしに、彼等は悉く深く感謝の意を其辭色に表した。此病院で、看護の任に當つてゐるのは、赤十字社の各府縣支部から推薦せられたる看護婦で全國に亘つてゐる。東團長は看護婦等に對しても亦、其勞を犒ひ、特に一行から慰問品を寄贈した。

大理石を敷詰た様な三十哩の結氷

一行は更に足を轉じて陸軍運輸本部臨時派出所に到り、所長米倉中佐に對し慰問の辭を述べ、同中佐から親しく、運輸事務の状況を聴取した。派出所は窓から近く金角灣内を一眸の裡に收めロスキュー島を指呼の間に眺むるといふ、形勝の地を占めてゐる。米倉中佐の

説明に依れば運輸部に屬する船舶として、宇品、敦賀及浦潮間に定期航海せるは筑前、臺中、小倉、新高の四隻を以て之に充て、あるが、現在は運輸並に同地に於ける棧橋荷揚げ等も圓滿に遂行せられてゐることである。何分同港は世人の知る如く、十二月十日頃から翌年の三月末迄は結氷するので、砕氷等に就ては多大の苦心を嘗めてゐるやうである。厚さ二尺五六寸の氷は、大理石でも敷詰めたやうに、港内は素より沖合三十哩に及ぶといふのであるから、冬季輸送の苦心は眞に想像に餘りある。

名譽ある我が三笠艦上の午餐會

同所を辭し更に兵站司令部、野戰郵便局、憲兵司令部を歴訪慰問の上、慰問品を贈呈した後、川原第五戰隊司令官招待の午餐會に臨むべく、軍艦三笠に至つた。上甲板上に、川原司令官以下の出迎へを受けて暫く司令官室に休憩し午餐の卓に就いた。

デザートコースに入つて、川原司令官の例に依つて明快なる食卓辭があつて、之れに對し、東團長は、『我衆議院は常に政黨各派間に政策上に就ては爭議已まざるも、一度び、國

家の最高目的の遂行に遭遇せば、全院直に一致するの美風を有せり、故に、此點に關しては、陸海軍人諸君は心を安んじ、以て護國の重責に任せられんことを望む』との演説を以て謝辭に代へた。食後更に司令官室に於て同司令官の需に應じて、記念帖に夫々得意の毫を揮ひ、歡談の後、甲板上に於て一同記念の撮影を試み、午後の日程を進むべく同艦を辭した。

三笠艦は言ふ迄もなく、日露戰役に於ける最も記念すべき軍艦である。我海軍が有する名譽ある軍艦たると共に、名帥東郷大將の坐乗せし、當時の聯合艦隊の旗艦である。日本海海戦の一戦克く、日露戰役に於ける露國の死命を制したる、名譽赫々たる偉勳者として永く國民の腦裡に銘記せらるゝものは、我三笠艦と東郷元帥の威名である。

往年の敵國を救援せん爲に

艦は其後一度爆沈の難に遭つたが、今や再び修理を終へ往年の敵國たる露國の擾亂に際し、其救援の使命を帯びて、浦潮港内に碇泊して居る。當年の露國バルチック艦隊が、我帝國を一撃の下に粉碎せん意氣込を以て、遠く喜望峰を迂回し印度洋の難航を経て、近く

蒲潮港目指して進まんとせし際、對馬海峽に我艦隊の爲めに邀撃せられ、遂に致命の敗戦を爲すに至つたのは、實に旗艦三笠の指揮塔より發したる、東郷元帥の號令の結果であつた。而もバルチック艦隊が唯一目的の港としたる蒲潮港内に、今現に警備の任を擔ふて碇泊して居る軍艦が、當年の三笠たることに於て、誰人が今昔の感を深からしめざる者があらう。其艦、其食堂に於て、我議員慰問使一行が食卓を圍んで、露國の現狀に同情し之を弔すると共に、帝國の武威惟れ揚れるを祝福するの機會を得たのは、我一行の特に光榮とし記念とする處である。随つて談話は多く是等の上に及び、思ひは自ら時の今昔、世の變遷、國の榮枯盛衰に馳せて、自ら緊張せざるを得なかつた。

無比の護國の士は偶然に得られず

一行は夫れより、我忠勇なる傷病士卒を見舞ふべく、第一陸軍病院を訪問した時は午後三時頃であつた。薄ら寒い病院前の廣場で、院長倉林軍醫正以下の職員に對し、東團長から慰問の辭を述べた後、狄苦しい同院長の事務室兼居室で病院の現狀を聽き、更に歩を病

室に運び各病室毎に東團長は、國家の尊き犠牲となつて、諸君の傷病せられたとは同情に堪へぬ、去りながら其職責を全うし君國の爲に表されたる勇武は、嘗に一身の光榮たるのみならず帝國の武威を發揚したる所以なりとて、感謝と慰問の辭を述べた、士卒諸君は之に對して深く感謝し、傷病癒えたる曉は再び戦線に立つて、一層の努力を爲すべしとの、決意を示した。萬國無比と稱せらるゝ我軍隊も此將士のありてこそ、眞に無比獨歩ともいふべき、模範的軍隊たるの實を擧ぐるを得るのである。さるにても、是等の戰士に對し國民の酬ゆる處は、果して其當を得てゐるであらうか。世界に類を見ざる護國の士は偶然に得らるゝものではない。國民は深く省みねばならぬことだ。と予は痛感せざるを得なかつた。病室を出た後にも予の眼には、傷き病める戰士の青ざめた顔がいつ迄も残つてゐた。

可憐、西比利亞の野の露と化して

院長の説明に依れば、出征以來最も多い患者は、外科では凍傷、内科では胸膜炎が多いさうだ。西比利亞の嚴寒の恐るべき、凍傷と一口に云ふても、それは手足を切斷せねばな

らぬ程の大患が多い。互寒といふことを文字のみに依るの外、知らぬ内地人には。想像の及ばざるところである。又胸膜炎も嚴烈な寒氣に冒されて、感冒に罹つた結果、此病を得るのであつて、之が爲め、可惜、西伯利の露と化する、有爲の青年も決して少くはないのである。院長が個人の感慨であるとして説く處を聞くに、我恩給局の審査は餘りに法の解釋を狹義にするので、憐むべき傷病兵士にして、國家に報じて得た不具の身にも恩給の恩典に浴すること能はず、不幸な涙の一生を送つてゐる者が多い、立法府議員並に當局の一考を煩はしたいとのことであつた。其事實如何は今茲に斷定することを得ざるも、さあるべきこともあらうと一同は更に深い同情を寄せた。尙當病院では西比利亞經濟援助會の委託を受けて、市民に對して施療してゐるが、露人等の受診患者が却々多いさうである。

獨、墺俘虜收容所を視察す

一行を乗せた自動車は遠く市街を離れて。活動寫眞などの畫面によく見るやうな白樺やボブラ樹の生茂つた廣い山道を馳せて、浦潮市街の背面に位置せる舊露國兵營に、歩兵第

六十八聯隊第三大隊を訪ひ、此處でも亦、慰問の辭を述べた後、阿部大隊長の案内にて、同大隊長の所長として兼任監督せる俘虜收容所を視察した。獨墺俘虜の、露國內に在る者は多數だが、西比利亞に於ける人員のみでも、二千五百名に達してゐる。其内名簿のみの受託で、行方不明の者は千八百名。是等は、獨、墺、匈、土四ヶ國の將校以下である。我浦潮收容所にある者の中、一行の視察したのは將校俘虜であつたが、彼等には大尉級の者には、月額七十三圓、中少尉級の者には、四十八圓を支給して、各個自炊の方法を採らしめ、俘虜の收容受託は、日米兩國に於て、一時之れを負擔してゐる。

我等の祖國は滅亡の外ない

此外、ハバロフスクに於ける米軍の收容所には、千八百名程收容してゐるさうであるが彼等は早く歸國せんことを冀ひ、和議の成るのを一日千秋の思ひをして待ち詫てゐる。一行は彼等の感想如何を質すべく、親しく接見したが、墺國の一大尉は其代表者の如く一行の質問を俟つてゐたが、彼は日本軍の優遇に對しては、一同悉く感謝してゐる旨を述べ、

更に講和會議に於ける、獨逸兩國に課せられた條件に對しては、其詳細、實否は知らぬが、新聞紙の報道に依る處を眞實としたら、實に、苛酷な、寧ろ、不可能な條件である。若し之れを實行せんとすれば、我等の祖國は滅亡の外はないとて、辭色、稍、激越の調を帯び、我一行の口から、何等か其間の消息と實情とを聽かんとし、更に同情の言葉を求めんとするもの、如く其答を促し貌であつた。

日本に依てのみ正義仁道を識る

匈牙利の一見習士官だと稱する紅顔の青年士官は、彼等の一團中最も日本語に堪能で通譯の任に當つてゐる。彼は約六ヶ月間に、困難な日本語特に漢語を流暢に操ることゝなつた。十八歳にして出征し當年二十三歳といふことであるが、其語る處條理が整然、且極めて巧妙である。講和條件中の、商船の沒收の如きは疲弊した戦後の經濟的發展を阻止せんとするものであつて是等の提議者は、英、米兩國ならんとて其不條理なる所以を説いてゐた。阿部所長の談に依れば、彼等俘虜一同は、衷心、日本軍の優遇を感謝し、日本軍に依つて

のみ初めて、正義仁道あるを事實上諒得したと、常に口を極めて之を頌してゐるさうだ。是れ必ずしも、俘虜の巧妙なるお世辭のみではあるまい。

「ファースト」なども上演して

彼等の語る處を以てすれば、露國は勿論米國の、俘虜に對する恰も奴隸の如く、慘酷なる待遇を與へ、勞役を課してゐるらしい。左れば、彼等の言は、決して日蔭者の巧妙なる辭令とのみは解すべきではなからう。彼等も同色自稱文明國の冷酷に嘆いたであらう。

將校俘虜收容所には彼等自ら設計、建設した立派な舞臺ステージがあつて、此處で毎週幾回か開演し彼等同士のみならず、我兵士にも觀覽の案内がある。上演するものは軽いコミックものが主であるが、時にはファーストなどの大物がプログラムに現はれることもあるさうである。立派な三四百人を容れることの出来るスタンドを有つてゐるから、内地の活動寫眞館位の廣さは十分にある。彼等は却々勤勉で、規律的生活を營み、獨逸武人氣質を發揮してゐるが、中には早く東京へ移して貰ひたいなど、申出る者もあるさうだ。

日本語で「原敬閣下は御壯健ですか」

予は一行と共に當日同行した、東大講師鳥居龍藏君を、例の紅顔の見習士官に紹介すると、彼は流暢な日本語でプロフェッサーのニトベは健在ですかと尋ねてゐるから、予は新渡戸博士と舊知かと反問したら、彼は破顔一笑、著書『武士道で』と答へた。我將校の言に依ると、彼は論文風な六ヶ敷いものを好んで読み、「武士道」の如きも曩に獨逸語で讀んだことがあるが、更に最近邦文を讀破し、優に其思想をも諒解し、哲學、政治上から種々批評を試み、我將校等に論議を挑むさうである。

予は更に予自身を紹介するに、新聞記者たることを以てしたるに、貴紙—有力なる中外商業新報を通じて日本國民に其優遇を感謝する旨を傳へて頂きたいと希望した。彼は却々明敏な頭腦の所有者であるが『日本の總理大臣原敬閣下は御壯健ですか』、『原さんは政友會の總裁ですねえ』など、語る處、洵に驚くべきである。予は傍に居た代議士藤野正年君を指し、君は政友會に屬して居る。東團長も亦、政友會の所屬だと告げると、彼は、藤野君を顧

みさうですか〜』と繰返してゐた。同所を辭するに當り、彼は獨り予等一行を門外に迄送つて來たので、予は別れに際し、彼の健在を祈る旨を述べると、彼は堅く握手して、「東京で再會しませう」と對え、一行の自動車をいつまでも見送つてゐた。

大谷將軍主催の歡迎晚餐會

遠く浦潮砲壘を望みつゝ、一行の自動車は再び、風光の美しい新緑の山道を馳せて二番河に着し、歩兵第九聯隊第二大隊及自動車隊を訪問し、大隊長藤田少佐以下を慰問したる上更に第一兵站司令部二番川出張所、並一番河兵營を巡回慰問したのであるが、之に對し各隊長悉く今後益々奮勵邦家の爲めに努力を致すべきを誓ひ、士氣大に昂れるを見た。其夜、軍司令部に於ける大谷司令官の招待晚餐會に列し、極東執政官のホルワット將軍、民政部長のグレハリヨフ氏、クレム外交部長、沿海州代理官のコセツコ大佐、ケスフス浦鹽斯德市長露國側の名士諸君、軍參謀將校諸士、並、政務部及民會役員諸氏と歡談を交へ、十一時を過ぎ同所を辭した。

ホ將軍を訪ひ更に自衛團に臨む

一行の浦潮滞在の豫定は一日延期せられた、軍隊慰問も全部終了したので、十五日午前十時半、荒木大佐、青柳大尉の案内で、列車内に居住のホルワット將軍を訪問した。將軍は寫眞で見るやうな偉丈夫であるが、其語る處は商人風の、極めて如才のない應酬に巧な軍人には稀に見る政治家風とでもいふべき紳士である。將軍と別辭と握手を交して、一行は、當日午後二時から開かれた、日本人小學校に於ける居留民自衛團の、第四回總會に臨席した。自衛團は我出兵前、即ち同市に過激派蜂起の際、居留民の生命財産を維持し自衛せんとて組織せられ、爾後我軍の上陸に際しても、多大の貢献を爲したる功勞ある團隊で、一種の義勇兵團である。席上大谷司令官の激勵の辭があり、次で前川代議士は團長代理として、一行を代表し民團並に自衛團の要を説き、其壯舉を賞し、帝國の海外發展には諸君の如き先驅者を要す、而も西比利亞の現状斯の如し、宜しく自重自戒、邦家の爲め一層國權發揚、並其自衛の大任に當らんことを望むとて其勇敢を賞して大に激勵し、發奮努力を促したる告辭を述べた。

此處を辭した一行は、稻垣參謀少將私邸に於ける懇談會に臨んだ。松平政務部長亦臨席して、席上、西比利亞の現状並オムスク政府の近狀、帝國今後の出兵始末等に就て隔意なき懇談を試み、質問應答があつた。此會合の内容は、勿論此に明記するの自由を有せぬが兩者の間に多大の諒解を得たことは、後日大なる効果を齎すべきものと信ずる。同夜一行は、當地在留の三井、正金、朝鮮諸銀行、原、鈴木、其他有力なる實業家に依つて組織せらるゝ、商工會の招待宴に臨み同地は勿論、西比利亞各地の經濟事情等を聽き、前途の爲め大に裨益する處があつた。斯くて旗亭常盤の夜は大分賑つた。

危地に向つて強行出發す

三日間に亘る浦潮斯德に於ける、我軍司令部以下各部隊の慰問を終へたる我一行は、愈々十六日午前十時半、約六十年の昔、露國東方の門戸、東方經營の策源地として、ニコラス一世をして『一度掲げたる國旗は決して撤去せし』と豪語せしめ、東亞併呑の壮志の一實

現として、將又、其象徴として目せらるゝ、浦潮斯德を出發し、先づ東清鐵道線に依つて哈爾濱に向ひ、西比利亞各地方を巡歴して、我駐屯の將士を親しく慰問せんとするのである。元來、我議員團一行の東京出發前に於ける豫定の行程は、浦潮からハバロフスクに到り烏蘇里、黒龍兩線を経て、チタに出でイルクーツクに於ける第一線の我軍隊を訪ひ、同所から哈爾濱に引返し、長春を最後とし、同地に於て解散する筈であつた。ところが、我一行が十三日浦潮上陸前日來、スーチャン地方を初め、同方面米軍守備線區各地に過激派の出没するあり、鐵道並鐵橋の破壊頻々として行はれ、危険計り難しとの情報に接したので軍司令部の注意に依り、遽に豫定を變更して當初の行程を逆行することに議一決し、斯くは哈爾濱へ向ふことゝなつたのである。併し、危険は前記方面のみではなかつた。一行が通過せんとする東清線、ニコリスク方面に於ても、出發の前夜來、過激派と我守備隊との間に小衝突があつたとの情報を得た。是に於て我一行の進路は、東西兩方面共に遮断せられたのであるが、此上空しく浦潮に留まるべきではない、前途多少の危険を冒しても、慰問の重責を果すべきであるとの決意を以て、急に戰地に在るの思ひをなし、意氣軒昂遂に

出發を決行することゝなつたのである。(以上、浦潮スウエートフランスカヤ街、セントラルホテルに於て執筆)

ウラジオストツクよりハルビンまで

露國東方の玄關たる浦潮の景況に就ては、三日間の見聞で多少諒解することを得たが、今また、同地の縮圖ともいふべき浦潮停車場に來つて、予の驚きは一層であつた。其處に居る群集の状態は、到底日本内地の停車場などで見ることの出來ない奇觀である。聞けば皆避難民だといふことであるが、露人の百姓らしいのが、家財道具を携へ、浪々の身を漸く停車場に寄せてゐる有様がそれと察しられる。其入口、待合室は勿論一寸の隙もない程うよ／＼と蠢いてゐる有様は、之れでも人間かと疑はれる程で、啞然評するに辭がない。それでも其人達は一向平氣な顔をして、悠々茶を喫み、麵麩を嚙つてゐるのもあれば、何處かの家庭を、此處に移したやうに、夫婦打揃つて子供を真中に愉快さうに、喃喃朝食を共にしてゐるものもある。是等の光景は、内地人の想像にだに及ぶ處でなく、親しく其實況を見た予等には、生來始めて接した驚異の一現象で、擾亂の都浦潮の縮圖を見る如であつた。

小山のやうに大きい車體

西比利亞鐵道の規模の大きなことは豫て聞き及んでゐたが、今現に予等を運ばんと待つてゐる、東清線の汽車を見ては今更ながら驚かれる。レールのゲージの廣いのも左ることながら車體の構造の頑丈なことと來ては、聞きしに勝る程である。小山のやうな汽罐車には、棟木でも切つたやうな薪が満載せられてゐて、燃料に石炭を使用しないのも一特徴である。プラットホームの無い西比利亞の停車場では、地面から直に車室に乗込むのであるが、其階段の如きも三階段あつて、高さは五六尺もあるから、股の狭い日本人などには昇降に困難を感じる位である。

我一行の出發に際しては、大谷司令官代理を始め、武内中將、高柳參謀少將及各高級武官、松平政務部長、菊池總領事、民團幹部員及在留實業家等多數官民に見送られて、哈爾濱時間の午前十一時、汽車は浦潮を後に發車した。哈爾濱時間は浦潮時間よりも二十一分間遅れるのである。

電燈の代りに蠟燭を點じて

我一行の乗車したのは、軍司令部から特に連結された軍用一等車一輛である。同勢は一行十二名の外特に同行せしめられた、司令部の青柳中西の兩大尉、服部中尉及便乗の永井外務書記官、并護衛の任に膺る數名の兵卒であつた。二人又は三人を一組として割當てられた客室は、携帶のトランクやケースを五六個宛も持込んで尙、優に起居するに差闕へない程廣く一室上下、四個の寢臺を備へ扉には鏡が張つてある。一車通抜けの廊下は、幅四尺程もあるのだから、宛然人家に住つてゐるやうである。只、食堂と電燈の設備のないのは不便であるが、食事に對しては軍から炊爨車を附屬せしめられ、電燈の代りには蠟燭が點せられるので、却て露西亞らしい氣分が味はへた。

東清沿線最初の慰問を試む

アムール灣に沿ひ、海水浴場の多い海岸を駛つた我汽車は、約四時間にして浦潮を距る六十八哩の、ニコリスタ驛に着いた、市街は驛から一哩餘もある。千八百六十六年建設せ

られ、爾後、烏蘇里鐵道の開通と共に、遽に發達した市であるといふことである。我一行は浦潮を去つて以來、第一回の慰問を試むべく下車した。此處には我歩兵第九聯隊本部の將士が整列して、一行の着車を待つてゐた。即ち東團長は慰問の辭を述べ、同聯隊第一大隊長宮城少佐の答辭があつて、同大隊長と野口在留民團副會長等から、同市に於ける狀況の話があつた。此地は伊藤公を狙撃暗殺した、鮮人安重根兄弟の居た處で、朝鮮人の在住する者一萬餘人、支那人約三萬人と稱せられ邦人は僅に二百六十餘名であると云ふことであつた。

激語を聯ねた「生死憂樂」の檄文

一行より出迎への將士に對し、一般的慰問品として手拭、氷砂糖、繪葉書等を寄贈した當驛に着する二三驛前の小驛で、停車中の散歩を試みつゝある際、其附近に貼つてあつた鮮人の檄文を見たのであるが、それには「生死憂樂」と題して、帝國を呪ふ激語を聯ね、今日鮮人にして覺醒せずんば、遂に滅亡すべし、是れ生死憂樂の分るゝ處也。との煽動文字

が羅列してあつたのでその事なども語り出たが、ニコリヌク市は鮮人中でも過激思想を抱く者多く集り、例の暴動事件に對しても浦潮と共に、其策源地として認められてゐる。鮮人にして我民會に。入會希望者あるも、他を憚つて決行し得ない者が多いとは、民會副會長の談であつた。我一行と將士諸君との會談中、風彩異様の一鮮人が一行の傍に近づいたのを、警衛の憲兵は逸早く之を認めて退去せしめたが、後で聞くとそれは注意人物だとのことであつた。

麗光輝く山野に綠樹青草涯なし

西比利亞は今や、晩春初夏の候である。日中の日光は初夏らしい氣分がするが、晩涼の迫る處は、晩春の夜を思はせる。陽春僅に六週日、夏日三ヶ月とは、此地方に於ける、永い冬の間^に狹まれた太陽の輝きを見る季節である。皚々たる白雪、滿目荒涼たる冬の西比利亞の曠野は、現に想像すべくもあらず。綠樹青草涯^{ステツレ}てしなく、草原には若草萌えて、雪に培はれた名の知れぬ白い草花や、菜種のやうな黃い花を、數里に敷きつめた曠茫の野は

何處までも續き、其處に又、可憐な葦の紫が和風にそよいでゐる。是等の草花は世界を他所に、國の擾亂も人類の疾苦も知らぬ顔に、渾沌たる世の態を嗤ふやうに楽しい「彼等の時」の移り行く速さを惜み、靜に、只管、自然の恵に浸り思ふ様に暢びてゐる。

曠野を蔽ふ蒼空に白雲湧いて

地球の全面を掩ふ天空を、一瞬の裡に眺めたやうな、廣い／＼空は飽くまでも蒼い。其の蒼空には、白い大きい雲の峰が思ふ儘湧いて動かない。それは、如何にも南國の夏と秋とを、同時は偲ばせる。此の曠野を蔽ふ蒼空の、雄大な景色は、西比利亚ででもなければ到底見ることの出来ぬ光景である。嘗て文字の上で覺えた、雪に鎖された西比利亚の曠野なるものを予の記憶の上に求めても、それは到底蘇つて來ない。西比利亚の、冬と夏との相違の餘りに激しいのには、此地に住んでゐる者でも驚かれるといふことである。

大きい丘を見るやうな其の山、長く霞のうちに消える其裾野、それが悉く青草は萌えてゐる。其處に、「自由と幸福」の圓い夢に眠つてゐる牛馬の放牧の群がある。此の偉大なる

沈黙と平和の光景は、眞に雄大な一幅の畫圖である。此の美しい景趣の間を縫ふて、我が列車は、ラズエツト小驛からラズエツト小驛へと移り訪ふて、其日の午後十時半、ボグラニーチナヤ驛に着いた。

露支の國境ボグラニーチナヤ

此驛は露支國境に位してゐるのみならず、東清鐵道の終點であると同時に、烏蘇里鐵道の起點である。此處には又、露支兩國の税關が置かれて、其検査は却々嚴重であるところとであるが、我一行に對しては何等検査をも行はずして、通過せしめたのは厚意の表象であるとのことであつた。戦前、我旅客にして、此税關否露國の全税關で無法の検査や、課税に憤慨した者は随分多かつた、然るに我皇威の遍く此地に及んで、今は却て彼等の敬意を受くるに至つたのは愉快である。驛には日章旗が翻つてゐた。驛の内外には群集雑踏し避難民が其處此處に横はつてゐる。呑氣な露西亞人は、汽車の發着の光景を見んとて、近頃近在から押し寄せるので、一層の混雜をするのだとは我停車場司令官の談であつた。

團長代理として前川代議士は、駐屯の將士に對し、驛前で慰問の辭を述べた。停車一時間

餘の後、我列車は再び其歩を進めた。一行は此車内で初めて西比利亞の野の第一夜を送つたのである。

薄紫の餘映遂に一抹の殘光を漾し

西比利亞の夜は短く、晝の長いと、そして北國たる此地方に於て特に見ることのできるホワイトナイト白夜のことも豫て聞たり、又書物の上で知つてゐた。我列車のボグラニーチナヤを發したのは、内地ならば眞夜中の十二時を過ぎてゐたが、西比利亞の野は、今漸く夜に入らんとしてゐる。午後八時過ぎから西に落ち初めた夕陽は、地平線上に全く没するのは十二時近くである。夕映えは曠い地平線上を紅に染めて、聽てそれが長く廣い、薄紫の一線を劃し、遂には水色を帯びた一抹の殘光を漾はせてゐる。露西亞人が、夜を徹して、サモヅアールを圍みながら物語り、且、踊りつ、曉の迫るも忘れるといふ話は、露西亞情緒の一として、其國の藝術家に依つて幾度か描かれてゐる。今、予等は其光景を眺めて、傳説と音樂とに富み、且、之が彼等の生活の、主要な部分を占めてゐるといふのは、斯る自然に育

まれることに於て、寧ろ當然であらねばならぬ。午前二時近くなると、もう東方から迫る曉の色に、闇を知らぬ西比利亞の夜は明けて、次ぐる日を迎へるのである。西比利亞の夜は實に懐しく、且眞に傳奇的である。

十七日も亦我列車は無心に曠野を駛つて其夜の十一時四十分漸く哈爾濱に着し、官民諸君の出迎へを受けて直に北滿ホテルに投宿した。我一行は浦潮、哈爾濱間夜となく、晝となく、我部隊の駐屯する處、將又我兵影の認むる處、必ず五分、十分間の停車時間をも利用して、慰問と感謝の辭を述ぶるのを決して怠らなかつた。

車窓から眺めた沿線の諸情景

東清線は、西伯利鐵道中最も危険少く、而して、發着時間の正確な線路であると聞いてゐたが、一行の通過した時は危険の程度は、過激派の跋扈の甚しくない此沿線では、大したこともなかつたが、時々、線路上に障害物を横へ、或は電線を切斷することがあるといふことであつた。其多くは吉林省邊の馬賊の所爲ださうである。

ボグラニーナ驛を發して支那領に入り、進んで吉林省を縦貫して駛走する汽車は、濛々たる砂塵を揚げて、車内は爲めに、眼も口も開けてゐられない程、砂に煙ぶつて、不快極まらない。それでも、沿線、草木茂生し人煙亦稀に認められ、耕地も大分見受けられる。車窓右の方、遠く黒龍江省に連る山岳重疊して、蒼鬱たる樹木山野を蔽ひ、沿線到處、水邊に川柳の叢生するのは殊に眼を惹く。

初めて見る鐵道沿線、殊に停車場等には頗る興味が饒い。豫て聞き及んだ、各停車場構内の湯沸所は、思つたよりは其規模の大きく、汽車の停車するや、乗客は先を争つて、先づ薬罐やコップを手にして、それを汲取りに行く。老若、男女悉くさうである。中にも、若い男女などが、先づ一杯を途中で口飲して後れ馳に驅けた時には發車を合圖の鐘の最後見受けた。そんな時には、どの車室でもお構ひなしに飛び込む。時には扉が閉つてゐるの階段に腰打ちかけて、平氣で濟ましてゐる娘達もあつた。

散歩好きなき露人と驛の賣店

何れの停車場でも短きは十分乃至十五分、長い時には一時間餘も停車する。それは大抵朝夕の食事時間である。氣の利いた乗客は、停車場構内の食堂で食事を濟まし、其の他の者でも、紅茶の一杯も啜りに入る。又、停車場附近には、細長い賣店があつて、其處には其附近の神さん達らしい女が、牛乳やソーセイジや、パンなどを聯べて客を呼んでゐる。牛乳の立飲みや、自分の身體よりも大ききうなパンを抱えて行く少年達の顧客で常に賑つてゐる。

散歩好きな露人は汽車は停ると、直に降りて附近を散歩する。ちやんと定められた事のやうに決してそれを缺がさぬ。若い男女の腕を組み、老幼の相携えたる、必ず同じ組が往きつ戻りつ、一時も口を閉じず、何事か饒舌り續けてゐる。彼等の散歩は其性癖でもあらうが、又一つは車内の不潔が之れを要求するのであらう。

車前に賣る花束と鶏の丸煮

車窓に賣りに來る雞の丸煮も珍らしく、大きい朝顔形の籠に盛つた百二三十入の雞卵も

其儘賣買せられてゐる。それが一個當り七八厘から一錢位だといふから、數の割合に大した値段ではないが、一寸奇異な感じがする。野の少年、農夫の妻らしいのが汚れた手に、美しい草花や、芍薬、さては、野百合などの一把を握つて、顧客を求めてゐるのも此沿線の一情景である。

何の停車場も、附近の都邑とは、何等の交渉なしに設けられてゐるから、停車場附近には、驛の役員や、鐵道従業員の社宅のみで、其他は眼に入るやうな、建築などは少しも見當らぬ。驛の大小に依つて、必ず小さい教會や、禮拜堂様の建物があつて、金の十字のみが眩ゆく輝いてゐるのも特に眼を惹く、と同時に、舊露國政府の用意も亦、窺はれる。

主客顛倒した露支人の態度

太い、長さ四五間もある丸太の材木を、横に積み重ねた小舎、それが沿線の露人の住家で、鐵道の役員等を最上級の生活者とする、彼等露人は勿論、支那人も朝鮮人も男女を問はず殆んど跣足だ。嘗て、當年の強國露西亞の爲めに、鐵道敷設權の獲得を餘儀なくされ

た、此鐵道沿線の各停車場に現今其警備の任に當る、銃劍嚴たるも而も、其態度の間の抜けた支那兵が、昇降客を睥睨してゐるのも、一種の滑稽味を感じ、更に又時勢の變を想はしめる。沉んや、昨日までの主客、今日遽に顛倒して、支那人の露人に對し、露人の支那人に對する態度、剛柔、硬軟、急變して其處を異にしてゐるのを見ては、それは、亦、哀感と滑稽とを感せしめざるを得ない。

北滿の大市場ハルピン

故英雄藤公の最後を現地に弔ふ

浦潮、哈爾賓間、四十餘時間を車中に過ごした一行は、北滿ホテルの一夜を柔かい寢臺の上に送り、翌十八日朝、列車内に到りて禮装に改めたる後、直に慰問を試むべく、自動車に分乗して停車場を出發した。是れより先き、同停車場に於て、新井兵站司令官から、現地に就て、哈爾賓驛頭兇手に殞れた、故伊藤公殉難當時の説明を聞いた。公、逝いて既に十年、其悲壯の最後を今現に、現地に就いて其説明を聽くに及び、感慨殊に深きものが

あつた。夫より愈々車を聯ねて、新市街なる北滿派遣隊司令部を訪ひ、應接室に少憩、別室に於て大久保曹長以下の各兵卒を慰問し、次で歩兵第五十三聯隊本部に到り、等々力聯隊長以下に對し東團長から極めて熱誠なる慰問の辭を呈したるに、同聯隊長は謹嚴なる態度を持して謝辭を述べると共に、光榮ある軍旗の下に、只一死君國の爲に報せんのみと答へ、其の壯嚴なる態度に對しては一行、亦、襟を正さざるを得なかつた。

駐屯各部隊を巡回慰問す

兩者の接接終るや座談中、同聯隊の分遣隊が、過般、スバシタヤ方面に於ける、過激派との戦闘に、敵の戦死者三名、捕虜、亦三名を得たといふ報告を得て、一同は我兵卒の勇武を賞した。更に轉じて石坂少將の統卒する、北滿特務機關を訪ひ、同少將から、露軍乃至過激派の動靜と、米軍の活躍に關する談話あり、又、我出征將士の思想問題等にも、言及する所があつたが、將士の思想の益々健全にして、何等憂ふべきものなしとの説明には一同殊に安堵の模様であつた。交通部から參加した、南保大佐以下特務機關將校等一同に

對し、東團長から正式の慰問の辭があつて、一同の代表者として、石坂少將は國民の代表者たる衆議院議員の慰問に接したるは特に光榮とする處にして、後世忘る能はざる喜び也と答へたる其面には、感謝と喜悅の情が溢れてゐた。一行は更に兵站司令部に勤務の士卒を慰問し、終つて新井兵站司令官から、兵站事務、士卒の給與狀況、並在留民の狀態に就て説明があつた後、同所で晝食として兵卒の平食の饗應を受けた。珍らしい西比利亞談に食後の數十分を費したる一行は、轉じて自動車を驅つて騎兵大隊の營舎へ向ひ、去る二月火災の爲に大半焼失せる營舎に整列した兵卒一同に對し、東團長は再び國民の代表者たる衆議院の慰問團を代表し、懇ろに其勞苦を犒ひしに、竹井中隊長に衷心より其好意を謝する旨の答辭を述べた。

沖、横川兩志士の墓碣を展す

一行は此處より日露の役、我軍事行動に多大の貢獻を爲し、後囚はれて敵手の爲に哈爾濱の露と化したる、沖禎輔、横川省三兩志士の墓を展せんとて、初夏の光眩き、哈爾濱郊

外に自動車を駛らし、青草の廣がる野邊に牛追ふ支那人を驚かしつゝ、往くこと數十町にして兩志士の墓所に着いた。

『夏草や兵どもの夢の跡』、兩志士が君國に報じて遂に得たる『死の場所』には、過ぎ行く時の變遷を知らず貌に、夏草生ひ茂り、又多く顧みる人なき墓碕は風雨に晒されて、孤影自ら悲しく、轉々人をして腸を斷たしむるものがある。我一行は今更ながら當年の志士の風貌を偲び、容姿を正して墓前に名刺を供へ、暗黙禮拜して同所を去つた。聞けば目下兩志士の記念碑建設問題は、我軍隊及在留民間に議せられ、其醸金中だとのことであるが、斯る資金は、單に在留軍隊や市民に一任すべきものではない、内地人も進んで此義舉に應ずべきである。我一行、亦金一封を其資金の一部として供へたのであつた。

ス氏と我民會を訪ひ松花江埠頭を視る

翌十九日午前、大村鐵道院技師並に佐藤總領事の來訪を受け、午後二時一行は自動車を驅つて西比利亞鐵道技師管理部長として内外に注目せられつゝある、スチーブンス氏を訪

問して敬意を表し、次で新市街公園等を巡覽し松花江埠頭に到り、鐵橋守備の日支露の各部隊を慰問したる後、在留民會を訪問し、階上廣間に於て茶菓の饗應を受けた。席上、河井會長から同地に於ける、邦人活躍の歴史、並現狀帝國政府に對する希望等の演説あり、東團長は之に答へて、海外發展の要を説き我議員團は他日、何等かの形式の下に諸君の希望に副ふの機會あるべきを期し居れりとして、其前途の發展を激勵し午後六時二十分漸く同所を辭した。一行は再び車上の人となり、病院街の歩兵第三大隊を訪うて、安西大隊長以下將卒を慰問し、營舎の荒びたる中に整然たる我軍紀の擧がれるを見、我軍隊の勇武の素地亦此處に養はれつゝあるべきを思ふて一同感嘆し、同營舎を辭して更に歩兵第二大隊に藤井中佐以下を慰問し、第六陸軍病院に傷病の士卒を見舞つた。それから領事館に佐藤總領事を訪ひ、士官街の兵舎を訪問して一旦ホテルに入り、入浴後午後八時より將校俱樂部に於て開かれた石坂少將の招宴に應じた。

近待者の物語を聽て更に哀し

更に午後八時から日本料理店武藏野に開かれた、同地居留民有志諸君の招待會に臨み、席上河井民會長外正金、朝鮮兩銀行、滿鐵出張所、北滿電氣、鈴木商店等の代表者と會食し、同地の狀況を聽くを得たのは一行の爲めには、好個の機會であつた。尙當夜主人側の一人で、露國通の稱ある、庄司滿鐵出張所長から、故伊藤公に隨行し、哈爾濱驛頭に於ける遭難の際、故古谷代議士と共に其臨終に侍したる、實歴談を聽き、其最後の狀を如實に見るが如く偲び得たのは、一行の爲に、重ね々々の好記念であつた。

而已、公の遭難の刹那并其最後の光景等に就いては、世説紛々、臆説を交へたるもの多く、英雄の最後をして明かならしむる能はざるの憾あり、今や、庄司君は側近にありたる唯一の人として、其歴史を明確に語り得る人である。宜しく君は、史上の英雄の最後を、録して以て長く之を後世に傳へ、我國史の一頁を飾るべき企を爲すべきである。二日間滞在の哈爾濱に別れを告げ、故伊藤公遭難地として我國民の念頭を去らざる哈爾濱驛頭、今や日章旗の翻るを眺め、故英雄の功業を偲びつゝ、チタ市へ向つて出發したのは其夜の十一時四十分であつた。予は此際、北滿に於ける帝國將來の經濟的發展の策源地として、將

又、北滿唯一の大市場たる我哈爾濱の瞥見記を添へたいと思ふ。

一八九六年に於ける露國の野望

露國政府は、千八百九十六年露清銀行をして、清國政府と交渉せしめ、遂に同年八月二十六日、東清鐵道敷設條約を締結したるを手始めに、千八百九十八年、南滿洲縱斷鐵道敷設の特權を獲得し、以て數百年來其實現に腐心した、東方經營の完成に努むべく、哈爾濱の地を選んで、其附屬地面積十二萬デシヤチン、即ち、我約十三萬町歩の廣大なる地を得て茲に鐵道廳を置き、後貝加爾、烏蘇里兩鐵道を連絡して、黑龍の迂回線に依らず、北滿の野を貫き要港浦潮に達する理想の實現を遂げ、且、之に依つて厭くなき野望を、南滿、朝鮮に伸ばし、我日東帝國をも窺はんとしたのであつた。

軍事的野心を棄て、經濟的施設

宏壯なる東清鐵道廳及長官々舎、護境軍團營舎等は、西比利亞鐵道の聯合管理に移され

た今日に於ても、尙、當年露國東方經路の大志を偲ばしめ、轉た今昔の感を深からしむるものがある。日露の大戦に一敗地に塗れ、南岐線、寬城子以南の線路、大連及旅順の兩門戸を失つた後は、領土的野心を斷念すると共に、軍事的施設を廢し、専ら經濟的發展に苦心して、今日の新市街及埠頭區を建設したのである。

縱約一里、横約一里半の全市街は、舊哈爾濱、新市街、埠頭區の三大市區に分れ、其市街は、浦潮などよりは廣く且平坦地であるが、街路に自然石を敷めてあるのや、砂塵の多いことなどは更に變りはない。哈爾濱及其附近屬地内の行政權は、鐵道敷設條約に據つて東清鐵道廳に屬してゐても、市街は各國人の雜居地である。それは煙の如き砂塵を揚げて右往左往、縱横、無秩序に、驅け廻つてゐる、西比利亞地方特有の馬車に、車上の人を見てもそと首肯かれ、無様に銃を擔いで路上に立つてゐる、支那巡警の砂塵に塗れた姿も可笑い。

故國を偲ぶモストワヤ日本人街

人口は不精確ながらも約九萬近くを以て算せられて居るが、一時は避難民で埋められ、十萬以上に達して居た相である。勿論、一時滞在者も随分多いが、哈爾濱市中に約十三萬、傳家岡に約十二萬位は在住してゐるとは、某氏の統計であつたが、其國籍別は、支那人約十七八萬、露人六萬内外、邦人五千内外其他は一時滞在者であるといふことであつた。露人の大部分は舊の如く猶太人であるさうだ。高燥な丘陵の上にある新市街は、殆んど露國の役所と各國の領事館と寺院とで占められ、埠頭區は即ち商業區とも稱すべき所で日、支露、英、佛、瑞等の、各國の商業會議所、取引所、公園等がある。三井、正金等の大商店も亦、此間に介在して我經濟的勢力を代表してゐる。埠頭區モストワヤ街は所謂日本街で各旅館を初め、日本人の住宅の軒を駢べてゐる。町には『そばや』もあれば『すしや』もあり『日本豆腐いろく』などいふ看板を見るかと思ふと『和服裁縫いたします』といふ女文字が路地の入口に貼つてある。之を見たときは東京へでも歸つたやうな氣持がした。薩摩琵琶教授所の奥には、撥音が聞えて日本情緒を漂はしてゐたが、新演藝館といふペンキ塗の汚ない小屋の前に、取的らしい相撲が一人、浴衣がけに足駄を履いて浪花節を唸つてゐる圖などは之を以て代表的國民などとは見られなくなかつた。

隔世の感ある我銀行の股盛

支那街傳家句の股賑なる、到底筆紙に盡し難い景況であるが、又我邦人の發展勢力も、近時一層目覺ましいものがあるとは聞くだに心地よい。

同地は、純然なる支那行政權下にあつて、濱江縣道尹や同知事之を管轄してゐるのみならず、吉、黒兩省の交渉員なるものも、亦、駐在してゐるさうだ。或る最も信用ある銀行の支配人の語る處に依れば、露國革命の勃發以來、露國銀行の信用頓に失墜し、全市民の預金は殆んど悉く我正金、朝鮮兩銀行等に於て吸収し、現在では、其總額、兩銀行を合して金貨約七百萬留其他の預金亦五千萬留の巨額に達してゐる。現状を以てせば金貨を除く他の預金は、當分留の相場安定までは据置となるべき狀勢である。露國銀行を親銀行として、漸く其地歩の開拓に苦心してゐた當初を顧みると、全く隔世の感があるとは、其人の感慨談であつた。尙同銀行家の調査に依れば、留の思惑買は露國內よりは、寧ろ米國に於て豫想外に多額にして、其額五六億に上るべく、オムスク政府の承認實現せらるゝとも、

斯くの如く内外に散布した多額の留の整理は、到底容易の業ではあるまい、我政府は右承認問題と共に、如何なる成案を抱いてゐるか早く聞き度いものだ。とは同銀行家の謎のやうな話であつた。

在留邦人の誇りと其實勢力

當地に於ける日本人の發展は單に銀行等のみではなく、各方面に蔓つて、在留の邦人は今や約四千五六百人に達して居る。而して其發展の趨勢を卜するに、藝妓の輸入の激増に徴するも明だとは、某實業家の談であるが、戦前五十年内外の藝妓が今日は百二三十を以て數へられるといふの一事、既に妙とくも此方面の發展したことだけは立證し得る。在留邦人の誇はそれのみでなく、正金、朝鮮兩銀行の信用は如上の如く三井の牢乎たる勢力は、撫順炭の一手販賣に同市の炭價を左右して居る。而已、其他尙、哈爾濱全市を何時にても暗黒の都と化する力を有する新進北滿電氣の活躍等、數へ來れば限りがない。今や同市の實勢力は殆ど我實業家の掌裡に收められつゝあることは事實である。

市の懸案事業と附近の利源

市内電車開通は多年の懸案であつて、是亦必ず我邦人の手で成就せらるべき運命に在るとは、其前途の爲め欣ぶべきことである。斯て同市に於ける、邦人の將來は益々光明に輝いてゐるのみならず、哈爾濱夫れ自身も亦、前途の有望なることは、永く在留してゐる者の齊しく認むる處である。市街には空地といふものが殆ど見られない、工事の竣成に近い支那人の大建築は隨所に見られ、土地の價格の如き坪（七尺平方）最底三百二十圓、最高八九百圓を唱へてゐる。併し邊僻の地は今も尙極めて廉價で坪一圓内外、更に深く北滿の地に入れば、鐵道沿線でも、坪一厘二三毛を以て、賣買が行はれてゐる相である。

長春、哈爾濱間の鐵道問題は、やがて、戦後の交渉問題となるであらうが、之に就ては逸早くも茲に注目してゐる者がある許りでなく、猶、遠大な計畫を有つてゐる實業家もあると聞いた。既に露國の帝政時代に測量済みとなつてゐる、哈爾濱、ブラゴエ間の、例の哈黑鐵道豫定沿線の土地の買収を目論んでゐるなどは、其の一例であつて、道に大陸に活躍

してゐる實業家丈けあつて、投資の規模も却々遠大である。同鐵道も遠からず愈着手せられるとも聞いたが、其完成は西比利亞開發上、一大進歩を促すのであらう。

露國に斷念せられ日本に拾はる

目下在留日本商人の最も困難に感じてゐるのは、矢張り留相場の大變動である。露人との取引を金を以てしやうとしても實行不可能なので、已むなく露貨を以てして居るが、其決済に際し、留相場下落した場合は期日を確守するが、若し相場が高いとなれば、口實を設けて期日の約束を決して守らない狡猾な商人の多いのには、全く困るとは某實業家の述べである。同地の流通貨は露、日、支那貨の三種で露貨は市中の取引標準をケレンスキー札とし、市中のみではホルワット札も可成り流通しオムスク政府の新札は最も信用は薄く殊に外國銀行では取引をせぬといふことである。又、日貨は日本、朝鮮支那諸券も軍票で支那貨は官帖と洋錢票である。

要するに、哈爾濱は露國にとつては既に斷念せられた土地である。それは帝政時代に於

業にさうであつた。大連と旅順の兩門戸は一時の借りものであつた。其完成を見るや否や之を日本の専用に供せぬばならぬ羽目に陥つたのも、領土的非望を抱いて、四隣に武力的威壓を試みた皮肉な報酬である。之に反し、日、支人にとつては今後、北滿の産業、經濟を左右すべき市場として、兩國人の好個の活動地である。我正金の如きは、非常に支那人の信用を博し、随つて金融取引も却々殷盛だと聞いた。

對外政策として淺薄ではないか

又、此地には、關東都督府も、南滿鐵道會社も、各々官轄外の故を以て何等の保護も援助も與へない、元來南滿洲は、北滿洲あるが爲めに發達したる土地であつて、南滿の原動力は北滿を除いては他に求められない。然るに政府も都督府も、南滿鐵道會社も、冷然棄て、顧みないのは遺憾である。我商權の此地に樹てられたのは、明治三十九年末、東清鐵道の竣工後、同四十一年以降の事に屬するが、其主なる産物たる大豆の産額は漸次増加し本年は前年に比して約三倍に上つてゐるさうである。

又長春を境界として、南滿洲の大豆の産額は、略同一額なるも其將來の發達は北滿に存する。然るに勢力圏外に屬する故を以て、何等の施設を試みないのは、對外政策としては餘りに淺薄に過ぎはしないか。少くとも政府當局は、南北滿洲に對しては其政策的精神に於て、差別的思想を以て當るべきではない。而して問題自體から云へば、多少の困難と曲折に遭遇するは免れ難きも、此際速かに長春、哈爾濱間の鐵道を、完全に我手裡に收め、更に海外同胞の、直接負擔となるべき關稅の改正を企つべく、尙喫緊問題としては露貨の救済に努力して貰ひたい。とは在留實業家の異口同音の要求と理由とであるが、更に其要求を聞けば、海外在留民として其子弟を教育すべき、小學校を完全ならしむるは言ふ迄もなく、其他必要なのは病傷を治療すべき、病院の設備及墓地の專有である。此對内的問題とも稱すべき學校、病院、墓地問題は海外同胞の爲め政府自ら當然解決を與へねばならぬ重要問題であると共に、遠く異郷にある同胞の爲めに、深き同情に値すべき問題である。加之、之れがやがて帝國の文化的發達の程度を卜せらるゝ、一表徴ともなることであるから、爲政者は海外在留の少數國民の小問題として之れを觀るべきではあるまい。

(以上、哈爾濱、北滿)

テルに於て執筆)

米飯を食ひつゝ大興安嶺を越ゆ

六月十九日夜半、哈爾濱を發した我一行は、二十日午前八時半、齊々哈爾に着いた。此地は日露戦後、特に邦人の耳に親しい地である。我一行は同地駐屯歩兵第五十三聯隊の二箇中隊を訪問すべく下車し、東團長から將校兵士一同に對して慰問の辭を述べ、第二大隊長蟹江少佐から慇懃な答辭があつて後、土地の状況に關して種々談話を交換したが、同少佐は非常に部下を愛撫し、且國民として、大陸的知識の養成に苦心してゐる様であつた。同地は水質溷濁し、加ふるに蒙古風の砂塵甚だしく、保健上大なる害惡を及ぼしてゐることを聞き、特に同情の念禁する能はず、邦家の爲めに其困苦に堪へ、自愛を禱る旨を繰返して別れを告げた。同日午後一時、札蘭屯^{フランドン}を通過し、同六時布哈圖驛^{ブハトゥ}に着し、驛前に整列出迎への、歩兵第六聯隊第六中隊長荒井大尉以下に對し例の如く慰問の辭を述べた。同地は人口、約三千内露人千餘、支那人七百餘、邦人二百餘を算してゐるが、日露戦役當

時邦人の此地に在留せる者、僅かに二十名に満たなかつたさうである。齊々哈爾地方から滿洲里^{マンチユリ}を中心としてチタ地方に至る。數百里の間は、蒙古の砂漠に相連つて、見渡す限り茫々たる原野であるが、有名な興安嶺には、山に樹あり、溪には清流が通じて居る。汽車は大きく、將た小さく、螺旋狀の輪を描きつゝ、山巔を攀ぢ、漸くにして之れを越すのである。此工事は、世界の鐵道界でも稀なる様式だと聞いた。

砂漠の中のマンチユリ

冷たい蒙古風に面を爆して

二十一日、イルクーツクタイムの午前七時二十分、滿洲里に着いた。一行は、第五旅團司令部から出迎へられた、將校諸君と寫真班技師の手に依つて、先づ停車場前で、記念の撮影後、冷めたい蒙古風に面を晒しつゝ、砂塵の中を二十餘臺の馬車を聯ねて、第一に旅團司令部を慰問し、直に旅團長齋藤少將以下司令部員に對して、東團長から慰問の辭を述べ、之に對し、齋藤旅團長の答辭があつた。次に、露國兵營内に駐屯の歩兵第六聯隊及同

第六十八聯隊中の數個中隊に對し、營内練兵場に於て慰問の辭を述べたのであるが、齋藤少將は、最上級指揮官として再び正式に代表的答辭をなし、一行の慰問に對して、深く感謝の意を表した。正午、同少將の厚意により、營内に設けられた基督教青年會慰問部の軍人俱樂部で、兵食の饗應を受け、麥酒の杯を舉げて、互に健康を祝し、夫れより一行は齋藤少將等の案内で、營外、砂丘の上に建てられた、招魂碑を參拜した。

戰友の心盡しの手向草！

砂に培はれた小さい、黃白の可憐な草花が風に揺らめいてゐる外、何物の遺靈を慰むるものもない此砂丘に、護國の鬼と化した我忠勇なる將士は、君國の爲に殉じ光榮ある我が興國の將來と、其大目的の遂行とを永久に護つてゐるのである。碑前に手向けられた草花は彼等の上長、彼等の懐しい戰友の心盡しであらう。見るから暗涙の滂沱たるを禁する能はぬ、我一行は感慨無量の心地して嚴肅に參拜した。碑側に立つて回顧すれば、山又山の連りて、一木一草の遮るものがない。只、點々指し得るものは、放牧した幾百、幾千の牛

馬の群と、駱駝の隊列のみである。午後は陸軍病院に傷病兵を見舞ひ、司令部の厚意で、司令部と兵站部に分れて、快よい入浴に車塵を洗ひ、同日午後三時から齋藤少將の主催で露支兩國代表者と接見の機會を作る爲めに開かれた、東清鐵道俱樂部に於ける茶話會に臨んだ。

鐵道俱樂部に交はるモバ

俱樂部には會食場もあれば遊戯場もあり、集會場もあるといつたやうに、却々設備が整うてゐる。アカシャとボブラ樹の繁つた、庭内に建てられた六角堂は其會場であつた。齋藤少將の此地を守備するに當つて軍事的外交上一つの標語がある。即ち、滿洲里はモバであつて、此地に居住の露支兩國人と日本人とは其協力に依つて、開發維持に當らねばならぬといふので、露支兩國の將士に説くと同時に、露支兩國人にも説いてゐるとのことである。洵に此地は齋藤少將の言ふが如く、露、支、日の三國人多數を占めてゐると共に其協同の最も必要な地である。我一行を主賓とした茶話會は、齋藤少將の此標語の表現と

して肯くことが出来た。會は午後四時過ぎから開かれ、主人側では齋藤少將以下十數名の將校諸士、主賓として我が東團長外各議員並に其一行陪賓には支那側の黑龍江中京鐵路警備司令官陸軍中將車慶雲及同少佐張天驥の兩氏、露國側からは滿洲里市長と、セミヨノフ軍の同地守備隊長代理ムイリニコフ氏及其副官、並我が佐々木副領事、此の面々で、所謂出巴の代表者が一堂に集まつたといふ譯である。

六角堂に親善の卓を圍んで

馬蹄形に聯べた食卓の上には、例の露國特有の白く磨かれたニッケル製の品の良いサモヴァルが其處此處に置かれ、其間に釣鐘草のやうな花鉢で彩られる。そして、天井の萬國旗の蜘蛛手に張られてゐるのも俗ではない。ブランドーや白いウオッカ、それに葡萄酒の杯が一通り上げられてから、先づ齋藤少將の挨拶があつた。東團長は之に對し、此地に於ける露、支兩國代表者と接見の機會を作られた、齋藤旅團長の厚意を深謝したる後、我出兵理由に就いて國民一般の誤解なからんことを望み、『帝國は決して領土的野心を藏せず

只管、隣國の擾亂を憂ひ其一日も速かに、秩序の回復を希望するものであつて、是れ我帝國と其國民の衷情たりと述べ、更に衆議院は、世界の文化に些少たりとも貢獻せんが爲め西比利亞各都市の小學校兒童諸君に寄贈するに、文房具を以てせんと欲し、茲に持參せり幸ひに受納せられんことを望む』との旨を述べて其目錄を滿洲里市長に手交し、布哈國、海拉爾、オロワンナヤの各市に分配を依頼して席に着いた。

露國側代表者の感謝の辭

佐々木副領事は之れを丁寧に通譯し、更に同副領事の通譯で、滿洲里市長は起つて次のやうな謝辭を述べた。

自分は此市の市長として、日本の出兵理由に就ては其當初より之を諒解し、今日に至るまで何等の變る所なし、殊に齋藤少將とは別懇の交際を持続し居れり。日本衆議院議員團の軍隊慰問に際し、特に文明的贈品を受けたるは感謝の外なき次第なり。予も亦、之に酬ゆる爲め些少の品物を寄贈し、謝意の微衷を表せんと欲す、冀くは博物館にても陳

列せられたし、又日本軍に對する誤解云々に對しては、當初こそ多少其嫌ひもありたれ
今日に於ては斷じて之れなきを以て御安心を乞ひ度い。

次にセミヨノフ將軍の代理官たるムイリコフ氏も亦、通譯を介しセミヨノフ軍を代表し
て、議員各位に敬意を表すと冒頭し、セミヨノフ將軍は、日本出兵當時より祖國の爲めに
深く謝意を表し、今日と雖も何等變る處ないのみならず我軍隊一般に於ては、深く其真意
を諒とし居れりとの旨を衷心より切言した。東團長は更に一兩日中にチタに於て、セミヨ
ノフ將軍と親しく會見の機を得べく、今日より期待して居ると酬ひた。

車中將の説く日支親善論

日露の交驩が終ると、黒い色眼鏡をかけた車中將は、我士官學校を卒業したといふ張少
佐の通譯で、我一行の到着をも知らず、出迎へも爲さざりしは、失禮なり、偏に之を謝す
と述べ、更に今日に於て日露の親交は勿論、同種同文、唇齒輔車の密接なる關係を有する
日支兩國の提携は、益々其必要を加ふるに於て眞の親善の實を擧げざるべからず、此點に

就ては特に議員諸君の努力を俟つとて、辭令最も巧に兩國の親善を切言した。

茲に於て東團長は三度起つて、張少佐の通譯で日支親善論を試み、今後の努力を期すべ
きを誓つた、此間幾度か三國の將來と、其國民の利福の爲に乾盃し、歡談湧くが如く、記
念の撮影の後、更に邸内に出で、構内に遊戯する露國少年少女と相交つて再び撮影を試
み、互に握手して相別れたのは既に午後七時に近かつた。此日は我が無線電信所や市の唯
一の水源地を視察し、且市外遙に『驢濱府』を望み、蒙古の政廳の由來並に之に關聯した、
露、支、蒙三國の錯雜した外交譚を參謀大佐から聽き、歴史が語る國家の消長を滿洲里市
外に偲んだのであつた。

國境稅關事情

混沌亂雜極る滿洲里驛

滿洲里は云ふ迄もなく露支の國境に位置し、隨つて停車場には兩國の稅關がある。予等
の降車した時、可成り大いが薄汚い白壁の停車場附近には、露支兩國人に混じて、異様な

服装をした蒙古人が、雑踏を極めてゐた。西比利亞の何處の停車場でも見る如に、其混亂状態は予等の眼にも、もう可成り見慣れては來たが然し此處には所謂避難民といふよりは、寧ろ西比利亞の曠野を、夏となく冬となく、東から西へと轉々放浪して、其一生を旅から旅へ彷徨ふ露支人と、それに我等の同種で、而も其代表的人種の如く、世界に傳へられてゐる、蒙古人の異様な服装をした男女が其中に打ち混つてゐる。是等の人達は皆、國境税關の検査を受ける爲めに、二日も三日も甚だしいのは一週間も十日間も、停車場の内外に荷物を枕に露宿してゐるのだ、とは聞いても氣の毒に堪へぬ次第である。而も税關吏の検査は却々嚴密で、容易に通過しないといふ。これには有方な理由が二つある、一つは關税の収入はオムスク政府の歳入に繰入れられてゐるので、随つて其増收を計るのが其重大な目的であると同時に、最近某國が、名を軍需品に籍りて、可成り澤山の商品を輸送しやうとしたのが發覺せられたので、検査はそれ以來更に嚴密を加へたといふことである。それでも狡猾な支那商人となると、チタ市地方に商品を輸送するのに、税關の眼を遁れる爲めに、時間と勞力を惜まぬ支那人氣質を發揮して、遠く山中竊に輸送する者があるさうである。

ある。市の住民は支那人、邦人其大部分を占めてゐるが英、伊及モンゴリヤ人等も毛皮商として住居してゐるさうである。

居留民の動靜と市の土地建物

米人の定住者は僅に二名であると云はれてゐるが、其去來若くは其定職如何等は、殆ど端倪すべからずとは、永く同地に在留せる人の意味深い話であつた。更に猶太人は全人口の四分の一、即ち約五千内外の多數を占め、隱然一大勢力を成してゐるさうである。之は過激派——猶太復興運動——とを聯想することに於て、單に同市在留民の一特徴としてのみ、看過することが出來ぬ現象であらう。市街は一等街から六等街までに區別せられてゐる、一、二等街は相應に整つてゐるが、何分にも、砂漠の中に建てられた市街であるから道路は例に依つて砂塵に塗れてゐることは勿論である。電燈は市營であつて、其材料器具等は、一般入札に附してゐるが最近其入札に日米兩國商人の競争があつて五十萬留の入札評價に對し、我が北滿電氣會社は、僅に十萬留の差で敗れ、電燈器具の專賣權は、米國商

人の手に落ちたといふことである。此地方鐵道沿線の家屋は非常に拂底してゐるので、それを見越して土地建物會社などの設立を見るが、根據ある勢力の扶植上、大に注意を要すべき事である。尙此地方鐵道沿線の警備には、ホルワツト軍之に當り、セミヨノフ軍は市の警衛に任じ、税關は叙上の如くオムスク政府の直轄に屬してゐる、

東清、後貝加爾鐵道の接合地

滿洲里は前記の如く露支國境に位してゐるが、嚴密に云へば同驛の東方約二十露里の地點にある、マチエーフスカヤ驛を以て兩國の國境と稱すべきである。滿洲里驛は東清、後貝加爾兩鐵道の接合點で、東清鐵道の租借地の中央にある。而して其ブラントフォームの中央が即ち、兩鐵道線の分るゝ處であつて、同時に又連絡する處である。此驛は哈爾濱を距る西方五百八十哩の地點に所在し、市は東清鐵道の附屬地内に於て四方に發展してゐる。其規模は現狀を以て見れば、極めて小さい。正確な處は聞き洩らしたが、何でも東西約千五六百米突南北約千米突に充たざる廣袤で、現今の市は其發展の一素地たるに過ぎないの

である。鐵道沿線の市街は、殆ど所謂鐵道街であつて、此處には例に依つて、鐵道職員や従業員の大小同型の社宅が軒を聯ね、商業地區は主として後貝加爾區に屬してゐる。而して主なる官設の建物は大部分停車場の南方に所在してゐるといふことである。

對滿蒙貿易と運輸交通機關

我一行を停車場から、我旅團司令部へ運んだ約二十臺の馬車は立ちどころに準備せられたが、其馬車は悉く西比利亞地方特有の馬車——二頭立の二人乃至三人乗の辻馬車で、馭者は殆ど例の如く支那山東邊の苦力である。それにしても此小都市に、此種の辻馬車が二百臺以上に及ぶとは随分多い數である。而も其需要は却々頻繁で予等の問ひに答へた一馭者の如きは、もう一萬留の札は、懐にあると大得意であつた。

運輸交通機關は此多數の馬車のみではなく、アルゲン河やインゴタ河には舟航の利便あり、又多數の駱駝の堅忍な其脊に依つて、最も危険の少い多量の物資が運搬せられる。確か冒險的旅行家を以て聞えた大谷光瑞師等一行の企てで、此地方から蒙古探檢に自動車の

使用を試みたが、何處かの河の渡渉に失敗したやうに記憶して居る。現に此地の或人々の腦裡にも、蒙古貿易に、庫倫クレンまで物資運搬を自動車の利器に據らんとするの計畫が描れてゐるといふことである。蓋し之は空想でもなければ架空の冒險事業でもあるまい。滿洲里を足場に、蒙古へ向つて其手足を伸ばさんとする、我新進の貿易家、事業家の計畫としては、寧ろ當然であらねばならぬ。困難ではあらう、併し此遠大な規模と計畫、而して之れが決行の意氣を有せぬ限り、我對滿蒙貿易の成功は覺束ないこと、思はれる。而して右の如き計畫は單に、一實業家の一成功を期待すべき計畫としてのみ之を見るべきではあるまい。予等の此地を通過したのは六月の下旬であつたが、二十餘臺の馬車の車塵は、底冷い風に漂々として天日を蔽ふの觀を呈した、五六兩月は此地方の風塵の最も多い季節で、冬期の氣温は氷點下四十五度乃至五十度に及び、十月中旬には早くも既に結氷するさうである。

滿洲里地方の商取引關係

滿洲里地方に於ける商業取引は、例の過激派の蜂起に阻害せられて、一時杜絶の姿であ

つたが、右過激派はセミヨノフ軍の討伐に遭つて、其勢力を増大する能はず、引續き我軍隊の駐屯するあり、先づ現状に於ては何等支障なく行はれてゐるやうである。往年此地方附近の取引は滿蒙及露領部落等を相手に、相當に殷賑を極めたが例の露支國境貿易の禁止に亞いで、前記の如く當時過激派の跋扈を見たる爲め、其後、支那政府の露支國境貿易解禁も事實上何等の効果がなかつた。然し我軍隊の嚴然と屯し、旭日旗の翻る處、自ら強い沈黙の保障を得て、今日では曩日に勝る商勢を示してゐるといふことである。

一行は市街視察の途次、市の大市場を巡視する機會を得た。アンペラ葺の多い販賣店には、主として支那商人が日常用品を並べて顧客を惹いてゐる。雜貨の大部分は我商品でもそれが見るからに粗惡な、大阪邊の粗製濫造品である。小指大の怪しげな香水が一瓶十ニ、三留(我八十五六錢)を唱へ、網のやうな穿けば直ぐに足が眞黒に染まりさうな黒の靴下が、二十留(一圓三四十内外)近くするのだといふのだから全く驚く。市場を一瞥すると物資の缺乏は成る程と肯かれる。果物の殊に少い此地方で、林檎一個約八十錢、夏蜜柑が一個四十錢などは日本内地ではちよつと想像も及ばない。それでも露人は平氣で買つて、

店先きに立つて嚙つてゐる。店頭に晒されたシャツや、猿股類の粗悪なことは、到底内地の何んな邊僻な地方でも、發見することはできない。ドライノール湖産だといふ鯉や鮒が衡で賣られてそれを露人の主婦らしいのが、バスケットの中に盛に入れて行くのを見ても此地方露人の一嗜好が窺はれる。

對蒙古貿易品と其狀況

滿洲里貿易の主要な部分を占めてゐるのは、何といつても蒙古貿易であるが、同地向の商品には麥粉、茶、粟、煙草、燐寸、衣服類の材料となる赤や青やの布帛類で、それが彼等の嗜好に適してゐる。近來では蒙古人も却々ハイカラになつて、女の頭にリボンなど飾つてゐるのが鐵道沿線でも随分見られる。随つて此種の贅澤な裝飾品も可成り多く輸入せられるといふことである。同地は彼等の飼育した家畜や獸毛皮革等と、物々交換である。最近の調査に依れば、滿洲里、蒙古貿易品目中、主なる出荷品は、洋布、煙草、油類、緞子等で、年額煙草約三百萬元、洋布五十五、六萬元、油類二十萬元内外といふ巨額を示してゐる。而して入荷は矢張り羊毛を第一とし、年額約三百萬元、牛同四百二十萬元、羊及羊皮が各々六七十萬元だとは信用すべき在留貿易商の概算である。同地の取引は極めて小口のものゝみで、本邦商品の輸入は其多くは支那商人の手で行はれ、木綿、金巾、茶、砂糖、莫大小、靴下、タオル石鹼其他玩具雜貨類等は前述の如く殆んど本邦品の獨占であるが、果して此地方の消費者は永く粗製濫造品を甘んじて購買するであらうか？ 聽て、來るべき我が粗製商品の運命は豫め知るべきのみである。(以上滿洲里停車場列車内に於て執筆)

通關手續上の注意事項

我滿蒙貿易の中心市場として見たる、滿洲里に關する概況に就ては上述の如くであるが予は此際更に後貝加爾州及、歐露に對する輸出入貿易と密接の關係を有する、露國税關事情、並旅券検査手續に就いて、同地官憲及在留民等より聽取したる處を概括記述して、如何に露國の事情が紛亂して居るかを參考に供したいと思ふ。

滿洲里驛に於ける露國税關の検査の嚴密を加へたる最近の理由に關しては、前回に於て

簡單に述べて置いたが、茲に本邦輸出貿易者の間に特に其検査峻嚴の評ある、同税關の事情と、我官憲の之に對する交渉並に其結果に就て述べて見やうならば、抑も該税關の任務は滿洲里驛を通過して、後貝加爾州に輸入せられる、物資に對して検査課税するものであるが、若し、滿洲地方から、更に歐露方面に其物資を輸入しやうと思へば、重ねてイリクーツク税關に於て検査課税を受けねばならぬのであつて、滿洲里のみの検査で済むものは旅券のみである。

税率と我官憲の交渉始末

然らば其税率はと云へば、大體に於て千九百〇六年に制定せられたものを適用し、ケレンスキー時代の法令に準據してゐるが、日本品に對してはセミヨンフは、或る期間無税通過を許可したこともあるさうである。而して該税關は今日まで過激派の占領妨害にも遭はずして、其収入にも影響なく税關吏と共に、現今ではオムスク政府の直轄に屬してゐる。然し一時は全くの無所屬で、關稅收入は擧げて税關吏の生活費に充てられてゐた。過去に

於ける検査峻嚴、課税の苛酷は此關吏の生活費充當時代であつたので、其結果は、自ら物資輸入の減少を來したのは當然であらねばならぬ。昨年我出兵後、此事實を聞いた我軍隊と同地駐在の佐々木副領事は、同税關に對して交渉する所あり、今日では少くとも本邦物資に對しては、検査峻嚴の手は緩められたといふことである。更に又我官憲は同地方物資缺乏の際であるから、該税關を一時、撤廢しては如何との交渉を試たといふ説もある。其實否は、予の與り知らぬ處であるが、尙弊害の存する事實は之を窺ふことが出来るではないか。

便利な短期旅行券の發行

旅券問題に對しても、同領事と露國官憲との間に行はれたる交渉の結果、帝國領事館に於ても、充分其取締の責に任ずると共に、領事又は其代理官吏に於てのみ、與へたる證明書の所有者に對しては、露國官憲は進んで後貝加爾州の旅行を自由にし、旅券に代へることを得ることを承諾したさうである。我が領事館亦右證明書は成る可く、極めて短期間の

旅行を條件として、附與する方針だといふことであるから、調査若くは商用旅行者に取つては、至極便利になつた譯である。若夫れ後貝加爾州を経て、イルクーツク税關を、通關せんとする物資に對しては、豫め其荷積地に於て、通關手續きを終了したる上でなければ其物資は違法處分として悉く沒收せられることが随分多いさうで、殊に、同地宛の本邦商品にして、手續未了の故を以て、此處分を受け、又は多大の困難に遭遇した者は尠くない左れば此手續を履んだ上で發送せねば、思はぬ損失を招くから、十分注意する必要がある。同驛に於ける支那税關は、露國税關の貨物證明書に依つて、直に係員をして手續を行はしめ、二十四時間以内に迅速に査了せしむる筈であるが、後貝加爾州方面に輸出する物資の、該驛露支兩國税關の通過には、其當時の物資の集積情況如何に依るけれども、概して三四日から四五日を要するものと假定せねばならぬとは實驗者の言である。

西の方チタ市に向つて

露支國境にして又我旅團司令部の所在する、滿洲里に於ける各守備部隊を慰問すると共に、

露支兩國代表者と接見交驛し、更に同市を視察して該地方に關する各種事情の調査を終へたる我議員團一行は、六月二十二日、イルクーツク時の午後一時二十七分、齋藤旅團長以下、司令部員、及、露支兩國代表者等の見送りを受け、其豫定の進路に従うて西の方チタ市へ向つて出發した。同日午後五時過ぎダウーリヤ着、乃ち當地の守備として歩兵第六聯隊の一箇中隊を率ゐる、岩田中隊長以下に對し慰問の辭を述べたる後、一同記念の撮影を試みた。此地は日露戰後、露國が一箇軍團の兵を蓄へ且陸軍士官養成所をも有した處で、革命前までは、列車の此地を通過するに際しては、必ず車窓を蔽はしめたさうであるが兵營は今や我守備隊と蒙古兵の營舎となつてゐるのである。蒙古は二十歳以上の男子を皆兵としてゐるが此處には約千名の士卒が守備の任に當り、此地方に蜂起した過激派の討伐に際しては、セミヨノフ軍と協力して大に奮闘したさうである。此邊、過激派の勢力は滿洲里の北方アレキサンドロフスキー・ザワオード及カルギンスク地方等を根據として、其數現今尙數百に及ぶといふことである。

古英雄成吉斯汗の戴冠式場

翌二十三日午前二時半オロ井ワンナヤ驛に着、同驛には我が停車場司令部がある、オロ井ワンナヤはオノン河の邊にある一小都市で、其河の附近は往昔英雄成吉斯汗が戴冠式を行つたと傳へらるゝ、歴史上由緒ある土地である。現今露國の擾亂に際し、露國復興を叫んで兵を擧げた、セミヨノフ將軍も亦、此地方の出身だと聞くに及んでは、そこに何等かの奇縁がある様にも思はれる。我一行を載せた列車の、同河上を通過したときは、其鐵橋は破壊せられ應急修理の假木橋を以て其用を便じてゐた、過激派の襲撃を受け斯く被害を蒙つたのだといふことであつた。

滿洲里出發以來、車窓から鐵道沿線を眺めると、其地味は齊々哈爾滿洲里間と略同様で概して砂漠系の砂地のみである。だから野菜等の栽培は殆んど不可能で、其供給を得るのに甚だしい困難を感ずるとは、ダウーリヤ守備隊員の苦心談として、聞いたが、今親しく沿線を通過して見ると、全く話の通りである。然しオロ井ワンナヤ驛を出るに連れて、漸

く青々たる山野の草木を望み、カルイムスカヤ驛附近に近づくに及んで、鬱蒼たる樹木の繁茂してゐるのが眼に入つた。我一行は此驛でも亦、守備隊々長酒井大尉以下に對して、慰問を試みたのであつた。

後貝加爾と黑龍鐵道の分岐驛

カルイムスカヤ驛は後貝加爾鐵道と、黑龍鐵道との分岐點であつて、同時に又接合點である。午後三時同驛を發車した我が列車は、マツカウエーエフ、クルチナ等の各驛を通過して、其の日の午後八時四十五分、漸くチタ市に入り市街に最も近い、第二チタ驛に到着した。打見た處、道に西比利亞屈指の大都市の玄關だけあつて、停車場も却々廣大である。チタには此驛の外に、第一と第三と合して三つの停車場を有してゐる。而して大庭中將の率ゐる第三師團の司令部も亦、此地に置かれてゐるのである。我一行は降車すると驛に出迎へられた、師團長代理を始め司令部員の挨拶を受け、更に後貝加爾州長代理たる輔佐官、セミヨノフ將軍代理のアサノシーツ少將と、東團長及各議員との間に、握手を交換

して歓迎の挨拶を受け、ア少将からは翌日舉行せらるゝ、セミヨノフ將軍の儀式に參列の招待ありて之に應ずべきを約し、師團司令部以下各部隊の慰問其他を、翌日の日程に譲り構内引込線上の列車内に、其夜を送ることゝした。黄昏の色漸く濃い廣い驛の内外には、群集が例の如く雑沓を極めてゐる。

西比利亞の京都チタ

第三師團司令部を訪問す

チタ市の一夜を、第二チタ驛構内列車内に過ごした我一行は、翌二十四日午前八時三十分、第三師團から特に接待員として途中まで出迎へしめられた、蜂須賀歩兵中佐、分玉軍醫正等の案内で、先づ第三師團司令部を訪問した。司令部は市街目貫の宏壯な建物、それは當市第一の大百貨店のフロロフ支店を借用してゐるのださうである。東京の三越程もあらうと思はれる、大きな建物の三階に上ると、其處には幾つもの室があつて、各扉には「參

謀長室」「副官室」「食堂」杯といふ文字が認められる。日本の舊い役所の中を歩くやうな感じのする、廣い薄暗い廊下の行詰らうとする一隅に、師團長室がある。奥村參謀長と副官との案内で室内に招せられると、頭の綺麗に禿上つた眼の大きい、見るからに智囊の人らしい大庭師團長は、靜に起つて一行を迎へた。

我が士卒の保健と思想問題

東團長乃ち鄭重なる慰問辭を陳ぶるや、大庭師團長は先づ遠路慰問の勞を感謝する旨を以て酬いた後、此際特に議員諸君に報告すべき二事ありとて、師團管下將卒の保健状態と、思想問題とに就いて語つて曰く

『昨秋出征に際し、陸軍當局並に新聞紙の報道に依つて、陣中生活の困難を豫想したりしに、渡來後の經驗に依れば、零下二十乃至五十度の嚴寒も豫期程の苦痛にあらず。且つ風土の異なる地に出征せりとの感は士卒の間に深く、各自戒心せるの故か、驚るべく個人衛生の發達を示し、爲に保健状態は寧ろ、内地在營當時以上に好成绩を擧ぐるを得

たり。

又士卒の思想問題に就ては、内地の識者間に種々懸念せられ、随つて其論議をも耳にせるが露國內の秩序破壊せられ、國情の慘憺たる有様を眼のあたり目撃したる我が士卒の、冷靜なる理性の判断は、却つて之れを否定し、顧みて帝國の秩序整然として、國民和親の裡に興隆の氣昂れるを想ひ、我帝國と其國民との、如何に幸福なるかを思ひ、熱心其職責に任じつゝ、あるは師團長たる予の親しく感得する處にして、過激思想感染の如きは、眞に杞憂たることを斷言して憚らぬ次第なり。

而して、一度び戦線に立つや、勇猛果敢、時に歩哨等の夜襲に遭うて衆寡敵せず、遂に仆れたる者あるも、眞に刀折れ、矢盡きたる後に於て然るのみ、其疵は悉く向疵にして、四邊の草木を染めたる鮮血は勇戦力闘の状を、歴然として偲ばしむるものありとは其都度接する報告なり、斯の如く、我士卒の心身は益々健全なり、予は是れ偏に我國民教育の精華なることを切に感ず。今、衆議院議員團諸氏を迎へて、先づ此欣ぶべき二事を報告することを得たるは、予の最も光榮とする處なり』

大庭中將の面上感激と昂奮の情溢る

斯く結んだ大庭中將の面上には、感激と昂奮との情が溢れてゐた。

師團長の、極めて緊張した此の傾聴すべき報告が終ると、主客共に椅子を寄せて、打寛いだ談話の花が咲いた。師團長や參謀長からは、此の市の状勢を説くと、一行は又、浦潮上陸以來各地に於ける、巡歴慰問の狀況を語つて、愉快な談話は數刻の間交換せらるゝのであつた。斯くて一行は司令部の厚意で、旅行中唯一の樂みとして居る入浴の爲めに、軍隊使用の市内の浴場へと急いだ。

數日の車塵を露西亞風呂の大きい浴場で洗ひ落し、頓に蘇生の思ひをした一行は、快よい身體を自動車に載せて、更に當日の日程に隨ひ、後貝加爾州廳を訪ふて迎へ出でたる、州長タスキン氏及其補佐官と握手した。

後貝加爾州廳の握手

東團長は「我が衆議院は派遣軍隊慰問の途次、西比利亞各都市巡歴に際し、露國の現状

に同情し、其救援の一端とし、將、又、世界の文化に貢献せん微衷よりして、各都市小學兒童に寄贈せんと欲し、予等一行に託するに文房具を以てせり」とて其目錄を州長に手交した。夕州長は我が衆議院の厚意を深く感謝する旨を述べ、特に「斯る文明的寄贈品を受くるは予は勿論小學兒童の感銘、欣喜する處なるべし」との謝辭を以て對へた。夕州長は更に語を更めて曰く「諸君の如き日本の代表的名士の、遠く來訪せらるゝは、我露國及予等の如き職務にある者の最も欣幸とする處なるが、予の特に愉快に堪えざるは諸君が日本立法府の議員たること是なり。予自身も亦、露國議會の最後の議員として、立法府に列したる經歷を有すればなり」

篤實の好紳士タスキン州長

其思慮あり、教養あり、而して篤實な好個の紳士らしい氏は、斯く語り出で、往時の追懷に耽つてゐるものゝやうに、暫し通譯の言葉に耳を傾け、獨り笑ひを含んで其通せられるのを俟つてゐた。氏は翌日を期して市外の別荘に我一行を招待せんことを申出でたが、

豫定の行程既に其餘日はないからとて、厚意を謝して別れを告げ、再び自動車を走らして程近い、アタマン・セミヨノフ將軍を訪問すべく、其私邸の前に車を停めた。

アタマン・セミヨノフとの會見

門もなければ前裁も無い、街路から直ぐ入口になつて居る、白壁のゴジツク型―餘り廣くもなささうな建物が、即ちアタマン・セミヨノフ將軍の私邸である。警衛歩哨の哥薩克兵の敬禮を受て、室内に入れば直ぐ其隣は客間らしい。一行は先づ其處に招せられると間もなく次の室から活潑な靴音が聞えて、セミヨノフ將軍の巨軀が一行の前に現はれた、案内の黒澤參謀大佐の紹介を俟つて、彼は其大きな手を差し伸べて、一行と一々堅い熱心な握手を交はして巡はつた後、自ら、一人々々に椅子を薦めた。

鏡の前の白菊と嬌艶な女優の姿

今現にセミヨノフ將軍と我一行と對座して居る其室を見れば、調度裝飾の模様、如何に

も婦人室をでも思はせるやうに、瀟洒で明るい。長い大きな姿見は綺麗に拭はれ、其臺の上には此地方には珍らしい、白菊の大きい鉢植が飾られてある。紅色の多い露西亞更紗を以て蔽はれた壁の下には、赤い長椅子が配せられ、壁間高く掲げた其額面には、女優の寫眞でもあり相な嬌艶の姿が、スツキリと浮んで見える。

セミヨノフ將軍と我東團長とを中心として、馬蹄形に並んだ一同が椅子に着くと、室の其處此處に飾られたゴム樹の鉢植の潤い葉影の間から、先づセミヨノフ將軍の一行安着の祝辭が聞えたのを最初に、議員諸君と同將軍との間に、談話はそれからそれへと交換せられた。「日本帝國は露國の秩序紊亂に同情し、一日も速かに其恢復を祈れり、而して其恢復の爲めに努力せる將軍の勞を多とせる我が帝國は、其同情の迸るところ、出兵を見るに至れるが勿論何等野心を抱藏するが如きなきは、將軍亦之を諒とせん、左るにても、過激派の掃討には尙多大の困苦あるべく、眞に同情に堪へざるも、今後一層奮闘努力を要すべし」として同情慰問の辭を寄せたるに將軍は靜かに

米軍に對して予は愉快を感じず

「日本の我露國に對し、更に又、予に對して表せられたる其厚意、並援助は、予は勿論露國の爲に深く感謝する所也。幸ひ今日の如く秩序漸く保持せられつゝあるは、日本の援助與つて力あり、殊に予に取つては、永久に日本の厚意を忘る可らず、オムスク政府に對しても、近く列國の承認を経んとするが如し、然らば國內の秩序及其基礎は、更に鞏固を加ふべきなり」として心から深く日本の徳を感謝し、更に「過日も五六百名より成る過激派の一團を掃蕩せるが、夏季は山野に樹木繁茂し、潜伏容易なる爲め、搜索及戰鬥上一層の困難を感ず」として其苦心を語り、最後に「米軍の守備する處、却て過激派の跋扈、跳梁を見るの狀あり、予は心中窃に米軍に對しては、愉快を感せず」と語り終つた將軍の顔は澁つてゐた。

井上ホテルの招待午餐會

セミヨノフ將軍と、其私邸に於て正式の會見を終つた我一行は、更に同將軍の主催に係

る、午餐會に列する爲め、再び自動車を驅つて師團司令部に近い井上ホテルに赴いた。此ホテルは露人の經營する處であつたが、最近邦人井上某の手に移つた市内第一流のホテルである。長劍を肩からかけた、敏捷らしい面馴染のセミヨノフ將軍の秘書武官に導かれ、二階に上ると其處の喫烟室には、先着のアサノシーツ少將等が待受けてゐて接待に努める待間程なく階段を上る、セミヨノフ將軍の忙はしい靴音が聞えるかと思ふと、直ぐ其面が見えて、彼の手は又、一しきり忙はしく握手に働いたが、彼は椅子にも倚らうともせず、更に自らシガラの函を持廻つて一人々々に薦める。彼の心は正に其幹旋にのみ注がれてゐるのである。心からか彼の面上に喜悅の色が輝いてゐた。

漏れ来る美しい旋律の流れ

雑談中に陪賓として招待せられた彼の幕僚連や、州長タスキンの面も揃ふと、彼は先づ起つて一同を食堂へと案内した。其刹那、室の一隅、柔かいカーテンを漏れて、ヴァイオリンとピアノの美しい旋律メロディが流れて来る。十數日間茫漠たる天地の間を駛つた車中に、

蠅と塵とになやまされて、美しいもの柔かいものに、漸く飢んとした予の心は、遽に蘇へつて、自ら其心の躍るのを覚えざるを得なかつた。長方形に設けられた食卓の中央に、主人のセ將軍先づ立ち、之に相對して團長東代議士が招せられる。

其右にはタスキン州長、セ將軍と東團長とを各狹んで議員諸君と陸軍側の將校連や一行の席が夫々定められた。セ將軍は白い壁間に掲げられた、天女が鷲を弄んでゐる美しい油繪と、出入口に懸つた濃いオリブ色の緞子のカーテンとを背景に、其大きい活々した身體を、軽く椅子に倚せて、ウオツカの盃を舉げて熾に應酬するのであつた。

三十而立の未成長の英雄

セミヨノフは、當年僅に三十歳の青年だと聞いた。三十而立、彼は古語の如く、正に三十にして立つた未成長の英雄である。國を舉げて過激派の蹂躪に委せんとする際、露國復興の義を唱へ、先づ滿洲里の野に兵を擧げ、之を恢復せんと企てたのは實に、彼れセミヨノフであつた。打見た處、彼の風貌は一寸寫眞や繪畫などで見る、奈翁の風貌を偲ばせる

ものがある。殊に其廣い額と、其上に輪をなして垂れかけた髪の恰好などは、全くよく似通つてゐる。其濃く荒い鼻下の鬚と、而して横溢した精力を包んでゐるさうな六尺豊の巨軀と、シャツのやうな仕立方の哥薩克の軍服、思ひ切り太いズボンの紫紺には、巾の廣い黄い線が、くつきりと彩られて、大きい腹には生地の儘の帶革が絡まつてゐる。

彼に對する最初の印象

露西亞特有の長靴も相應はしく、左胸に輝く赤い十字勳章、亦、當年の武勳を語つて、威容自ら整ひ、其堂々たる風采は、確に統領たるの氣格を備へてゐる。けれども予をして一見、奈翁を偲ばしめた彼の風貌も之れを熟視すると、其處に又、自ら其印象を異にするものがある。彼の額は廣い、然し奈翁の如く、絶大の智慮ありとも思はせぬと同時に、彼の巨軀より流れ出づる氣分と、空氣とは、スラブ、殊にコサツク特有の野性の満々たるを覺えしめる。

洗練された、ラテンの血の結晶たる奈翁と、鈍重にして野趣の漲つたスラブの血の流れ

を享けた、彼と此との間には、争ふべからざる血の相異がある。然しながら、彼は何となく人をして親しましめ、其部下をして信服せしむるだけの、一種天成の魅力を有してゐることは、親しく接した者の、齊しく認むる處であらう。彼の此の魅力、此の否み難く、云ふべからざる其親しみが、彼をして今日の大を成さしめたのではなからうか、勿論、亂世に於て、一部の統領たり、一種の英雄たる、素より力の賜であらうけれども、彼に於ては、予は其力を感ずるよりは、寧ろ其徳風を認める、さあれ、彼も亦、洵に一種の人傑たるを失はない。

食卓は随分賑つた。主人のセ將軍を始め、其幕僚の各武人とは、初對面のやうな感じは少しもしなかつた程、それ程打つけてゐた。氣取らず構へぬ、彼等には偽善と虚偽の假面は無用のもの、如くであつた。

斯くて、主客の間には幾度かウオツカの盃は擧げられ、そして互に健康を祝する言葉は兩者の間に絶えず交された。

ウラジミル王とウオツカ

セ將軍の叔父さんだといふ、セミヨノフ中將、名を逸したが後貝加爾州守備司令官の某中將、例のアサノシート少將は勿論、其他の若い武官達は、熾に一行に對して、強烈なウオツカの盃を乾さんことを、強ひて侑むるのであつた。一體、露人は酒を侑めることが上手であるが、特に、露人になくはならぬ、寧ろ露西亞國民生活の一大特徴と稱られ、又同時に其基調をなしてゐるとまで認められる、其ウオツカ、麥から醸造したといふ、無色透明な香氣の高い、強酒ウオツカを彼等露人は日常の食事にも必ずその度毎に、四、五杯位あふるといふことである。其昔、ウラヂミル王が、國教を回々教に選ばんとして、其教義に禁酒の鐵則あるを發見し「酒を禁せば予と人民は死せん」とて遽に前意を翻して之を棄て、遂に希臘正教を以て國教としたといふ話を聽いてゐたが、彼等の飲酒は全く傳統的國風であらう。

予は今現に、彼等の飲酒振りとは侑めるといふよりは、却つて強ふるといふの適當とする

彼等の「酒」に對する態度を熟々眺めながら、成る程と獨り心に肯いた。

舊露國の典型的武人の文藝觀

後貝加爾州守備司令官の中將は如何にも、舊帝政時代の露國武人を偲ばせる典型的武人の如く思はれた。食卓を隣した予は、通譯を介して盛んに談話を試みたが、中將は容姿秀麗にして、而も豁達な、時に、三軍を指揮し、時に又、好個の外交官たり得る人である。

氏は今日尙、舊露西亞の文物制度を謳歌し、其復興を今も尙夢んでゐるやうであつた。予は色々な話の末、露國の有する豊富な文藝作品中、孰れを好むやとの問を試みたるに、彼は言下に、トルストイを挙げ、其作品の偉大を頌した後、セバストポリやクロイツェルソナタなどは、特に耽讀措かざる處で、特に西比利亞の自然を描いたものでは、コロレンコを其尤なるものとして、挙げねばならぬと附言した。そして直ぐ又、然し女の描寫は何といつても、ツルゲニエーフに及ぶものはなからうと言ひ足した氏の大きな眼は、ウオツカの酔に濕んで一層美しく輝いてゐた。

露西亞的想像の生んだスラブ神話

けれども、中將の予に語らんと欲したのは、尙他にあつたらしい。露西亞特有の、所謂露西亞的想像の生んだスラブ神話、殊に古代北方の神妖の傳説と、物語とを獨り興趣を覺えたかの如く、半獨語的に語つてゐた。それは其言葉の其處、此處に、ムロムだの、イリアだのといふ、傳説中の英雄の名が、露語を解せぬ予にも聞きとられたのに依つて、それと想像せられたのであつた。中將も亦「何故、我が聖露西亞に、尙多くの英雄出でざるか」といふあの有名な叙事詩^{ビリナ}に養はれ、更に又、夫の國民的英雄譚に心を躍らした、過去の若き日の夢を逐うて、露西亞的豊富な想像の波紋を、今も尙其胸裡に描いてゐるのではあるまいか、予は獨りで恁なことを、物語をでも讀むやうな氣分で考へてゐると、急にセミヨノフ將軍の聲が予の耳に響いた。予の白夢の如き瞬時の物語の裡に、若き英雄セミヨノフ其人も亦、自ら加はらざるを得なかつた。

名詩人の「短曲」を讀むやうな

珍味と佳肴とを盛つた皿は、幾度か換られた。中にも、此の附近のインゴタやオノガの河中で漁れると云ふ、川魚の黒い柔かい卵などは随分珍味であつた。それをバンに添へて食べると、何とも云へぬ清新な氣分が味はへる。此卵は却々高價な物で、普通の食卓には容易に上るものではない、とは露西亞通の或將校の説明であつた。そのうちに又一しきり主客の間に、ウオツカの盃は舉げられる。そして若い紅顔の樂手が渾身の力を注いだやうなヴァイオリンの絃の震へ、樂聖でもありさうな風采の老樂手の運ぶピアノの鍵⁺をすべる其響、それは恰も名詩人の「短曲」^{シヨルターゴエム}をでも讀むやうな氣分を唆る。道に音樂の國だと予は知らずながらさう思つた。主人の統領^{アタマン}は勿論、其幕僚達の款待^{ホスピタリチ}は實に心をこめたものであつた

不幸な時に眞實の親善は表はれる

デザート⁺の皿が運ばれた時、靜かに椅子を離れたセミヨノフ將軍は、一寸身繕いに氣を

配つて、徐に口を開いた。其刹那、一同の眼は其身邊に集まつた。彼の言葉は自ら緊張してゐた「露國の諺に不幸な時に眞實の親善は表せられるといふ事がある」と云ふ冒頭に次で我が露國は、一時は極めて不況に陥つた。露國復興——此秋に當り、予等の唱へて起した此運動に對しては、何れよりも更に援助を求むることを得なかつた。乍去、予は復興の爲めに集まつた同志と共に、先づ兵を滿洲里に擧げ、以て祖國の敵たる過激派と戦はんとした。けれども其當時、予等の手には武器と名づくべき何物をも有せなかつた。

「日出る國」より最大の援助を！

彼は意氣を負うて起つた當年の苦心を自ら偲び、遠く思ひを當時に馳せて、湧然として起る、過去の思ひ出に浸つてゐたやうであつたが、遽に語勢を強めて計らざりき、此秋、此際、最も有力なる日本帝國の援助を蒙り、日本帝國が我等の爲に最大の力を致されんとは「日出る國」より。我等は「日出る國」より——斯くて予等は武裝するを得た、而して歐露の頽勢を挽回すべく進んだ。

彼は其の當時の喜悅を今も尙感するが如く其面に涙はしつゝ、我帝國の援助を衷心感謝しつゝあるものゝ如く、一同の顔を暫し打眺めてゐたが、更に爾來、日本の援助は、我が露國の津々浦々に迄及んでゐる。斯くの如き親善は何物を以てしても、到底破壊することを得ぬであらう。今、此食卓に在る我々少數の軍人のみならず、コサツク全體の感謝措かざる處である。

「バンザイ」と「ウラー」を唱えて

心からなる謝意を謹嚴なる態度と言語とに表し、進んで最後に本日此席に於て、計らずも又茲に日本の代表者たる、衆議院議員諸君と共に會見することを得るのは、予の光榮とし、衷心満足に堪へざる處である。予は素より才能なき者なるも、日本帝國との親善に對しては、心中更に燃えつゝあることを告白することを得る而して日露の親善は、更に一步を列國に向つて進めつゝあることを確信する、予は此祝日を諸君と共に祝はんとす。

衷心の感謝と喜悅の情に燃えた彼の食卓辭は、此比較的短い言葉に綴られて、それが終ると自ら盃を擧げて、日本帝國と其國民の爲めに、一同と共にバンザイを連唱した。我議員團一行亦ウラーを唱へて之に酬いた。

オノガ河畔の古英雄を偲ぼしむ

續いて我一行を代表して東團長は之れに對ふべく身を起して「日本は由來正義仁道の國と稱せられ、義を見て起つ國民であつて傳統的義憤の國民の血は今も尙淪る處はない」東氏は先づ我が日本帝國の由來と國民性とを明かにしたる後

今回露國の擾亂に際し、其隣邦として座視するに忍びず、他の聯合國と共に、其秩序安寧を維持せんとの衷情より、遂に出兵した。而してアタマン・セミヨノフ將軍の行動は、我帝國の主義に一致したるに對し、帝國が致した多少の援助に關し、鄭重なる感謝の辭を受くるは未だ當らぬ。一行が日本を出發するに際し、統領との會見を期して居つたが幸に此食卓に將軍を始め、各幕僚諸君と會見するの機會を得たことは、衷心愉快に堪へ

ぬ次第である、何卒一日も速に露國の秩序を回復せられんことを切に希望して己まぬ。斯く述べ來つて東氏は、オノガの河畔は英雄成吉思汗を産んだ、而して我がアタマン・セミヨノフ將軍も亦、其誕生地を同じうせりと聞き、當年の英雄を偲ぼしむるものがあるとて、其功業の一日も速かに成就せんことを望むと結び、アタマン・セミヨノフと露國の前途を祝福し、ウラーを連呼して乾盃すると、主客の間には、又バンザイ・ウラーとの聲は幾度か繰返されて交驩の聲は暫し己まなかつた。

「又再び」の別辭を残して

東團長の後を承けて起つたタスキン州長も亦、露國に對する日本の兵器材料の供給は勿論、其他全ゆる救援、厚意は、感謝の辭に苦む旨の演説を述べ同州長、亦乾盃して茲に三度び、兩國のバンザイとウラーは叫ばれた。宴後更に喫煙室は雜談に賑つたが、我一行は「又再び」の別辭を残して、セ將軍頌徳の爲めに行はるゝ、儀式に參列すべくホテルを辭した。井上ホテルを辭したる一行は、其日の日程を辿つてセ將軍の儀式參列に先だち、同市

内の哥薩克兵營に駐屯の、我歩兵第十一聯隊に屬する二ヶ中隊を慰問すべく、其兵營を訪れた。

神風吹く神聖地、伊勢の壯丁

門外に整列出迎への同部隊所屬將校諸士と挨拶を交換したる後、大隊長林少佐の案内で營舎内を巡視し、親しく兵士諸君の日常生活の模様を見た。此の聯隊は道に、神風吹く伊勢地方の壯丁を收容した部隊丈けあつて、之を率ゐる隊長の用意も亦其處から出發してゐるやうである。それは、精神講話の資料として掲げられた、文字によりても認められた。我帝國の國體と、大神在はす伊勢の神聖地とを説いて、特に其感銘を深からしめてあつた。舎内の巡視が終ると、營庭に整列した將校以下兵士一同に對し、東團長は例の如く熱心な慰問の辭を述べた。團長の慰問辭のうちにも、伊勢の地の由來が説かれてそれが又、有力なる激勵の辭となつた。之れに對して林少佐は一同を代表して、盡忠報國の外他念なし、只管、國民の安堵を乞ふと答へた。

音に聞くコサツクの妙技

此兵舎に隣して、セミノフ麾下の哥薩克の兵舎がある。我一行は慰問の挨拶が終つた後音に聞く哥薩克の妙技を見んとて、林少佐を介して申込むと直に快諾して、間もなく一士官の率ゐる約一箇小隊の騎兵は其處に馬首を揃へたが其動作は如何にも機敏である。隊長を先登に、馬蹄の音勇ましく遠く前方に集合すると、我一行を正面にした方向に、楊柳の枝を一直線に其處此處に立てた。

用意が整うと例の隊長自ら先づ一人、馬を走らせつゝ、馬上或は起ち、或は臥して、幾多輕妙の技術を演じつゝ、先きに配置せられた、楊柳に近づくと同時に、左手に手綱を固く引締め、右手を伸べて腰間に踰る長劍をサラリと抜いて之れを薙切る、矢の如く驅る馬上より、斯くして順次に薙倒して最後の楊柳に軍刀を加へても、餘勢に足掻く軍馬は跳つて已まぬ。それをヒタと停めて先づ範を示した隊長は、軍刀高く掲げて前方の部下に對して之に倣ふべきを號令する。

鞍上人なく鞍下馬なし

血に燃えた騎士が、命令遅しと之れに應じて順を追うて、馬を驅る様は勇ましくも亦物凄。人か馬か、眞に聲息相通じて、鞍上人なく、鞍下馬なしである。人馬共に濛々たる砂塵に消えたかと思ふと、又忽然として現る、馬腹に隠れて、地上に匍匐するかと見れば疾風の如く驅ける、馬上長く身を墜して物を拾ふ、其輕快なること、技、神に入つてゐる逃ぐるが如く、又追ふが如く次を逐ふて疾走し來る騎士の妙技は、眞に送迎に違ない。

自由の曠野を求めて

舊露國陸軍の精華

哥薩克は露國陸軍に於ては特種の位置を占めて居つた。殊に其勇悍は世界に鳴つてゐる其光榮ある歴史は、同時に露國軍隊の精華として稱せられた。夫の日露戰役當時に於ける彼等の勇名は特に日本國民たる予等の記憶を今も尙、新にすることが出來ると共に、それ

は又一種の恐れをも抱かしめたものである。然らば其輕妙なる馬術と獨特なる戰鬥力を有する彼等は果して光輝ある過去の歴史を辱めては居らぬか。軍事上から見た彼等に就ては予等の如き門外漢には到底窺ひ知ることは出來ぬ。然かし現時露國の天地を蔽ふ、過激派の勢力に反抗してゐるものは、哥薩克である以上、西比利亞の秩序維持上、密接の關係は彼等の向背と、今後の行動の上に多大の注目を要する。一面又西比利亞の各地に割據し、土地の所有者たる彼等は、其開發上重要な位置を占めてゐることは云ふまでもない。隨つて之を知るは、西比利亞研究上一重要事項であらねばならぬ。

ドン・ドニエール河畔

コサックとは韃靼語であつて「自由の人」といふ意味だといふ。遠く十三、四世紀の頃露國の内亂に乘じ韃靼人が其全土を攻略して支配者となつた時代、異種族の支配を厭うて南方自由の曠野に去てドン、ドニエールの大河の畔、何人の權力にも屈せず、自由な生活を送んだ此露人の一團が、即ち哥薩克の祖先だと傳へられてゐる。

斯くして十六世紀の末葉に、西比利亞征服に手に染めた。それが今の西比利亞哥薩克の始祖だと云はれてゐる。西比利亞の各地に蟠居して居る彼等は、大約四つの團體に分れてゐる。シビール哥薩克、後貝加爾哥薩克、黒龍哥薩克、烏蘇里哥薩克は即ち之れであつて、現今其數約十萬餘、所有地亦、約八千五六百方哩と稱せられてゐる。

血と魂の傳統を享けた先天的武人

哥薩克の社會組織は、其全體に於て既に戰鬥組織である。随つて其子弟は生れながらにして其血と魂の傳統を享け、先天的に武人たる使命を有してゐる。軍服と軍馬とそして其武器は、彼等にとつては寧ろ純然たる日用品である。斯くの如き戰鬥社會の生兒は、其搖籃のうちから、勇悍なる未來の克薩克たるべく、其社會の祝福と庭訓とを受ける。生兒の誕生を祝うて贈くるものは、悉く是等の戰鬥具を象つたものゝみであるといふことに徴しても、如何に彼等の社會が戰鬥的に組織せられてゐるかを想像し得られるではないか。

三歳にして既に馬に騎し、七歳にして武器の操縦を自由にするといふ、彼等の修練は後

年、所謂哥薩克獨特の戰鬥力を養成するの素因たるのであらう。確かナポレオン戰爭の時であつたと思ふ、夫の有名なライプツヒの役に於てアレキサンダー帝の命を奉じて、ナポレオンの精銳近衛騎兵軍に突入し、之を撃破し、潰滅せしめたのも、デニソフ伯の率ゐた哥薩克の一團であつたと記憶する。

世界の戰史上不朽の武名

彼等は敏活、伶俐にして、而も勇悍であると共に、總ゆる困苦と缺乏とに堪へ、必ず其任務を遂行する點に於て、眞に理想的の武人である。時に斷巖絶壁から急潭に跳り込み、時に又、炎熱を冒して數日の行軍を強行し、積雪丈餘の密林中に克く敵を發見して、奇襲突撃を試む。是等は彼の最も得意とし、且又、其獨特の戰鬥術であるといふことである。

斯くして哥薩克の勇名と武勳は、過去七、八世紀間に於ける露國攻防の城壁であり、且又、武器であつたと共に、世界の戰史上幾多不朽の武名を留め、光輝ある歴史を綴つたのである。

ローマンチックな古武士的面影

然し乍ら彼れ哥薩克の全盛時代は既に過ぎ去つた。彼等の武勇と驍名は、今は既に過去に屬し、其ローマンチックな古武士的面影は、一場の夢物語と化したと評する者がある。軍事的専門眼を有せぬ予等には其批評の當否は勿論判断にも苦むが、其血と魂とは容易に滅ぶるものではあるまい。哥薩克を以て文明的高等戦術を辨へた軍人として見ることは、軍事専門家の首肯する處ではなからう。否、寧ろ現代に於ては時代の推移から取り残された、一種の土族であるかも知れぬ。けれども、彼等の團體的勢力は又容易に抜き難いものがあると稱せられてゐる。而も、所謂哥薩克有てふ私有の土地を領し、其利源の開発は一に彼等の許諾を得ねばならぬのであるから、彼等の存在と其勢力は、決して等閑視すべきではあるまい。現代に於ける哥薩克の實勢力如何は別問題として、彼等の祖先の有した勇猛の血は、現今に至るも尙其子孫の間に漲り、掬すべき資性は其胸臆に蘇つてゐることは最近の歐洲戦争に於ても幾多の美談を傳へ、逸話を残してゐることに依つて明である。哥

薩克兵卒クリュチコフの、國境偵察といふ重大任務の遂行と、孤軍奮闘の目覺しい勇戦振りは、傳へ聞く哥薩克の面影を偲び、其典型として戦史を飾る一齣だとは。我將校から親しく聞いた話であつた。

愛慕の情を一塊の土に

予の記憶の糸を辿ると、其處にドン河の靜かな流れに、遠く祖先を偲び愛慕の情を一塊の土にこめて、之れを遙々其郷家に携へ歸る、幾多の若い哥薩克、さては其憧憬と詠歎の情を、ドン河の岸邊の蘆と月に寄せて謠ふといふ、哥薩克情緒を描いた物語の一齣が蘇へつて來る。南露ポルタワの戦陣を背景に、カール十二世とピートル大帝の、兩軍互に鎬を削つた大激戦の修羅場を寫し、其間に慄悍絶倫の哥薩克を躍動せしめて、世界戦争文學の白眉として文名を馳た、ブーシキンの「ポルタワ」乃至、トルストイの「コザツク」等露國文學に多くの題材を供し露西亞の若い多感の文人の筆を跳らせた文學上の「哥薩克」も亦、興趣饒き物語の主人公である。予は哥薩克の馬術の妙技を見た後、車上獨り是等の物

語の記憶を喚び起しながら、哥薩克の統領^{アタマン}セミヨノフ將軍頌徳の儀式に列すべく、我一行と共に其式場へと急いだ。

悲壯なる祖國復興の叫び

過激派の思想宣傳漸く露國內に瀰蔓し、延いて其勢力を増大し、國を舉げて悉く風靡せんとする際、國家の綱紀頹れ人心亂離の状を憂ひて、茲に祖國の復興統一を圖らんとし起つた者に二つの團體がある。一は兵を舉げて直に之れに對抗挑戦したる者、一は又、其復興統一を説いて思想的に其結合を企てた者、此の二つの異つた、而も同一の目的の爲に内外両面から其對抗運動を試みたものは、即ち露國內に跋扈横溢した過激派の勢力に對する唯一の敵であつた。

前者は即ち、アタマン・セミヨノフの如く、後者は祖國の復興を叫びて其の統一を説いたスラビヤン協會の如き即ちそれである。

現代稀觀の歴史的記録

國家の崩壊を其隻手に支へ、頹れ行く舊文物と制度の絶端に取りすがつて、漸くにして舉げた祖國復興の叫び——是等忠實なる舊露西亞の、愛國者の試みたる悲壯な運動——其當否、善悪は宜しく世界の論議と、後世史家の批判に譲り、予は予の觀たる、此の一心兩體の祖國復興運動者が、互に相激勵せんが爲に行はれた、現代世界に稀に觀る歴史的な一大事實に遭遇して、多大の興趣を覚え、更に其儀式に參列するに及んで、一種悲壯の感慨を催したのである。今其光景を録せんとする予の筆の上にも、亦、自ら感興の伴はざるを得ぬ。即ち一千九百十八年の初頭、露國內に漲る過激派の勢力に反抗し、滿洲里の野に、祖國復興の旗を舉げて起つた當年の哥薩克の一大尉現今のアタマン・セミヨノフの功績に對して、同志スラビヤン協會が其表彰を行ひ、頌徳旗を授與せんとするのである。我一行はチタに到着するや、セミヨノフの代表者として出迎へた其幕僚、アサノシート少將を介して傳へられた、該儀式參列の招待に應じ、約を履んで其式場に臨んだのは、哥薩克の馬術

を観て間もない、其日の午後三時過ぎであつた。

若き英雄の成長

式は第二チタ停車場驛前の廣場、市民の呼んでアマタン廣場と稱する高燥の地、小公園を隣し、市内の大建築に圍繞せられた、可成り広いグラウンドに於て、前後約一時間半を費して行はれた。我一行は奥村參謀長、黒澤參謀大佐等の東道で、其處に臨むと、式場に最も近い場所に招せられ、終始佇立して之に列し、且參觀した。式場の中央には壇が設けられ、其背後、公園を後に儀式使用の倉庫様の小さい家がある。壇の正面には約五六百のセミヨノフ麾下の將士が、長く二列横隊に整列し、劍光帽影眩く、霽れ渡つた西比利亞の初夏、美しい六月の日光に輝いてゐる。そして此盛儀を觀んとて、集まつた男女老幼の市民亦、場外に溢れてゐる。

正に是れアタマン日和である。儀式の主催者たるスラビマン協會の代表者の面々を始め此の日の諸兵指揮官たる、セミヨノフ軍の士官學校長リハチヨフ少將は勿論、幕僚の諸將

亦、既に參集して時の至るのを今や遅しと待ち設けてゐる。

アタマン廣場の頌徳旗授與式

此時恰も、場の一隅から馬蹄の音勇ましく響くよと見れば、駿馬を驅つて近衛の將士數騎を隨へた、馬上颯爽たるアタマン・セミヨノフの堂々たる勇姿は現れた。會衆の視線は期せずして其所に注がれ、群集の睜つた眼は自ら其勇姿に惹きつけられた。「若き英雄」彼れアタマン・セミヨノフの得意や想ふべしである。彼は勇ましく馬を場内に驅け入れるや靜かに乗棄て、足早に主催者等に近づいて握手を交換し、幕僚達に會釋して聽て我議員團一行の前に立つて、莞爾として目禮挨拶した後、リハチヨフ少將を先導に各幕僚を隨へ其愛撫せる部下を順次閱兵すべく歩を運んだ。希望に輝く若人の瞳のやうに、蒼く曇ない天空は海より潤く「若き英雄」の頭上を蔽うてゐる。華やかにして而も亦、一種悲壯の光景——此歴史的—事實の記録の頁は斯くて聞かれた。「若き英雄の成長」若き英雄の成長——予の感興は更に跳つた。

大なる暗示の漾ふ深い沈黙

閱兵は終つた、セミヨノフの通過する處、各隊列では其部隊長の號令の下に、劍を抜いて我が統領の爲めに悉く死を誓つた。將軍は部下の將卒の一人々々の心奥深く己れを信頼し、一死以て克く己れの馬前に殉ずる、忠勇なる愛すべき幾多の猛士を有することを、今更ながら深く感じ、心中窃に喜悅の情に燃えたと共に、彼等の統領として其重きに任ずる彼れ自らの位置の高きに想到し、更に加へ來る責任の重大を感ずるもの、如く、彼れの面上自ら紅を潮し其眼は自覺と自信の迸りに輝いて見えた。會衆亦、聲なく、大なる暗示の漾ふ深い「沈黙の時」は、暫し場内を領した。

莊嚴、敬虔なる宗教的儀式

式は宗教的儀式に依つて始まつた。道に祈禱の國民である。役僧の指揮の下に、幾多の旌旗や額面が兵卒の手に依つて運ばれ、其處に列を成して捧げられた。それには種々の聖

畫は描かれてある。聖母マリヤ、ゲツセマネの園の血の禱を捧げるエス、さては、荊棘の冠を戴き十字架を負へる、血に滴る主エスの聖像は掲げられた。微風に戦ぐ蠟燭の光は明滅して、白日の夢を咬るやうである。主教でもありさうな、錦襦の服を纏ひ長髪を肩に垂らし、白髯を長く蓄へた老僧は、衆僧に擁せられて壇上に立つと、數名の役僧や離僧は其兩側、背後の側近かくに侍する。司祭らしいのが先づ口を開いて何事かを言ふと、禮拜の式は嚴かに始められた。

朗々なる讃歌の合唱起る

莊重な讃歌は朗々たる一僧の聲に導かれて、衆僧と會衆の口からは合唱が起る。聖句は幾度か朗讀せられ、それに亞いで又祈禱と讃歌は起る。其間に司祭や助祭に依つて種々の儀式は行はれた。斯くして最後に司祭は大きい、古めかしい聖書の頁を開いて壇上の主教に捧げると、之れを靜かに受けて莊嚴なる口調で、其一句、一句を徐に朗讀する。其聲の頓挫に伴れて、會衆の心は動き、天來の神の御聲にでも接したやう其に耳を欽てる。主教

の朗讀が濟むと、其後を承けて壇上に起つた司祭は、會衆に向つて一場の説教を試みた。見るからに上品な司祭の口を洩れる一言、一句は、鋭く、其熱して高く手を挙げ、髪を打振つて説く處、自ら聽衆の心を奪ひ、大なる感動を與へねば己まぬやうであつた。

十字を切つて黙禱に耽る

最終の祈禱と、讃歌が起ると會衆亦之に倣ふて合唱の聲は場内に漾ひ、セミヨノフを始め、父と子と聖靈の爲めに、胸に十字を切つて黙禱に耽る。其間に主教は先づセミヨノフの頭上にバフテスマの水を濯いで祝福し、次で順次會衆に之れを施す。斯うした敬虔、莊嚴な禮拜の式が終ると、引續いて頌徳旗の授與式が行はれた。スラビヤン協會の代表者先づ壇上に起立して、アタマン・セミヨノフの義憤の徳と、其功業を頌して、頌徳旗授與の理由を述べ、祭壇から下された旗旗を取つて、之れを旗竿に十餘本の釘を以て取付ける儀式は行はれた。主教先づ金槌を採つて、其第一の釘を打込むと、順を逐ふて之れに倣ひ、十餘本の釘は金槌の響と共に打込れ、旗旗は壇上の協會代表者の手から、懸てアタマン・セ

ミヨノフの手に授けられた。

「神、我等と俱にあり」

旗手の手に捧げられた其旗旗を見ると、濃紫の地に金糸を以て武装した古代婦人の乗馬像が刺繡してある。そして其上部に現された文字に曰く「神我等と俱にあり」神と俱に祖國の復興を唱へ、神と俱に義戦す。其唱ふる處、將又、其云ふ處、是悉く神の聖旨に依る。彼等は斯く信じて此旗旗を眞先に此旗旗の下に集り、過激派を討伐せんとするのである。其信條も其標的も舉げて悉く「神、我等と俱にあり」の數字の裡に表現せしめてゐるのであらう。過激派の思想と信條と、其行動は彼等にとつては則ち異教徒的行爲である。而して之を討つは正に神の聖旨に副ふものであるとの信念は彼等を動かす主因であるまいか、斯くて此信條と標的とを掲げて陣頭に懸さんとす、亦所以なきにあらずである。

永遠の時の與へた一瞬時

アタマン・セミヨノフの頌徳の爲に擧げられた、此の宗教的儀式は、實に相適しい儀式であつた。若し假に、過激派を目するに一種の偶像破壊者を以てするならば、古き倫理と道德と、而して國家の舊文物と制度とを有した、舊露國に執着し、之が復興を計らんとする、彼れセミヨノフ頌徳の儀式としては、更に恰好の擧式である。式後軍樂隊を先登に、頌徳旗を翻して行はれたセミヨノフの新軍隊、未來の將校たる自負に輝く紅顔の士官候補生等の旗鼓勇ましき分列式は其統領に對する敬意を深くし其頌徳の儀式の最後を飾つた。遮莫、若き英雄は斯くて成長するのである。永遠の時の與へた一瞬時。歴史を語る其一齣は、斯くして綴られたのである。式後の感興は、尙ほ予の心を咬つて己まぬ。

セミヨノフの人物

若き英雄、アタマン・セミヨノフとは抑々如何なる人物であるか。彼れの性格、乃至統領としての彼れの聲望、實力及周圍の情勢、果して如何。是れ露國殊に西比利亞の秩序維持に任じ、遠く異郷の土に出兵を敢てしたる、我帝國國民として、當に之れを知るの要あ

るべきは言を俟たぬ。況んや彼れセミヨノフに對する、我が帝國、少くとも我陸軍との干繫、決して淺からざるに於ておや。勿論、今日に於ては彼れはオムスタ政府に屬する哥薩克の一統領たるの位置に在るも、近き過去に於ける彼れの運命は、只管、我が帝國の支持の下にあつたことは否むべからざる事實である。それは彼の我議員團との會見、乃至招待會の席上に於ける、彼自らの告白に徴するも明かなる事實である。

紛々たる毀譽褒貶の聲

予の彼に接する僅に一面識に過ぎぬ。随つて前述のセミヨノフ觀は、只單に、最初の印象フレスンヨシを記するに留まつたのである。けれども、予が今記述せんとするセミヨノフ觀と、其批判は決して予の獨斷的な一言言ではないのである。但し其主として得たる材料は、彼を知り、彼れに同情し、且又、彼を支持するの至當なるを信する、所謂、其擁護者の批判を紹介し、以て其參考に資せんとするものであることを豫め斷つて置く。

セミヨノフに對する毀譽褒貶の聲は絶えぬ。彼を攻撃し非難する者の、常に口にする處

のものは、彼の軍隊を目して、不軍紀にして烏合の衆となし、其部下の徴發、掠奪、乃至法規の無視等を擧げ、以て彼と其軍隊を攻撃するの理由として居ると云ふことである。

是れ悉く漫然誣妄の言

是れ當に、反セミヨノフ派の乗すべく、非議すべき有力なる理由であらねばならぬ。去り乍ら斯くの如きは全然事實なき捏造であつて、然らざれば針小棒大の言である。攻撃せんが爲めに攻撃する作爲、中傷にして其真相を誤れる者である。のみならず、露國の現状を察知し得ぬ漫然誣妄の言である。セミヨノフ軍の不軍紀、若くは其犯せる掠奪の如き、或は之ありしならん。素より國家の綱紀、秩序の紊亂に際し、軍人の不軍紀を公認すべき謂れなきは勿論、却て其肅清に任すべきは當然であつても、既に過激派の慘害を憎み其掃討を冀ふの際、奮然起て之に對抗したるセミヨノフ軍に對し、軍備と物資の援助をも爲さずして、其努力を望むが如きは、理に於て既に謬つてゐる。此時に際し、假令、多少の徵發若くは掠奪の行爲があつたとしても、并は過激派の慘害に比して果して如何、而も其目的と手段とに於て大に其趣を異にしてゐるではないか。

寧ろ擧兵に伴ふ附帶事項

既に過激派對抗上、擧兵を熱望してゐる。然らば假に後貝加爾に於ける擧兵を、セミヨノフ以外の者をして行はしめたとしても、セミヨノフ軍の如き不軍紀は、果して全然無かりしと斷言し得る者があらうか。要するに、當時の状況は寧ろ其擧兵に伴ふ、己むを得ざる附帶事項であつて、セミヨノフ軍なるが故に起つた事件ではないのである。

世上に喧傳せられたセミヨノフ軍の非行、罪科なるものは、其多くは彼れの政敵に依つて作られた陥穽に外ならぬのである。セミヨノフは其同志の間に多くの政敵を有してゐる。彼れはサモイロフと確執し、ズラポフと相争ひ、ホルワツトとの交情亦決して好くはないのである。殊に現オムスク政府の執政官たる、コルチャツクとは嘗て大に争つたことがあることは、世間周知の事實である。

例の六十一號命令問題

セミヨノフはコルチャツクを執政官と認めずと云へば、彼れは又例の六十一號命令を發して、セミヨノフに冠するに罪人の名を以てしたことがある。尤も前述の如く、今日では兩者の妥協は成立してゐるが、心からの交譲、提携ではあるまい。

斯くの如く彼れは、四面に政敵を有してゐる。而も哥薩克の一大尉から身を起し、今日漸く大佐となり、統領たる彼に比し、其政敵は悉く威望、勢力彼れの上にある。其閱歴年齢に於て然りである。現にコルチャツクの如き過去に於てはアドミラルであり、今や聯合國支持の下にオムスク政府の執政官として、新露國政府の首相たるべき運命を有してゐるとは一般の批評である。彼は斯く威望勢力ある政敵によつて、若年、後輩者として遇せられ、其有する聲望と勢力とを奪はれんとしてゐるのである。所謂セミヨノフ軍の非行罪科として誇大に吹聴せられるのは、彼れを排斥せんとする手段であつて、是れ悉く政敵の放つ毒矢である。とは前に云ふ所謂セミヨノフ擁護者の同情ある批判の一齣である。

彼の性格と其思想の發露

然らばセミヨノフは如何なる人物であるか？それは彼の擧兵後に於ける事業の一斑を見れば、自ら彼れの性格、思想の發露を看取することが出来るであらう。彼れは自肆專横である、而して彼れには一點同情の熱き涙を有せぬ冷酷無情漢である、とは例の政敵が彼れを誹謗する言である。然し乍ら、彼は決して然らず、其部下の不軍紀の聲を聞かや、決して之を放任して置かなかつたのみならず、彼れは先づ野戰裁判を設けて、不軍紀の將士を審理判決し、其處罰をも敢てした。而して其軍法は、舊露國の法律、若くはオムスク新政府の法律を適用又は準據して私心と獨斷とを以てはしなかつた。若し彼にして自肆專横であるならば、斯る施設は決して採らなかつたであらう。彼れは又、裁判者の死刑を宣告する者あるときは、決して直に、之れに同意せず自ら精細に最後の裁判を試みた。

彼れの心は一兵卒の生命に對しても、斯くの如く重要視し且極めて濫かい同情を以て之れに對したのである。犯罪將士の處罰のみは彼れの目的ではなかつた。彼れは進んで之が

訓育、陶冶に努めんが爲めに、懲治隊をも組織した。夫のマカウエオに設けられたものが即ち其一事業であつた。

細民に對する深き同情と救恤

又セミヨノフ軍の施した、銀行、税關等の課税、或は又消費税の徴收に關しては殊に苦情が多かつた。けれども、既に軍隊を編成した以上、其所要の經費を是等の徴税に俟たざるを得なかつたのは、寧ろ當然である。而も軍隊は秩序維持上、須臾も缺くべからざる其當時に於て、特に然りである。故に假に有産階級間に多少の苦情や論議があつても、彼れは之れを敢行したのである。

四圍の情況は彼れを驅つて己むなく斷行せしめたのである。然し彼は民間の徴發を其儘放任して顧みないのでない、其多くは財政の許す限り、賠償を約してゐる。果然、彼れはコルチャツクとの妥協成立するや、直に先づ是等の所要經費を、オムスク政府に計上要求してゐるではないか。セミヨノフは決して横暴なる掠奪を試みたのではない。斯くして

彼れは、其軍隊の訓練を嚴格にし以て過激派討伐の目的達成に腐心してゐることは、決して常人の窺知し能はざる處である。加之、彼は細民を救恤し、濟生、施療に意を用ひ、鐵道沿線に施療車を特派して之れに勗めてゐる

決して輕からざる其負擔

千九百十八年二月から、同年八月に至る約六ヶ月間に、過激派の慘害を蒙つて滿洲里に避難した、後貝加爾の住民は約三萬人に達したと云はれてゐるが、セミヨノフは當時、滿洲里に擧兵して間もない時であつたにも拘はらず、彼れは此多忙の際にも、尙且、避難民救濟を企て、當時の彼れに取つては極めて大金の百萬留を投じて無償給與を行つたのみならず、更に此の憐むべき窮民に對しては、被服を與へ、更に又過激派から奪還した牛馬、家畜等をも與へて、荒廢した家業を興さしめたのである。彼は漸くにして特別滿洲里支隊を編成し、力を過激派掃蕩に致した以來、後貝加爾地方の物資は缺乏し、更に物價は激騰した爲め、住民は非常に其生活に苦しんだ。此時に於ても亦、セミヨノフは其窮狀を憐察

して麥粉二百四十四車、肉類二十一車、燕麥四十七車、小麥六十四車、砂糖卅七車、魚類十五車を初め、日用必需品の多量を急遽鐵道輸送して地方住民に對し、殆ど無料に近い廉賣を行ひ、以て危機に迫れる細民の生活を恤つた。而して是等の物資の總額は二千四百七十八萬九千留に達したのである。是れ實に彼れに取つては決して輕からざる負擔である。其他、尙、彼は一時、鐵道従業員救済の爲めに、自ら進んで多額の債務を負ふたことすらあるといふことである。

統領たる資質を備た好個の武人

セミヨノフに對して尙、豊富な財源を與へたならば、彼れは決して私消するが如きことなく、より擴く、より大なる救恤慈善の、社會政策的施設を試みたであらう、要するに彼れを以て自肆專横と稱し、冷酷、無情漢なりと評するが如きは、誣ふるも甚だしい。彼れは如上の通り、私心を去つて公平に就き、小節を棄て、大義に殉じ、其れを行ふに直往邁進する古武士的性格の所有者である。加之、住民に對する同情常に燃え、事を處する細心

周到にして一事をも苟くせず而も恭謙己を持するに嚴にして、部下に接するに寛厚なる、洵に統領たるの資質を具備した好個の武人である。彼の如きは現時の混亂した露國の復興に膺り、多難なる時局に處するに正に必要な缺くべからざる一人物とし推舉するに躊躇しない。とは彼れの擁護者から聞かされたセミヨノフ觀と其批判の全部の概要である。而して其批判は大體に於て偏せず與せざる比較的正鵠のものであらう。彼も亦一種の人傑である所謂未成長の英雄である。若き英雄の將來は尙多難であらう。彼は今後如何なる成長の道程を履むであらうか、是は未來に残された一種の謎である。

其毀譽褒貶の如きは、後年に至らざれば判明せぬであらう。予は今暫く、其擁護者の言を信じ、彼の向後の行動を凝視し、然る後、之れを秤量し、更に解剖の匕刀を加ふべき時機あるべきを期し、茲には、彼れ未成長の英雄の未來を祝福するに留めて置かう。

主なき領事館出張所と民會

興味饒かりしセミヨノフ頌德式に參列後、一行は尙當日殘された日程を履んで、同市在

留邦人に依つて組織せらるゝ、チタ市日本居留民會及帝國領事館出張所を訪問した。

民會と領事館出張所とは同一建物の内に在る。豫て通知してあるにも拘らず。副領事は病氣の故を以て出でず、民會亦役員の出勤もなく、只一、二の事務員等、茫然相接するのみ一行をして失望せしむること夥しい。

チタ市には邦人の在留する者六百名以上に及んでゐる。我民會に籍を有する者は、五月末には三百二十八名、内男百七十八名、女百四十九名にして六月届出の者、五十七名、内男二十名、女三十七名、合計三百八十五名であつて、在留民の約半数である。昨年末迄は約二百五十名内外であつたが、半年間に斯くの如く激増したのであるさうだ。

西比利亞の野に咲く日本撫子

之を出身府縣別にすると、第一の熊本縣は八十八名、長崎縣を第二として七十五名第三位は福岡縣の十八名である。即ち九州地方の出身者が最も多く、就中、女子は其半以上を占めてゐる。此外、所謂、九州女の在留数は可成多數に上るといふことである。九州と女

其關係は云はずもがなである。我が光榮ある植民史上、常に其先驅者たる雄々しき日本撫子は、熊伏す西比利亞の曠野の到る處に、所謂白粉の花を咲かしめ、世界の男をして惱殺せしめてゐるが、チタも亦其例に漏れないのである。

士氣振作の微妙緊急施設

チタ市には我が遊女屋も公認せられてゐるが、四千に近い我駐屯將士就中其大部分を占めてゐる兵士等は、却々容易に之れに近づけない。それには種々の理由もあるが、先づ第一の困難は、是等兵士の懷中の貧弱に因るさうである。適當なる一種の機關を潤澤にして必要を充たさしむることは士氣振作てふ重大問題を解決すべき微妙なる緊急施設として擧ぐべきである。とは某々將校の眞面目な話。夫から其結果は兵士の多數に夜盲ヤメイ其者を出してゐるのに徴しも明かだ、とは某軍醫の専門家的立證であつた。予は素より其實否は知らぬが、此事たる決して笑つて語る一場の茶話とのみ聞くべきではあるまい。若い青春の血に燃えた兵士を遇し、異郷の土にある彼等を慰安せしむるの方法は、軍隊布教師の假聲説

教以外尙、至當微妙なる方策があらねばならぬ。是等に就ては其統率者たる上長の腦裡に、實際適切な企てのあるべきことは勿論であらう。

旅券と濫造品と警察命令

チタ在留邦人の三不平なるものを、多年同地に在留の或人から聞かされた。其第一は、外務省が旅券下附を嚴重にし、規則の末に拘泥し、甚だしきは府縣廳が警察官吏をして、不法の干渉を爲さしめ、以て容易に旅券を與へぬと、第二は本邦製品の粗惡にして露人の信用を失墜せしむるの甚大なるを、第三は混亂した現時の露國に在留する居留民に對し、内地の大都市に於て施すが如き、種々煩瑣なる警察命令を發すると、是れが主なるものであるといふ。旅券の下附問題に關しては、常に植民地に於て問題となる事項の一つであつて、實際問題としては兩者に夫々申分もあれば、又缺陷あるのみならず、國家と個人との利害の相反する場合もあつて、其見解を異にする處であるから、是非、善惡は、容易に判定し難い問題である。本邦製品の粗惡なことは予等の實驗した處で、それは決して當地の

みでない、東部西比利亞の各地で見た物、それが悉くであつた。

之れは管々しく云ふ迄もなく、當業者と政府當局者との猛省を促さねばならぬ。是れ單なる貿易上の一問題のみではなく、我帝國と其國民の品位と信用とを計量、判定せらるゝ重大問題であることは云ふまでもない。

東方文明國の市民的教養あれ

チタ市に駐屯する、我が第三師團長大庭中將は、極めて文明的な武人である。而して此師團長の衛戍地たる、チタ市に在留する邦人に對して、文明國民たる市民的教養を望むのは、師團長の深慮に出づる處であらう。在留民諸君にして文明國たる日本國民たるの自負あらば、當に之れを恪守すべきは當然である。若し夫れ、之れに當る當局者の措置宜しきを制せぬならば、开は自ら別問題である。我一行は迎ふるに主なき民會と領事館出張所、茶をも啜るを得ざりし其處でも、尙、異國に於ける同胞の家でふ、一種安易な氣分で少憩の後、大庭師團長招待の晚餐會に臨むべく、再び又、師團司令部へと自動車を走らした。

大庭師團長招待晚餐會

師團司令部三階の食堂、其處は大庭師團長の我一行の爲めに設けられた晚餐會場である。高級副官の案内で食堂に入ると、主人側の大庭師團長を始め、奥村參謀長、黒澤參謀大佐以下師團の各幹部將校諸士、陪賓の領事館員や民會長等の面々も見えて、食卓の間を斡旋してゐる。

快活な軍人諸君の談話や、欸待振も肩が凝らぬが、給仕の役を勤める兵士諸君の給仕振も、道に軍紀に養はれた丈けあつて、皿を運ぶにも酒を盛るにも却々活潑で、又面白い。それよりも、料理役の兵士の火加減は又手に入つたものだ。兵隊の手料理だからとは、師團長の斷りであつたが、車中の料理に惱まされた予等には、美味たるを失はない。皿は随分多く換へられた。之れ丈けは道に軍人料理だと首肯せられる。

いづれは軍人諸士のことである。酒盃の應酬熾にして、豪氣西比利亞を呑まんとするの概がある。それに引換へ我一行には左黨に乏しい。其對戦は到底敗衄に終らざるを得ぬ。

唯一の酒豪、古川代議士は眼を病んで意氣更に昂らない。外人の交らぬ内輪同志の此の宴會は安易で、随分賑つた。

四年前の回顧と感慨

随分多かつた最後の皿が出た時大庭師團長は起つて、先づ一行の遠來の勞と慰問とを感謝したる後、

四年前、歐洲の大戦開かれ、露國亦、獨逸軍と兵を交へんとせし際、予は露國大本營附として従軍を命ぜられて歐露に在つたが、爾後、第三師團長に補せられ、西比利亞鐵道に依り、歸途、當地を通過した時、恰も露國軍の某地點占領の報を得たので、予は祝電を發せんとて、當チタ市に下車したのであつた。計らざりき、其後予は、予の師團長たる第三師團の將士を率ゐて此地に駐屯せんとは一而も其任務は、混亂した西比利亞の秩序維持に在り、地は是れ、當年予が露國の戦捷を祝はんとて、祝電を發したる地なり熟々、往時を追懷せば、眞に夢の如き感なくんばあらず。

中將は斯く述べて、自ら履んだ實驗の道を回顧し、國家の興亡、變遷の著しきに感慨を漏し、露國の現状を弔して、更に顧みて我帝國の將來に想到したるもの、如く、麾下士卒の思想問題に關する疑惑を釋かんとして曰く

此秋に當り、我が出征士卒の思想傾向如何に就き、論議を耳にすることあり、予をして云はしむれば、今や士卒の思想云々を論議し、質問するが如きは、寧ろ之れを口にする者の迂を嗤はしむる程、彼等士卒の思想は極めて健實なるのみならず、露國現時の混亂の由つて來れる原因を深く了得し、一點惑ふが如きことなきは、予の確認する處也。中將は斯く目下切に論議せられつゝある、士卒の思想問題に就き其確信を披瀝した後、予の曩に滯露中、露國將校より日露戰役に於ける、我將校の勇敢なる行動に對する賞讃の辭を受けたるが、然し部下の兵士に至りては未だしとして、暗に、我兵士の行動に疑惑を抱くが如き口吻を漏したるを聞くこと屢々也き、然しながら、我兵士の如何に勇敢にして且犠牲の精神に富めるかは、先刻、諸氏に詳細に報告したるが如し。とて部下に對する深き信頼の意を表した。

赤心正宗の盃を舉げて

斯く述べ來つた中將は、遽に打寬いた態度で、出征以來母國から來訪せらるゝ者の、其多くはカーキ色の軍服を着た、同僚のみであつた。

然るに今茲に黒色一軍服と異なる平服を纏はれた諸氏を迎へて、食卓を同じうすることを得たのは、衷心愉快に堪へぬ。是れ敢て懷郷病ホームシックに罹つた結果、此言を爲すのではないとして満場を笑はしめた後、當地は誰云ふとなく「西比利亞の京都」と稱し其名も亦「知多」と書いて居る。

而して、我が第三師團管下に知多半島あるは人の知る處である。「チタ」は「知多」と同音相通する、此食卓に上した日本酒は、實に管下知多半島に於て釀造せらるゝ、赤心正宗と稱する酒である。知多に出征駐屯する我等、素より赤心奉公の誠を致さんことを、日夜念とせり。宜しく諒せられんことを望むと共に、異郷長途の旅行、諸氏懷郷の料ともならば幸ひである。とて巧妙なる食卓辭テーブルスピーチを結び、赤心正宗の盃を舉げて一行の健康を祝した。

味噌汁を啜りつゝ西比利亞の野に

大庭師團長の挨拶に對し、我一行を代表して謝辭を述べべく東團長は起つた。氏は先づ帝國が隣邦露國の擾亂に際し、其秩序維持の爲めに出兵したることより説き起し、今や西比利亞は、我軍隊の駐屯に依つて辛うじて其安全なる得、我議員團一行の如きも各地に翻る日章旗を仰ぎ、其保護の下に巡歴して軍隊慰問の重責を全うしつゝあり。夫の大興安嶺を、車中居ながら眺め、西比利亞の野に、米飯を食ひ、味噌汁を啜りつゝ、談笑の間に超ゆるを得たのは、一に我軍隊の力であり、且又、國威の發揚、此地に及べる證左であつて、我等の愉快に堪へざる處である。

インツブ物語の比喩を引例に、地域の廣大にして而も列國協調を要する、對西比利亞策は今後尙國民の慎重なる考慮を要すべし、と論じ更に兵士思想問題云々に就ては大庭師團長の熱心なる兩度の説明報告を得て大に安堵したり。斯くてこそ、世上の憂慮は全然除かれたりと云ふべきである。又當チタに於て、知多半島に釀された、赤心正宗

を饗せられんとは……予は師團長以下諸士と面接の機を得たるは勿論、又種々なる意味に於て、衷心愉快に堪へず。

と謝辭を述べ、東團長亦、赤心正宗の盃を舉げて、大庭師團長以下各將士の健康を祝した。食卓が終つてから一行は更に師團長室に於て、大庭師團長、奥村參謀長、黒澤參謀大佐等と珈琲を啜りながら、愉快的談話に時の過ぎるのを忘れた。

星なき夜の街の灯

師團司令部は前にも記した通り、市内第一の大百貨店を借家してゐる。其三階、師團長室前の廊下に立つて、一窓、一間幅もあらうと思はれる、大きな二重窓の硝子戸を左右に開くと、チタの山の手街は、瞰下、一眸の裡に展ける。大庭師團長の所謂「西比利亞の京都」チタの東山は黒く横はり、今し夜の眠りに入らんとしてゐる。星なき夜の街の灯は、殊に美しく煌いて、異郷の旅愁を唆る。眼下に見える、ほの明るいシヤンタンからは、ゾアイオリンの絃の咽び泣く音が聞える。西比利亞の京都、チタの夜はこれからである。

闇に塗られた夜の公園

師團司令部の歸途、予等數氏の間、チタの夜の公園を觀んとの議が成立つて、程近い公園へ向ひ、其處に立つと、停車場の改札口のやうな構への入口に、少女が腰掛けて足をブラ／＼打振りながら、哥薩克と何か戯談をでも云つて居たやうであるが、予等に對して入場券を求めた。郷土を一步をも出たことのない予は、入場券を要する公園に遊んだのは初めての經驗で一寸異様に感じた。入場料は、これを市の公共慈善團體に寄附するといふのはその名目であつたが、擾亂後の現今では、そんな事も行はれてゐないといふことである。餘り廣くもない園内は只だ薄暗く、ボブラ樹のやうな樹の葉が繁つて、更に闇を塗つてゐる。

人待顔の白粉の花！

其並木の間に幾線かの通路があつて、其處を若い男女の群が腕を組んで木下闇を縫つて

行く。そして其處、此處のベンチには、例の一组が喃々私語し、戀の甘い物語に耽り、一見、それと知れる、闇に咲く白粉の花も、人待顔に咲いてゐた。公園と云つても何の奇もなく趣もない。園内深く這る程更に暗い。それが露西亞の公園の特色であるかも知れぬ。其の中央とも思はれる處に大きなカフェーがある。其中を覗くと、どの卓子にも、どの卓子にも例の一组、一组が、陣取つて、紅茶を啜つたり、酒を呷つたりしてゐる。

カフェーの隣には、小さい舞臺ステージが設けてあつて、其前面燈火のない暗い露天の下には、數十脚のベンチを備へた、スタンドが設けられてゐる。

總ては暗遷默移の裡に

舞臺には卑俗な喜劇ものらしいのが演せられてゐる。醉漢が、何か口汚なく怒鳴つてゐる場面である。觀衆は其臺詞の、其一言一句にも笑ふ。上場するものは勿論、演ずる者も觀る者も悉く極めて低級なものだ。然しそれは寧ろ皮相の觀であらう。舞臺は只單に其處に所謂一組、一組の集合の機會を作る爲めに設けてあるのかも知れぬ。果せる哉、暗い數

十脚のベンチは其一組連に依つて寸隙もなく占領せられてゐる。そして暗遷黙移の裡に、總ては解決せられてゐるやうである。恚うして観ると公園自體も舞臺の設備と同一目的の下に造られてあるのかとも觀られる。

公園を出た予等の間には、期せずして日本人らしい皮肉な笑ひが一同の口から漏れた。薄暗い凸凹の激しい、砂地の道路に靴を没しながら、更に薄暗い停車場構内の一行の宿、列車内に歸臥した。銃劍嚴たる我が忠勇なる兵士の護衛の下に――。

旅の夢は更に醒めやすい

十數日間、車中を我家として、朝夕既に數百時間の起居に慣れた列車内も、尙旅の夢は覺めやすい。翌二十五日朝來、出勤慰問の用意怠りなく待つ程に、午前九時司令部から迎への自動車は來た。一行は直に之に分乘し、大庭師團長と同行して先づ市内陸軍病院を訪問し、同病院西比利亞救援會委託の施療所の情況を視察した。同會の事業として成功して居るものは、殆ど施療事業のみであると云はれてゐる。同病院の施療患者は、一日三百人

内外であるが、主として露、支、蒙古人が多數を占めてゐる。其遠きは六百露里の遠方から態々診察を受けに來るといふことである。中にも蒙古人は資性淳朴で、病氣が治療せられたときなどは、絹布などを持つて厚い謝辭の意を表しに來る程、それ程正直で義理堅いさうである。

アンチピーパーとペスチャンカ

施療所視察後、一行はチタ市外、アンチピーパー所在の陸軍病院に戦傷の將士を見舞ひそれより更に二里餘を距てた、ペスチャンカに自動車を驅つて、同地兵營に駐屯守備せる歩兵第五十一及第六十八の兩聯隊の一部隊を訪問し、將卒一同に對し鄭重なる慰問の辭を呈した。

之に對し、岡田第五十一聯隊長は兩聯隊將士を代表して、感謝の答辭を述べ、更に砲、工兵兩部隊の慰問に對しては、中柴中佐亦一同を代表して答辭を述べた。

同地に於ける駐屯各部隊を慰問し、更に士卒の勤務、生活、保健、状態を視察し詳細な

る報告を聴取したる後更に再び市に引返しチタ陸軍特務機關を統率し、兼てセミヨノフ軍の顧問たり、且、總參謀たる黒澤參謀大佐の招待午餐會に臨み食後の雑談に時を移した、更に續いて市内所在の後貝加爾州立博物館を參觀し、館内を一巡して、古器類の参考品を始め、州内の産業状態及、其發達を示す、農産畜産、毛皮鳥類等の陳列に研究と好奇の眼を注ぎたるを最後の日程とし、歸途、師團司令部に立寄り大庭師團長以下に對して、謝辭を述べ午後四時半漸く列車に歸つた。

さらば「西比利亞の京都」

我一行は愈々同市に於ける兩日に亘る多忙なりし軍隊慰問並に視察の任務を終了したるを以て、同夕此の市を出發し、更にイルクーツクへ向はんとするのである。午後五時半大庭師團長及奥村參謀長等は列車内に告別の爲め來訪し、之を迎へて列車生活談などを試み葡萄酒の盃を擧げて、互に前途の健康を祝し、同六時半、内外官民諸君多數の見送りを受け、互に告別の辭を交し、心中、我が將士の健全を禱りつゝ、約一世紀の昔、國事犯人の

流滴地として、始めて彼等の手に依つて開かれた大庭中將の、所謂、西比利亞の京都、チタに別れを告げ、寸時の暇もなく活動した二日間の疲労した體軀を、車内のベットに横へると、汽車の動搖をも忘れて、明るるに早き車中の一夜を熟睡に過ごすのであつた。

ペトロフスキーザオートまで

二十六日午前九時半、サホレドを通過し、同十一時モグソン驛に着するや小泉守備中隊長以下を慰問し、それより、タイドウト、フシエンガ、ヒロクの各驛を過ぎて同夜十二時ペトロフスキーザオート驛に到着、夜半にも拘はらず驛前に整列出迎への高田守備隊長以下に對し、前川代議士一行を代表して慰問の辭を述べた。此地は人口約一萬、邦人の居留する者なきも、只我日露公司單り活動し、麥粉をチタ方面へ移出し、其額一日一萬留以上に及ぶといふことである。

翌二十七日の早朝、ウエルフネウーヂンスク驛に着いた。當地には我守備隊約五千駐屯し、居留邦人亦五十名を算せるも、人口二萬五千餘の大部分は猶太人と支那人を以て占め

てゐる。此の市でも前の日露公同は殆ど獨占的に市場に活躍して居る。

後貝加爾州西部の商業中心地

此市は往昔、哥薩克人がブリヤード人に備へる爲めに、木塞を築いたのを起原とし、千七百七十五年、初めて市制を布き、爾來今日の發達を來し、各種の官公衙を始め、露亞銀行其の他二三の銀行支店等も設置せられて、商業は却々盛である。就中、毎年二月には定期市場が開かれ、毛皮の賣買に賑うさうである。市は蒙古に通ずる要衝であつて西比利亞鐵道の開通前までは、露國の對蒙及對支貿易上重要な地であつたのであるが、現今でも後貝加爾州西部の商業中心地として露國政府は豫て、當市から蒙古庫倫に通ずる鐵道布設の計畫を樹て、將來大に對蒙古貿易に資せんとの野心を有してゐた。然るに今は其計畫も全く畫餅に歸したのである。セレンガ河と、其支流ウダ河との合流地點に位し、水陸運輸の便を有し、且附近地方亦土地豐沃なるのみならず、前述の如く對蒙古貿易の一策源地たる市は、將來西比利亞開發其緒に就くに從ひ必ずや更に發達を見るべしと目されてゐる。同

日午前九時半、ウエルフネウーヂンスク市を距ること、僅に三哩にしてベツゾワカ驛に着す。此地には我歩兵第三十旅團司令部及歩兵第三十三聯隊本部及砲、騎兵部隊が駐屯してゐる。旅團長吉江少將、河西聯隊長等を始め、多數將卒に迎へられ、東團長は吉江旅團長以下に對して鄭重に慰問した。之に對し吉江少將亦一同を代表して答辭を述べた、此附近には米軍の一箇中隊が立派な幕舎に星條旗を翻し、其處に幕營守備してゐた。

車中岸蜂座の大茶話會

我一行の東京出發以來、既に半ヶ月餘は夢の如く過ぎた。匆忙たる軍隊慰問に、稍疲勞を覚え、更に列車生活、亦漸く無聊に苦しまんとした際、車中、茶話會開催の議は、先づ接伴員たる岸本蜂須賀兩中佐や中村書記官等の間から唱へられ、誰一人異議の申立てもなく即決した。道は軍人諸君の企てである。兵は迅速を尙ぶで、其日の午後二時から車内の「岸蜂座」といふ六ヶ敷い名の場所で開かれることとなつた。岸蜂座と稱するのは、岸本、蜂須賀兩中佐の合同發議に成り、且、兩氏の車室を其場所に使用したからである。

敵襲に備へる程の機敏さ

定刻案内につれて入場すると敵襲に備へる程の機敏さで、已に、既に準備は整へられてゐる。二坪四疊もあらうといふ場内、早くも千客萬來で立錫の餘地もない。予等は辛うじて二階—上の寢臺—大向ふに腰を容れることが出来た位である。身動きもならぬといふのは此事で、足でも出さうものなら直ぐ土間—下の寢臺—に座を占めた一等客の代議士諸君の頭を蹴るといふ始末である。

急製萬國旗を蜘蛛手に張た下には、蓄音器が勇ましいマーチを奏して、來客の心を唆らせてゐる。歓迎を英、露、支、日の四ヶ國語で書き分け、ボール紙のプログラムに披露せられた、茶話會餘興の出演者たる代議士諸君のニツクネームと藝題などが讀まれる。聽て會は先づ藤野代議士の露語開會の辭に依つて始められた。何分會衆は日本人のみなので前川代議士通譯の任に當る。十餘日の短時間に、たゞ僅に一行に附せられた陸軍通譯、さては、道途、露國少女から片言隻語を教はつたのみと聞いてゐた、藤野君の露語は、極

めて流暢で、前川君の通譯亦明確、其要を得たものであつた。これこそ眞に驚嘆に値すと評せざるを得ない。

衆議院の露語の兩天才

藤野、前川兩君は同じ車室に於ける朝夕、互に相勵まし、螢雪の苦を積んだ結果、今日榮ある茶話會餘興の劈頭を飾るを得たのである。其發音其調子、宛然露人の演説である。兩君共、永年歐露に留學してゐたといふ觸込みで、聽衆を煙に巻いてゐる。心なしか、兩君の顔まで露西亞人に似てゐる、なぞ失禮な私語も聞える。拍手と喝采、列車を動かして、西比利亞の野に、遠く山彦して、満場の笑聲鳴りも已まぬ。露西亞人、日本人、吾々、然り、宜哉など、いふ、幾つかの單語を、極めて自由に驅使する藤野君の演説、又それを言下に通譯する前川君、兩者孰れ劣らぬ語學の天才であるとして好評噴々であつた。

軍扇高く上げて花の敦盛を

衆議院の隠れたる露語の兩天才の演説に、先づ場内に笑聲を漲らした後を受けて、議院

で云へば政、國兩派の對抗とでもいふ格で、憲政派の選手として場に現れたのは、議院では海運政策通を以て聞こえた正木代議士である。肩を怒らし右手に扇子を構へた恰好は正に政府攻撃の大演説をでも試みんとする姿勢である。一同の眼は氏の唇邊に集まり、其開かれるのを今や遅しと待ち受けた。そして低いが濫みのある、而も唸りのする聲の、経過プロセスと展開デプロイメント、さてはその頓挫に依つて、それは攻撃演説ではなく淨瑠璃「熊谷陣屋の段」であつたのを發見したときは、一同は今更ながら正木君の隠し藝に呆ツと度膽を抜かれたのであつた。

更に大なる期待を以て、耳を欬てると、手拍子、口三味線、立演といふ型を破つた、ハイカラ新式淨瑠璃で、眼を閉ち、又見開き、身を揺つて物語る處、今や氏は、關東一の旗頭、熊谷次郎直實に成り澄まし「オーイ〜」と軍扇を上げて沖なる平家の公達、花の敦盛を呼返すのである。駛るは汽車の使命。西へ西へと駛る我が汽車は、テムリュイを過ぎて日本の古英雄、智勇兼備の熊谷直實を載せて、バイカルへと急いでゐる。

長汀曲浦浪靜かなる須磨の浦邊、眠るが如く横はる淡路島」「オーイ〜」淡路島出身の

正木氏の熊谷が、扇を上げて敦盛を塵く聲は、車輪の軋る音に和して、遠く又、近く聞える。其刹那正木代議士の聲で「どうも聲が續かぬ」と始めて我に歸つて茶をグイと嚙む。一同は古い夢から醒めたやうに、其口々から讚嘆の聲を發するのであつた。惟ふに正木君の淨瑠璃は、確に、其演説よりも修練が積んでゐる。

典雅なる謠曲「安宅」の一齣

プログラムの順を追うて、中村書記官は其出演を促された。氏の太い喉頭と便々たる腹とは、正に美音の所有者たることを誰れも否も者はない。氏は物事に堪能な人のするやうに、遽に促しに應せず、暫し躊躇といふことを試みた後、予等と同じ向側の大向、薄暗い一隅に巨きな體を小さくしてゐたが聽て、朗々たる聲を張り上げて典雅なる謠曲「安宅」の一齣を靜に落付いた調子で謠ひ出でた。

ボン〜と打つ、原始的な鼓の音は聞えぬが、舞臺を踏む足拍手は、今にも響き渡りさうである。神飛び、魂消える思ひで、予等は耳を澄ましてゐると、いつの間にか、幽靈の

尾の如く漚てしない西比利亞の野、何處ともなく消えて了つた。

名人の聲樂美は皮肉に揶揄ふやうに

之れを機會に、誰やらが心配してゐた炊爨車の味噌の損害も、幸ひに極めて輕微なるを得たとて、給養係の某青年將校は、先づホット一息を漏らすと、續いて「無藝派」から兎や角と出演者に對し不謹慎、無禮な批評をあびせかけるといふ始末。凡そ一能一藝に秀でんとするものゝ悲哀は、無理解者の妄評である。予は心窃に出演者諸君に、多大の同情を表せざるを得なかつた。餘興は先づ之で一段落とし、司會者の宣する休憩の號令と共に茶菓は兵士諸君の手で運ばれて雑談の花が咲く。何人の惡戯ぞや、何時の間にか蓄音器のロールの上を辿る針は、無心に名人の聲樂の美を反響させてゐる。皮肉に揶揄やうに――。

死地に入った勇士の物語

軍事偵察 由上少佐

暫時休憩の後、チタから同乗した、イルクーツク陸軍特務機關附の由上騎兵少佐の講演を聴くことゝなつた。少佐は我が西比利亞出兵前、イルクーツク方面に特派せられ、所謂軍事探偵として極めて重大なる任務を帯び、同地方の情況を搜索し、苦心慘愴漸くにして其功を收めたる際、不幸、過激派の手に捕へられ、一度は死地に入りたるも、後幸ひにして我軍の進撃に遇ひ、萬死に一生を得たる勇士である。司會者の紹介が済むと、少佐は徐に口を開いた。軍人らしくそして重大任務を果たし、苦心と豪膽とを、其眉宇の間に表はしつゝ。――先程まで餘興に笑つた代議士諸君も亦、別人のやうに緊張した面持で、國家の重大問題の報告を聴くときのやうに、厳格な衆議院議員の態度に立歸つて。

光榮ある重大任務を擔ひて

少佐は先づ當時の後貝加爾州、特にイルクーツク方面に於ける、過激派並に之に對抗せる反過激派の情勢より説き起し、其間に處し自己の與へられたる、重大任務と其遂行の經過と、苦心の情を語ることに、極めて詳細であつた。實歴者の實歴談は宛然掌を指すが如

くであつた。假令少佐の言語は多からず、且、其之を驅使するに寡言であつても、开は極めて雄辯である。武人として擢んでられて此の重大任務を課せらる、又、光榮と云はねばならぬ。けれども此光榮に伴ふ苦心も、亦、言語の外であることは想像に難くはない。

寡言なる雄辯を以て

而して少佐は、慘澹たりし苦辛の幾十日を、其の寡言なる雄辯を以て説き去り、説き來るのであつた。幾度か危地に踏み入り、幾度か又、死の關門を潜つて、刻々に變化する情勢の推移に心を動かし、日夜心膽を碎いて、只管、任務の命するまゝに、身の危険をも忘れてゐた。重い任務を擔ひ、大いなる義務を負へる、變装した軍事探偵の心と其繊細な神經の尖端は、木の葉の音にも衝動して、打震へた。細心にして周到なる用意、而して勇氣と膽力とを要する、此の任務者は、或る時は心なき言動にも心を用ひ、或る時は又、全てを忘れて猪突邁進した。斯くて任務は着々遂行し、又成功を齎したのであつた。少佐は心から天佑を感謝した。

冷酷なる鐵門は堅く鎖された

斯かる間に、過激派の猛襲破竹の如く、其勢ひに乗じてイルクーツクに迫つた。計らざりき、少佐は此時、彼れ過激派の爲に、其身を包める秘密を覺られ、嫌疑者として竟に彼等の手に囚はれんとは。イルクーツク獄舎の冷酷な鐵門は堅く鎖された。永久に開かれざる門の如く。遣る瀬なき無念と不運とを嘆いた幾日を送り、不覺の涙に咽んだ幾夜は過ぎた。嘗ては天佑を感謝した少佐は、今、又、天を仰いで怨み、地に伏して哭かねばならぬ不幸なる運命を呪はざるを得なかつた。囚はれの身、死の残酷なる筈の下に置かれたる、當時の少佐の感慨果して如何。予の想像と筆とは、之を叙するに、开は餘りに深刻にして眞實であり過ぎる。

回顧に輝く其眼を睜つて！

少佐の寡言なる雄辯は當時を回顧し、獄窓生活の狀を説くこと極めて審かである。太陽

の輝きに浴せぬ地中に埋められたやうな獄舎の生活は、云ひ得ぬ不快と不安とに壓せられるやうである。人の世と隔絶した人の生活、囚はれたる徒の心は、常に人の聲に憧れる。少佐は折を見ては監視兵の眼を偷んで、掃除人の老爺に聲をかけて見た。定められた運命の下に佇まされた少佐の決心は、もう既に確乎たる武士的の覺悟を有してゐたことは言ふまでもない。然しながら、重大なる任務を帯びた身は、恙うした覺悟の前にも、尙、溢れ出づる強い責任感に悶えずには居られなかつた。少佐の苦衷は、人として、將又、我武士道に養はれた武人として、正に斯くあるべく、それは想像に餘りあることである。當時の實情と其衷情とを如實に陳べ得ぬ苦悶を、其眉宇に漲らしてゐた少佐は、語を轉じて獄中生活の朝夕を語り初めた。回顧に輝く其眼を睜つて。

唯一の「小さい希望の窓」

暗い獄舎、それは何れの國でも勿論さうであらうが、露西亞の牢獄は特に有名である。暗陰人を襲ふとは、正に其獄舎の光景であらう。随つて晝夜の辨別は殆どつかぬ。

それでも高く狭い獄窓に、蒼白い明るみを見ては、曉の到るのを覺り、刻々に黒く濃く彩られたる夕闇に、夜の迫るのを知つた。限られた唯一つの小さい窓。それは恰も、囚はれた徒にとつては「小さい希望の窓」である。懊惱に疲れた心に、遠く遙に狭い小さい蒼空を眺めては、自由に憧る、心を躍らし又深い思ひに耽るのであつた。

曆日なき獄舎に時と日を算へて

性來潔癖な少佐は、手足の爪を剪らんとて監視兵に之を訴へると、彼は悍猛な眼を光らして、「爪といふものは恙うして剪るものだ」として白い齒をむき出して嚙つて見せ、言ひ終らぬうちに、邪慳に重い潜戸をドシンと閉めて、後をも顧まない。無智蒙昧な彼等を憫みつゝ硝子の破片を探ねて漸くにして剪る。時に無心な小鳥の訪れを受けて、餌を漁る急がしい彼の運動に興を覚え、昔の隠者の如く、鳥語を侶として動搖して已まぬ人の心を忘れることもあつた。小首を傾げて見まもる小鳥の眼差。それは囚徒の身の上を憐れむやうでもあつた。獄窓から僅に漏れ入る太陽の細い光線、暗い獄舎の中に明かに劃せられた其一

線。それを便りに時の移るのを知つた。昔の人の試みた日時計といふものを、其壁と床とに刻んで、曆日なき獄舎に時と日の遷るのを獨り指折り算へたのである。

敵手に發かれざる尙一つの秘密

それは少佐の身に迫る運命、「死」の日と時とを算へる爲めであつた。然し又、それは少佐の胸奥深く藏せられ、而も尙、未だ敵手に發かれざる少佐と其運命を共にすべき残されたる、唯一重大な秘密があつた。少佐は自分の身に迫る悲しき運命よりは、寧ろ此の残されたる重大なる秘密の運命。其經過を日と時との解決に俟つてゐたのであつた。少佐は其囚へらるゝや、假令身は西比利亞の露と化しても、其命せられたる任務の遂行、それこそ今にして採るべき唯一の道である。少佐は斯く考へて其方法として、豫て腹心の一露國婦人に委ぬるに、暗號を以てせる一切の機密と報告書とを託し、其送達を命じたのであつた

物語を飾る挿話の女主人公

イルクーツク牢獄を脱して東京に通れ來た露國婦人「重大任務を帯びて」危地を潜りて」などといふ標題の記事は、當時の新聞紙を賑し、其露國婦人の寫眞杯を掲げ、興味ある話題とせられたことのあるのを予は今も尙記憶する。その露國婦人こそ、少佐の命を受けて艱難と辛苦の總てを嘗め、漸くにして敵手を通れ、完全に其任務を遂行し、由上少佐の信頼と期待とに酬ひた婦人であつたのである。婦人は一度は牢獄の人となつたが、脱獄の危険を冒して幸ひに成功し、更に幾度か危地を潜つて、遂に其目的を果した、堅忍にして義理堅い、而も雄々しい露國婦人の美點を現した其一部の代表的婦人である。邦人某の妻たるこの婦人こそ、實に、我帝國と由上少佐の爲めに、身を捧げた殊勳者であると共に、重大任務の擔當者たる、軍事探偵由上少佐の苦心と勳功とを綴る、尊い一篇の「物語」を飾る、挿話の女主人公である。

殷々たる砲聲は獄舎を揺り動し

或る日突然、殷々たる砲聲は獄窓を破つて轟き、獄舎を揺り動かした。夫れは終日熄ぬ。

翌日も翌々日も。さては愈々市街戦が開かれたなど、心に思つた少佐は、又、身に迫り来る運命を心待ちに待つた。胸に萬斛の怨みは抱いても、少佐の覺悟は盤石の如きものがあつた。それにしても戦況如何に——在留民の厚意で差入れられるパンの包紙、豫て窃に通じて置いた新聞紙。パンに指を觸れるのよりも、先づそれを手にした。標題を使つて轟く胸をおさへて拾ひ讀した。過激派及反過激派の情況如何戦局は——帝國政府の態度。さては軍事當路の判定と措置亦如何に。其包紙の新聞紙は悲しくも少佐の飢たる心を満たすに足らなかつた。摩擦して消えた活字の後を追ひ、其意味を捕ふるのに惱ましくも亦悶えずにはゐられなかつた。

牢獄の門は開かれたり

般々たる砲聲、霰々として已まぬ銃聲は、晝となく、夜となく鳴り響いた。時に又凄じい喊聲が起る。戦局如何。勝敗の數果して如何に。獄中獨り、其知るに由なき推移と結果とを豫想しては、胸を跳らし、見えざるものを見んとて、高き獄窓に攀登らうとも企てた

戦ひは反過激派の勝利に歸した。幸ひなる哉。——少佐は死に居て遂に死を遁れ生を離れて竟に生を得た——牢獄の門を開かれた。少佐は先づ第一に救ひ出された——由上少佐は斯くて萬全の功を收め、又死の刹那に生を贏ち得たのである。少佐の一時間餘に亘つた其講演は當時を叙説すること真に躍如として見るが如きものがあつた。そして幾度か聽者の手に汗を握らし、嘆息せしめた。

當年の活躍地を車窓に眺めつゝ

予は今其詳細を記述せんとするも、其性質上、尙、其時機に達せざるを思ひ、内容の機微に觸れざるを遺憾とする。由上少佐の講演は、實に軍事探偵の苦心と危険とを語る、尊い一篇の物語であつた。講演が終つても、尙、其餘談は容易に盡きぬ。汽車は漸くバイカル湖に近づきつゝある。我忠勇なる由上少佐は、我一行と共に當年の活躍の地たる、此地方の山容水態に思ひを馳せながら、イルクーツクに向はんとしてゐるのである。午前四時半、ムイソワヤ驛に着す。バイカル見ゆ。車中の一人が傳へるとバイカルといふ聲に誘は

れて、一行の人々、皆争うて車窓に倚つた。國亂れても、山河依稀として舊の如しである。バイカルの温容亦笑つて我等を迎へた。

西比利亞の明眸バイカル

落日に輝く靜な湖面

バイカル湖は見えた。汽車の進むに連れて、優しく懐しいバイナルの湖面は、眞に鏡の如く美しく、我等を引きつけるやうに近づく。砂漠のやうな後貝加爾の廣野を、幾日も幾日も駛つた我汽車は、漸くにして未だ見ぬ我等の愛人、バイカル湖と邂逅つた。美に飢た予の心と眼は其湖面に吸ひ付けられさうである。融けざる雪を峰に頂いた、バイカルの山は、突兀たる花崗石に丈夫の如く其強さを現はし。繊弱き彼女を圍繞して俯つてゐる。風なく浪靜かな湖面は、其山々と共に模糊としてアンガラの遠くに消えてゐる。微笑むが如き小波の上を、白い水鳥が迂り、又浮いてゐる。

美貌バイカル！彼女の美しい血の滴り、滴りを盛つたやうな、其大きな太陽は、榮ある世を終るやうに、靜かに彼方の山に沈まんとして、最後の光を湖面に投げ、彼女の優しい吐息の波を、金色に彩つてゐる。白い翼を金波の餘映に染めた水鳥の群は、一時にバツと天空に舞ひ上がる。

落日に輝く靜な湖面は例へやうもなく美しい。

彼女の有する其全身

バイカル湖は其面積略我が九州に較ぶべく、長さ約六百哩、最も幅の狭い處でも二十數哩に及ぶといふ。水清くして、深さ千四五百米突、氷結の厚さ五呎、是れ實に彼女の有する全身である。予等の汽車は湖畔に沿ふて駛つてゐる。

湖面の全景を右の車窓に收め、左の車窓を切り拓かれた山々に觸れんばかりに。僅に軌道の上を。ベレヨンナヤ驛を過ぎて、タンホイ驛に着くと、發着時間の不正確な我が汽車は此時ばかりは幸に三時間近く停車した。

我一行は先を争ふて車を降り、湖畔に佇んで、暮行く湖面を心ゆくまで眺めた。汀と線路との間には一面に青草萌えて、莖や素馨に似た草花が咲いてゐる。後に迫る山の、麓と山腹には、小さい鐵道官舎が湖面を瞰下して建つてゐる。其赭く塗つた色も決して醜くはない。

予は旅行の記念と後年の思出に

其傾斜を辿つて造られた細い路を走つて、湖邊に養はれた可憐な少年少女等は、我等の汽車に近づいて異郷の人と語り、其あどけない唇を動かす。欄に倚つて人形のやうな幼児を抱いた其の母らしい婦人は、いつものやうに其家の主人の歸るのを待ち設けてゐるやうである。――湖上の暮色を打眺めながら、――正に是れ平和を象徴した、一幅の畫圖である。予等は汀に降りて幾百、幾千年かの間、湖の水に洗はれて圓く苔に染まつた、數個の石をポケットに收めて歸つた。予は予の旅行の記念と後年の思ひ出の爲めに。汽車は發車してから間もなく、夜の帳は湖面をも蔽ふて了つた。予等は明朝、更に此の美しき湖面に、

再會し得らるゝのを樂みに寢臺に就いた。

湖上の落日と朝暾に別れて又會ふ

クドロワヤ、ウイドリノ、ムリノ、ウトリック等の各驛を寢ながらに過ぎ、スリヤジャ
ンカも夢と過ぎて、名も知れぬ小驛^{ラスエズト}をかすめて駛つたとき。車窓を染る曉の色に驚いて眼を覺すと、汽車は尙湖畔を巡つてゐる。湖の邊水に浸りさうな幾つかの小驛を過ぎると、夜は漸く明けはなれて、湖上を流れて來る拂曉の空氣は膚に冷めたい。クルトウク驛を離れると、馳て昨夕湖畔に別れた太陽と、今朝又湖畔にめぐり會ふた。「又再び」^{エツト、エゲン}の別辭をも交さなければ、「お早う」^{グド、モーニング}とも云はない。「時」は予等を美しい湖上の落日と、朝暾とに、別れて又、會はせてくれたのである。山も水も紅に染めて、勝利者の如く輝く、生々たるバイカル湖畔の朝暾は、雄大絶美である。

バイカル湖は實に、西比利亞の明眸である。沙茫沙漠の如き、涯しなき西比利亞の廣野に、鏡の如く輝くバイカル湖は、正に其美しい瞳である。それはまだ、偽善と虚榮とを知

らぬ處女の瞳である。美しいものゝ外、何物をも映さぬ、而も人知れぬ思ひに燃ゆる熱情を宿しながら、尙落着いた氣品を失はぬ、處女的美を表す明眸である。

氷の皮下は絶えず燃焼し沸騰す

雪に埋もれた無人の境、荒涼たる追放の國西比利亞も、水清きバイカルの點睛あり、此明眸のありてこそ、始めて生氣を認める。

而も浪なき靜かなる湖面の底は、常に鋭き感情に動搖し、厚く鎖されたる氷の皮下は、絶えず燃焼し、沸騰してゐるのではあるまいか？其處に又、西比利亞と西比利亞人の、深く大なる謎は、藏せられてゐるやうに思へる。美しき詩と傳説の幻妖は生れ、闇に叫ぶ黎明と、自由に憧憬るゝ、革命と人道の志士の、熱烈悲痛な思ひは潜んでゐるのではあるまいか？バイカル湖は、予に雄大なる美を示し、更に又、解し難き、西比利亞の秘密を告げたやうにも思はれる。

終世忘れ得ぬ其壯大絶美

バイカル湖は實に世界の絶美である。それは西比利亞に於て、只單に、絶美であるのみならず、更に又生命の泉である。荒涼たる曠野の旅に倦み疲れた時、其處に忽然として、漫々たる鏡の如きバイカルの湖面が、眼に入つたとき、誰か蘇生の思ひをせぬものがあらうか。渴いた旅人の心と眼は、其清く美しい湖面に吸ひつけられずにはやうか？

バイカルは實に、西比利亞旅行家にとつては、砂漠のオアシスである。露國の文豪チエホフも亦、バイカル湖の美を叙して「バイカル湖の水は、土耳其玉のやうな色で、黒海よりも更に透明で、優雅な温かい色調である。」といひ更に又「バイカル湖畔の旅は、實に壯大絶美である。予は永遠に忘れることができぬ」と嘆賞してゐる。チエホフの云ふが如く麗人バイカル！彼女の美は、其透明にして優雅なる色調を有するに於て、更に其美を加へ且、それが又、如何にも高尚にして氣品あらしめる。而して予も亦、チエホフと共に、西比利亞旅行に於て、終世忘れ得ぬものは、實にバイカル湖の絶美であると云ひたい。

湖畔に繋がれた汽船と浮船渠

前日来、湖畔に沿ふて駛つてゐた我汽車は、午前の日光に輝く山と水と、そして湖畔を彩る青い草原との間を縫ひ、幾つかの隧道を潜つて、二十八日正午近い午前十一時五十分湖畔の最終驛たるバイカル驛に着いた。バイカル湖は、其面積實に六百哩である。湖畔を巡るといつても、夫は僅に其一部分に過ぎない。西はムイツワヤ驛に初まり、鐵道沿線の突端、スリユージャンカ驛を其中央とし、バイカル驛を東方の最終驛として、略一晝夜を要するのである。バイカル驛は湖畔の停車場中でも、最も大きい驛である。此驛は湖上を航行する、汽船の發着所との連絡があつて、驛の直ぐ側には、三、四百噸級から五、六百噸級の汽船が、三四隻棧橋に繋がり、其附近には又大きい浮船渠が設けてある。

異人の顔を眺める少女を捉えて

湖邊に立つて湖上を眺めると、透明、優雅な水面には太陽の紅が映つて、得もいはれぬ

美しさである。湖を繞る山々、近きは湖面に其影を撮し、遠山亦、薄く夢の如く消えてゐる。清々しい、そして初秋らしい、清涼な空氣が身に沁みて、寒さをさへ感じる。我一行は此處でも亦、湖上を背景に、予等の側に立つて、珍らしさうに我等異人の面を眺めてゐた、露西亞の少女達を捉へて、共に記念の撮影を試みると、何時の間にか、髯むしやな露人がそつとカメラに這入つて了つた。彼は我等に向つて一寸失敬といった恰好で、手を舉げて笑つて行つて了つた、露人は無邪氣なものだ。

湖水に口濯ぎ草花を潤して

汽車が此驛に着くと、予等の列車に連結せられて居る、數輛の貨車の中から、乗客が續續降りて来て、皆湖水で口を濯ぎ顔を洗ふ。車中に飾つた空罐の花瓶に挿した、草花に水を吹くやら換へるのに、忙しさうである。石鹼の泡を立て、大きいタオルで身體を心地よささうに拭つてゐるのもある。夫が殊に、婦人に多い。不潔な彼等にも亦、清秀なバイカルの美しい景色と水に、旅の心を醫し、車塵に汚れた身を淨めることは、此の鐵道沿線

旅行中の、楽しみに數へられてゐるさうである。停車場構内の小さい賣店の前には、まだ朝飼を濟まさぬ、乗客の買物で混雜してゐる。賣店には僅に古い罐詰と、川魚の乾魚や、落花生などが駢べられてある許りだ。然し麵麩と煙草丈けは、道に可成り豊富であつた。此賣店の一隅に、日本の賣藥の廣告がブラ下つてゐるのも何となく面白い。草花の束を握つて車窓に群がつて來る、此附近の少年に有り合せた菓子袋を與へ、花束を貰つて、發車を告げる最後の鐘と共に、バイカル湖の絶景に別れを告げ、愈々イルクーツクに向つた。

水晶の如きアンガラの流れ

バイカル驛からイルクーツクまで四十餘哩の間、汽車はバイカル湖を源にして流るゝ、アンガラ河の清流に沿ふて、其左岸を駛る。車窓直に指呼せらるゝアンガラの流域は、道にバイカル湖に其の源を發してゐる丈けあつて、其風景亦絶佳である。稍急流ではあるがバイカル湖の氷を融かした其水は清冽玉のやうである。水を距てた右岸の景色亦、清新にして美しい。西比利亞松に蔽はれた其山、其林。そして其處、此處に見ゆる別荘風の瀟洒

な建築、河中に溢れ出たやうな、洲の上には、夏草萌えて、放牧の牛馬が水を慕ふて群がり、楽しさうに遊んでゐる。水に口を濡らしてゐる馬、蹲まつて靜かな眠りに入つてゐる牛、其靜寂な平和の光景は、水晶の鏡のやうなアンガラの流れに映じて、畫よりも更に美しい。釣を垂れる男、急流に掉さす少年、衣類を河水に濯ぐ女、いづれは皆畫中のもたらざるはなしである。河に沿ふて溯ること三時間にして、車窓遙に、イルクーツクの市街が展けて見える。

丘陵に建ち駢ぶ、赤い煉瓦の兵營、さては、雲際高く聳ゆる寺塔が先づ眼に入る。聞きしに優る大都市らしい。

閑雅の都イルクーツク

劍を抜いて威嚇する巡查

イルクーツク停車場に着いたのは、午後三時二十分であつた。駐屯部隊長馬淵大尉以下の出迎へを受け、直に自動車に分乘して我兵營を訪問すべく其處に急いだ。此停車場も亦

他の停車場の例に漏れず雑踏を極めてゐる。狭い驛前には馬車が無秩序に、馬と馬との鼻合せをする程澤山に集まつてゐる。警戒の巡查がそれを制し切れないで、長い剣を抜いて威猛高に馭者を喝し罵つてゐる。恚ういふ光景は日本内地などではとても滅多に見られるものではない。此混亂した停車場を出た我一行の自動車は、間もなくアンガラ河とイルクト河との合流點に架した、長い橋を駛つた。此橋は、毎年解氷期から結氷期まで使用せられるものであつて、構造は一種の吊橋である。約十町もあらうかと思はれる、中程で一寸折れて、橋上の其處、此處には警戒のチエツク兵が立つてゐるし通行料の徴收人もゐる。勿論、此橋は解氷中の臨時架橋で、一度結氷すれば河上を自由に、馬車や、橋を駆けさせるのである。橋を渡ると愈々、イルクーツク市街に入るのである。

第一線の出征部隊を慰問す

我一行は先づ、市中に所在する、露國兵營内に駐屯の馬淵中隊を訪問し、營門外に整列出迎への將校諸士と挨拶を交換して階下食堂に於て中隊將校諸君と共に午餐の食卓を共に

し兵舎内で入浴の後全中隊の將卒一同に對し、東團長から慰問の辭を述べ、馬淵中隊長亦之れに對へた。嘗て武藤陸軍少將の、オムスクに使せる當時、其護衛の爲に隨行した歩兵一ヶ中隊があつた。今、此イルクーツクに駐屯する、馬淵中隊は即ちそれである。此地は所謂、バイカル湖以西に屬し、聯合軍の協定地域外であるが、右の理由で同市に駐屯し、我居留民の安寧秩序の維持に任じてゐるのであるといふことである。だから、我西比利亞派遣軍隊としては、第一線にある部隊で、遠く其主力と懸隔し、隨つて給與は勿論、種々の不便も多いとは、駐屯將校の述懐であつた。然し幸ひに、市長を始め市の當局者は勿論各顯官等から厚い信頼を受けてゐるのみならず、他の外國駐屯軍たる、チエツク及ルーマニヤ軍との折衝も圓滿に行はれてゐる。現に一行の乗つた自動車の如きも、チエツク軍から厚意を以て提供せられたものであつたさうである。東團長の慰問の辭にも、亦、此第一線に駐屯する困苦を特に憐み、多大の同情を寄せ、チタから約三日間の行程をも遠しとせず、特に慰問の爲めに來れる旨をも述べた。馬淵中隊長等は、遠隔の地に在る部隊のこととして、慰問を受ける機會も少い折柄、我議員團の慰問を兵士等は日待ちに待つてゐた。予

等將校として當然の職務に在る者と雖、特に嬉しく懐しいとて、部下慰安の苦心を語り、其感懐を漏らしてゐた。一行は中隊の將卒諸君と共に、其處で記念の撮影をなし、兵士の悦びの顔は、悉く其儘、カメラに收められた。撮影後、當市駐在の若杉領事官補等の來訪を受け、それから直に、市内見物の爲め再び自動車を駛らした。例のチエツク軍厚意の自動と運轉手を煩はして。

孤城を死守した六百の勇少年

我駐屯兵舎の營門前、道路を隔て、大きい、二の隣合せた建築が見える。煉瓦は毀たれ硝子窓は打破られ、人なき此の建物は、見るからに在りし當時の慘狀を語つてゐる。即ち一つは陸軍幼年學校で、其隣は陸軍速成士官學校であるとの説明に、成る程と肯かれた。由上少佐の講演で聞いた、イルクーツク市街戦の生々しい名残りば、今現に、眼前に横はつてゐる。一千九百十八年十一月に至り漸次東進したる過激派軍の常市街に突入するや、之れに對抗して、獨り決然として先づ起つたのは、此兩學校の生徒六百名であつた。彼等

は學校を守城として、渾身の勇を奮つて護り、且、銃火を交へたのである。駐屯軍隊悉く降りて雄々しくも孤城を死守して激戦八日間に及べる學校は銃砲の彈痕、點々指摘し得るといはんよりは、悉く其痕ならざるはなき有様である。それは學校のみではなく、附近の家屋、殊に目下駐屯せる我兵舎の如きも、随分其痕を留めてゐる。出門先づ第一に、此新なる古戰場を弔ひ、兩校勇少年の奮戦の狀を偲たる後、市内各所を驅け巡つて、イルクーツク市街の外觀を瞥見した。我領事館出張所や、居留民會の所在を探ね、ポリシヤの大通をも見物した。

西比利亞の巴里イルクーツク

街衢整然として、煉瓦や石道の宏壯な建築が、軒を駢べ、洵に聞きしに優る、都會らしい、大都會である。蒲潮、哈爾賓、滿洲里、知多一行が經て來た、何れの都市よりも數等優つてゐる。殊に寺院の多いのは何となく此市をして品位を高からしめてゐる。トムスク及オムスクに所在の兩寺院と共に西比利亞の三大寺院と稱せられる、本山ザポール大寺院

の如きは、殊に人目を惹く壯麗な大建築である。

イルクーツク市は或意味に於て、西比利亞の最大都市であり、又、閑雅、壯麗なる點に於ては西比利亞の巴里とも稱すべきである。蒲潮、哈爾濱に勝り、ブラゴエシチエンスク、ハバロフスクに秀で、而してオムスクよりは遙に其施設が整つてゐるといふことである。

洗鍊された其市と市民

西比利亞の都市として、勿論人口は精確に知るを得ぬが、二十五六萬から三十萬近くあるといふことである。此地は富豪、顯官等の居住する者多きのみならず、諸種の官公衛及多數の學校所在し、随つて其建築の如きも、他の都市に於て見る木造は極めて少く、殆んど石造、煉瓦造りの壯麗な大建築のみである。予等は此市に來て、始めて歐洲風の都市を觀たやうな感じがした。市街既に斯くの如く閑雅高尚である。其市民も亦、自ら他の市民とは、舉措風姿に於て其趣を異にしてゐる。イルクーツクは一見にして云へば、市と、其市民は洗鍊レツアイシされてゐる。西比利亞に於ける貴族的な、そして、又、同時に女性的な都市である。

ある。

予等の自動車は市の背面高地に登つた。其處から瞰下すると、市街は繪の如く美しく展開する。白聖の多い街には、數多の寺塔高く碧空に聳え、午後の烈日は金字を輝かしてゐる。イルクトとアンガラの兩河の合流點に枕み、山と水と、そして樹の配合は如何にも市街に相適はしく、且、美觀を添へてゐる。土曜日の午後の市街は靜寂にして、清楚な若い尼のやうに、彼女は、今、肉の安息日を擅にしてゐる。予等の今立つてゐる其高地に寺院がある。東京で云へば九段坂のやうな此高地こそ、過激派軍が砲列を布いて、市街を亂射し、且、幼年學校や士官學校を砲撃した陣地であつたのだ。千九百十七年十二月二十二日から八日間に亘る市街戰に、過激派軍の暴威を揮つた根源地は即ち此處である。由上少佐が獄舎で聞いた砲聲の起りは、實に此附近であつたのだ。予等は、今現に、其處に立つて由上少佐から現地説明を聽いたのであつた。

殷々、轟々たる砲聲、アンガラの彼方に響き、聽て市街を揺り動かすと、阿鼻叫喚の聲起る。閑雅の都、イルクーツクの、女性的な市街が、過激派軍の毒手を洩れる、砲彈の一

發、一發に混亂し、修羅場と化された酸鼻の状は、今も尙、實に想像に餘りある。

世にも稀なる皮肉の象徴

我一行の當市滞在は極めて短く、僅かに一日間の豫定である。随つて市街の見物も急がねばならなかつた。高地から廣い坂路を下つた自動車は、市の公園の入口に停まつた。其入口の眞向ひに、大きい白壁の建物がある。是が即ち、後貝加爾州と、イルクーツク縣とを統轄する、總督の官邸であつた。此官邸も、又、慘憺たりし市街戦の痕を留めてゐる。小銃弾と砲弾との雨を浴びて、形容以上、蜂の巢の如くになつた官邸は、過激派軍の目標として、彼等の密集射撃を受けた此官邸は、自ら其當時の慘狀を語つてゐる。總督官邸の庭園植込の中には、百有餘の墓標は累々として建てられてある。それが官邸を死守した味方の、勇士の忠靈を祠つてあるのかと思つたら、否々然らず、仇敵過激派軍の士卒の死屍を、殊更に、彼等が破壊の目標とした、此の官邸に埋めたのだといふ、世にも稀なる皮肉の象徴である。所謂、露西亞人心理の一反映ではなからうか？

革命黨員アレキサンダー第三世

公園に這入ると、直ぐ眼を惹くものは巨大な銅像である。正面に立つて之れを仰ぐと、それは、アレキサンダー第三世の、英姿颯爽たる立像であつた。大理石よりも更に美しく磨かれた、花崗の臺の上に立つた大帝の風貌には、廢帝を偲ばせるものがある。右手を胸にあて、左手を下げた大帝は、心持ち右足を踏出して、東方を凝視してゐる。「東へ！東へ！」臺石には、此露國の傳統的経路たる、東方經營の標語が文字と云ふ皮肉なものに貽されて、其國內の分裂、潰亂した今日に於ても、尙、極めて明かに讀まれる。

嘗て皇宗の銅像に對しても、尙、生けるが如く、強て其尊嚴を保たしむるに急にして、且、極端であつた、帝政時代の露國に於ては、此銅像の前にも、銃劍嚴めしい番兵をして監視せしめ容易に近よらしめなかつたさうである。そして、毎年冬季、此アレキサンダー第三世に殉じ、銅像の犠牲となつて凍死する兵士は、必ず三四名は下らなかつたといふ。「銅像に殉死！」は舊露國に於てのみ聞くべき國家的逸話であらう。爾來露國の國狀日に非

にして革命の運動隨所に蜂起したる當時、此市の革命黨員等は、此銅像！大帝が胸にあてた右手に、赤い革命旗を握らしめ、之れを公園に蝟集する市民に觀せて、一種の凌辱と、其宣傳に用ひたさうである。「東へ！東へ！」東方侵略の標語を宣し給ひし、アレキサンダー三世は、一瞬時にして革命黨員と化し、而も、赤旗を握らしめられた其姿勢は、如何にも示威運動の先登に飛立つてゐるやうであつたらうと思ふと、予は獨り笑ひを禁じ得なかつた。革命黨員が銅像を毀たずして、却て此皮肉を敢てす、茲にも亦、所謂露西亞人心理の閃きが認められる。

自然の景趣を収めた美しい花園

所謂「權力の壯大と其奴隸」の幾時代を贏ち得た、舊露國の一遺物たる、アレキサンダー三世の銅像と、其周圍に漂ふ興味ある物語りとを聞いた後、予等は歩を移して公園内を散策した。園内の規模、設備等何等特に記すべきものなく、只、一種のガーデンといふ感じであるが、それがガーデン風であるだけ、それだけ、鬱蒼たる樹木の茂りこそ見えぬ

豊かな美しい草花で彩られてゐる。けれども、其位置に於ては洵に形勝の地を占めてゐる。アンガラの清流に沿うて、其河畔に設けられた此公園は、自然の景趣を収め得たる稀に觀る美景である。閑雅にして女性的な都、イルクーツクには、實に相適はしく、且克くそれを表徴してゐる。

河畔に立ち、欄に倚つて、河上を眺めると、滄々として流れて已まぬアンガラの水は、飽まで清く、且、自由である。對岸の松や樺の、こんもりした林は、其影を水に映し、煙りのうちに消ゆる其流れの末は、遠い未來の夢を唆る。

アンガラの水は流れて已まぬ

河に枕んだ瀟洒なカフェエの椅子に凭れて、アイスクリームの融けるのを忘れ、其眺めを擅にするとき、手にしたスプーンは動かうともせぬ。自由に且清く、アンガラの水は流れて已まぬ——古き數百、千年の昔より。人の群がるイルクーツク市が建設せられて公園が造られ、アレキサンダー三世の銅像が建立せられて、市民が跪拜し、其英姿に景